

富山大学人間発達科学部・附属学校園
共同研究プロジェクト平成 18 年度報告書

富山大学スクラムプラン

ー学校バリアフリーへの挑戦ー

2006

富山大学人間発達科学部
富山大学人間発達科学部附属幼稚園
富山大学人間発達科学部附属小学校
富山大学人間発達科学部附属中学校
富山大学人間発達科学部附属養護学校

富山大学人間発達科学部・附属学校園
共同研究プロジェクト平成18年度報告書

富山大学スクラムプラン

－学校バリアフリーへの挑戦－

2006

富山大学人間発達科学部
富山大学人間発達科学部附属幼稚園
富山大学人間発達科学部附属小学校
富山大学人間発達科学部附属中学校
富山大学人間発達科学部附属養護学校

はじめに

富山大学人間発達科学部と附属学校園の共同研究プロジェクトは、平成 17 年 10 月にそれまでの教育学部が人間発達科学部に改組されて以来、「学部及び附属学校園共同プロジェクト運営委員会」は附属学校運営委員会に吸収され、平成 18 年 10 月からは、新たに附属学校運営委員会の一つの仕事として行われることとなった。

そのため、まずは、附属学校園と大学側の関係者が集まり、どのようにこの研究を進めていったらよいか協議を重ねた。いわゆる大学側の研究を主体とした主張と、附属学校園側の現場に即した研究とのからみあいがあって当初はなかなか議論がかみ合わなかった部分があった。しかしこの会議は本音を出せたものであった。これまで、ややもすると共同研究は一つの方向にそって進んできた感じがあった。そこで、単にやらされているのではなく、附属学校園にとっても、大学側にとってもやりたいこと、できそうなものをあげ、無理矢理各グループに配属するのではなく、個々の教員が自分の希望で自分のための研究をするように、少しずつやりながらもう一度新たな道をさぐろうとするのが今年であった。

グループ研究の充実は何よりも得難く必要なものである。附属学校教員にとっては、新しいものの考え方を得ることになるであろうし、大学側にも実践研究のメリットがある。今年は昨年と比べると、幼小連携、先端研究の共同利用などの研究グループが増えた。それぞれのニーズによるものであり喜ばしいものである。研究が単にまとめるためにだけにではなく実際の力になっていくのが嬉しい。幸いにして今年は、教育養成 GP の採択事業「授業カンファレンスによる学級指導力育成」が実施され、大学院生を中心にして、学部学生もまきこんでの研究が展開されようとしている。このことは、附属と大学が一体となって、新しい教育の方法をさぐるものとして注目に値する。

この4月からは、学部の中にも附属学校園との連携を深める担当の学部長補佐が誕生する。附属学校運営委員会としては、富山大学人間発達科学部が全員の協力のもとに、新しい研究をどのようにするか、実際に代表者をふまえた会議でさらに検討を重ねたい。そういう意味においてこの報告書を元に更なる充実をしていきたいと考える。

平成 19 年 3 月

富山大学人間発達科学部附属学校運営委員会
人間発達科学研究実践総合センター長
市瀬和義

目 次

今年度の活動の概要	1
グループ研究	
理科教育	5
社会科教育	33
生活・総合	41
情報教育	55
国際理解教育	67
先端研究の教育利用	79
学校保健	87
幼小連携	95
交流	99

今年度の活動の概要

(1) 今年度の方針

平成17年10月、富山大学教育学部は富山大学人間発達科学部に改組され、それにもない、従来の「教育学部及び附属学校園共同研究プロジェクト運営委員会」は「附属学校運営委員会」に吸収された。平成18年3月9日の第2回附属学校運営委員会において、学部と附属学校園との共同研究が議題とされ、これまでの実績や今後の両組織の連携を考え、今年度も学部と附属学校園との共同研究プロジェクトを実施すること、プロジェクトのあり方については引き続き検討することが了承された。同時に、附属学校運営委員会のもとにプロジェクト推進のためのワーキング・グループを設置することも併せて了承された。

平成18年4月19日、4月26日の2回、今後のプロジェクトのあり方について、学部と附属学校園の関係者の間で広く意見交換を行なった。それを受けて5月9日に第1回ワーキング・グループ会議が開かれ、今年度は以下の内容で実施することとされた。

1) 研究の運営

今年度は、①グループ研究、②研究交流、の二つの柱で研究を進める。自発的な研究を広く募るためにグループ研究の条件を緩和し、2校園以上の参加があればグループを組めることとする。共同研修会は、時間的な制約もあり、日程調整が難しいため実施を見送る。

2) 研究の組織体制

附属学校運営委員会のもとにワーキング・グループを設置し、プロジェクトを推進する。

- ・附属学校運営委員会： 全体の掌握、方針の確定、予算の決定
- ・ワーキング・グループ： 研究の具体的な調整と推進

3) まとめと評価

年度末に研究の成果をまとめた報告書を作成する。

(2) 研究の推進

今年度の二つの柱の状況は次のとおりである。

1) グループ研究

今年度は、当初11のグループ研究が提案されたが、最終的には以下の9つのグループ研究が実施された。各研究グループの内容、代表者等は次のとおりである。

グループ名	研究内容	代表者
理科教育	理科の授業実践について、テーマを決めて、単元構想を行い、実際の授業を通して、検証する	松本謙一（学部）
社会科教育	おもしろい社会科の授業づくりを考える	岡崎誠司（学部）
生活・総合	幼稚園（生活単元学習）・小学校（生活・総合）の授業をビデオに撮り、授業分析を行いながら、支援のあり方を探る	黒羽正見（学部）
情報教育	4校園の情報活用環境の改善、4校園の教員の情報活用能力の向上、小中学校の児童生徒ならびにPTAを対象とした情報モラル講習会	小川亮（学部）
国際理解教育	国際理解教育について考える	田尻信一（学部）
先端研究の教育利用	教育現場の教員、先端研究の素材をもっている研究者、コーディネータの三者の立場を重視しながら、先端研究の題材を学校現場で学ぶべき内容に即した教材につくりあげるプロジェクトを立上げ、実際に活用してその効果を実証する（例： 気象、ゲノム、地震など）	林衛（学部）
学校保健	附属学校園の児童生徒に対するストレスマネジメント教育の成果	稲垣応顕（学部）
幼小連携	幼小連携について考える	小林真（学部）
交流	交流学習のなかで子どもの課題にどう取り組むかを探る	書川隆行（附属養護学校）

2) 研究交流

研究交流については、昨年度に引き続き、附属学校園間で行われた。

(3) ワーキング・グループ会議

- 第1回 5月 9日 ・今年度の内容の決定
第2回 11月14日 ・今年度の予算執行・報告書作成について
・来年度の内容について

(4) 運営組織

○附属学校運営委員会

- ・学部 山西潤一（学部長）、市瀬和義（附属人間発達科学研究実践総合センター長）、堀田朋基（教務委員長）、米田猛（発達教育学科長）、北村潔和（人間環境システム学科長）、野平慎二
- ・附属小学校 雨宮洋二（校長）、瀬戸健（副校長）
- ・附属中学校 新里眞男（校長）、陽堅友（副校長）
- ・附属養護学校 芝垣正光（校長）、定塚喜隆（副校長）
- ・附属幼稚園 生田貞子（園長）、吉川真利子（副園長）

○ワーキング・グループ委員

- ・学部 黒羽正見、小林真、田尻信一、野平慎二
- ・附属小学校 瀬戸健、澤柿教淳
- ・附属中学校 京角輝彦
- ・附属養護学校 書川隆行、背戸みちる
- ・附属幼稚園 廣田仁美

グループ研究

理科教育グループ

(部員) 世話人 松本謙一
 附属小 澤柿教淳、橋本大一郎
 附属中 堀田 充、堀 篤史、新田 稔(授業提案者)
 学 部 原 稔、市瀬和義、棚座圭太郎、片岡 弘、林 衛
 研究協力 大橋佳子(学部3年)

(計12名)

研究主題

日常生活との関連を図り、
 主体性の高まりをめざす理科学習の在り方

【研究の方法】

- ・年5回の部会研修、並びに8回の授業研修会を実施する。
- ・附属中学校 新田教諭は、提案と授業実践を行う。
- ・附属小・中教員並びに大学教員は議論に参加するとともに、実践後、考えさせられたことを各自がまとめる。(分担)
- ・プロジェクト終了後、参加者を募って研究の成果を実践研究論文にまとめる。

【研究の経過】

	日時	場所	研修内容
第1回	H18. 7. 6	附属中学校 第1研修室	○これからの取り組みについて ・中学校の授業実践を中心に研究 ・中学校1年の題材「身の回りの物質」の共通理解
第2回	H18. 8. 28	附属中学校 第1研修室	○授業研究の意味 ・研究主題の検討
第3回	H18. 9. 29	附属中学校 第1研修室	○研究授業の展開を検討 ・学習の流れの具体化
第4回	H18. 10. 31	附属中学校 第1研修室	○研究授業の展開を検討 ・学習展開の具体化
第5～ 12回	H18. 11. 13 ～12. 1(全8回)	附属中学校 第2理科室	○研究授業観察 第1時～第8時(題材の連続観察)
第13回	H18. 12. 25	附属中学校 第1研修室	○研究授業の考察 ○研究のまとめ

1. 研究の目的

平成15年度に国立教育政策研究所、教育課程研究センターから、全国の小・中学校に対して、小・中学校教育課程実施状況調査が行われた。そして、17年の9月にその質問紙調査集計結果が発表された。集計結果の中には、小学5年から中学3年までの児童・生徒を対象に、国、社、数（算）、理、英の5教科（小学校は4教科）についての質問とその回答結果が記載されている。その結果を見ると、「理科が好きだ」という質問に対して「そう思う」と回答した児童・生徒が、小学5、6年、中学2、3年で5教科の中でも最も高い割合を示し、トップであることがわかった。その反面、「理科の勉強は大切だ」、「理科を勉強すれば、私のふだんの生活や社会に出て役立つ」、「ふだんの生活や社会に出て役立つよう、理科を勉強したい」という質問については「そう思う」と回答した児童・生徒は、すべての学年において低い割合を示し、5教科の中でも最下位であることもわかった。（資料1参照）このことから、児童・生徒は「理科は好きだけど、理科の学習は現在や将来に役に立つようには思えない。だから、大切とは思わない。」と考えているように思われる。これは理科学習が、生徒にとって、あくまでも学校で学ぶだけのものと感じていたり、受験のための学習となっていたりして、実際に生活の中で生きてはたらく力になると実感できないことがその原因の1つとして考えられる。逆に、理科学習が日常生活で役立つと感じたり、社会に出て役立つと感じたりして、その必要性や重要性を実感することができれば、生徒の理科に対する興味・関心や主体性が今まで以上に高まるのではないだろうか。このようなことから、現代の理科教育の課題の1つとして、理科学習と日常生活との関連が極めて大きな課題となっている。

そこで本研究では、理科学習の中に積極的に日常生活との関連を取り入れることにより、生徒の学習意欲や理科学習の必要性、重要性への意識がどのように変化するかを探ってみたいと考える。その際には、実際の指導要領での学習を、より広げ深める発展的な学習を取り入れていきたい。

《資料1》

平成15年度 小・中学校教育課程実施状況調査（全国抽出生徒）

平成17年9月 国立教育政策研究所教育課程研究センターより報告（一部抜粋）

（質問1）〇〇が好きだ

（質問2）〇〇の勉強は大切だ

そう思う（％）

そう思う（％）

	国語	社会	数学	理科	英語
小5	21.8	24.2	34.6	43.9	
小6	17.5	29.6	31.8	34.5	
中1	16.6	25.8	23.4	30.6	33.6
中2	14.2	24.9	20.3	27.7	25.6
中3	18.6	24.9	22.9	33.2	25.4

	国語	社会	数学	理科	英語
小5	54.9	50.7	65.7	43.1	
小6	51.9	47.4	65.0	35.5	
中1	46.3	33.5	53.7	30.7	61.0
中2	43.0	29.9	46.7	29.5	58.1
中3	47.3	37.6	42.7	31.0	60.3

(質問6) ○○を勉強すれば、私のふだんの生活や社会に出て役立つ

そう思う(%)

	国語	社会	数学	理科	英語
小5	42.2	43.0	51.0	29.6	
小6	39.7	32.6	48.8	23.2	
中1	36.5	23.6	37.1	18.6	44.9
中2	34.2	19.3	28.7	16.9	41.9
中3	39.3	27.5	24.1	17.6	44.6

(質問10) ふだんの生活や社会に出て役立つよう○○を勉強したい。

そう思う(%)

	国語	社会	数学	理科	英語
小5	34.4	33.6	41.7	27.7	
小6	31.0	28.8	39.3	22.2	
中1	27.6	22.4	30.7	19.3	40.2
中2	26.0	19.6	24.8	17.5	37.3
中3	31.0	24.6	22.8	18.2	40.7

2. 研究の内容

(1) 主題説明へ向けて

1) 日常生活の中で用いられる材料を用いる。

理科の学習では、日常生活とは無縁な特殊な器具や薬品を用いることが多い。その理由は、自然事象の中に潜む規則性や事象相互の関係を学習するときには扱う事象を単純化する必要があるため、特別な器具や薬品を用いるのである。しかし、これだけでは、学習への興味・関心を失い、何のために学習するのかという疑問をもったり、日常生活の問題解決への応用力がつかないおそれがある。したがって、可能な限り、日常生活の中で入手できる器具や薬品に関連づけて用いる。

2) 日常生活の事象の中から課題を見だし、動機づけをする。

生徒にとって興味・関心が高まるのは、身の回りの疑問や好奇心から学習が始まるときである。しかし、実際には日常生活の中から目的となる課題が出ることは難しい。そこで、日常生活の中の疑問などを学習課題としてを取り上げるように工夫する。

3) 学んだ知識を日常生活と関連づける。

学んだことを日常生活と関連づけて考察することにより、理科の学習が日常生活に密接な関係があることを感じ、それが学習への興味・関心を高めることとなる。

4) 環境教育と関連づける。

環境問題との関連をはかることにより、学習内容が自分たちの生活により身近なものとしてとらえさせることができる。

5) 生徒の興味・関心を高める発展的な学習を位置づける。

学習指導要領の範囲外であっても、生徒の疑問を解決したり、学習内容をより深めたりするような発展的な学習を全体計画の中に位置づけることにより、生徒の興味・関心を高め、理科学習の大切さや必要性を実感させる。

3. 本研究の授業実践について

(1) 研究の具体的な方法

- ・授業題材は1分野「身の回りの物質」で行う。
- ・附属中学校1年生4クラスを対象に授業実践を行う。
- ・日常生活と関連した内容を授業の中で取り入れるクラス（以後、日常生活関連クラスという）と教科書にそって授業を行うクラス（以後、普通クラスという）とに分けて、比較を行う。比較項目は授業ごとの感想や題材最後のレポート、事前・事後のアンケート（資料2）により比較する。
- ・学習における実験は、クラスによって学習内容に有利・不利が無いように、日常生活関連クラス、普通クラスともにすべて同じものを行う。ただし、日常生活関連クラスにのみ、導入で日常生活との関わりを意識させるために、家庭ごみを調査する事前レポートを行う。また、日常生活関連クラスは、毎授業の中で日常生活との関わりについて話し合ったり、考えさせたりすることにより、普通クラスとの区別を行うものとする。

資料2 事前・事後理科アンケート

- | | |
|---|----------------|
| 5 | そう思う |
| 4 | どちらかといえばそう思う |
| 3 | どちらかといえばそう思わない |
| 2 | そう思わない |
| 1 | わからない |

- (1)理科の勉強が好きだ。
- (2)理科の勉強は大切だ。
- (3)理科の勉強は、受験に関係なくても大切だ。
- (4)理科を勉強すれば、私の受験に役立つ。
- (5)理科を勉強すれば、私の好きな仕事につくことに役立つ。
- (6)理科を勉強すれば、私のふだんの生活や社会に出て役立つ。
- (7)理科を勉強すれば、私は、疑問を解決したり予想を確かめたりする力がつく。
- (8)受験に役立つよう、理科を勉強したい。
- (9)自分の好きな仕事につけるよう、理科を勉強したい。
- (10)ふだんの生活や社会に出て役立つよう、理科を勉強したい。
- (11)将来、理科の勉強を生かした仕事をしたい。
- (12)疑問を解決したり予想を確かめたりする力がつくよう、理科を勉強したい。
- (13)理科の勉強は、自然や環境の保護のために必要だ。

(2) 授業の題材について

1) 題材名 「身のまわりの物質とその性質」 中学1年生(1分野)

2) 題材に対する学習指導要領

身の回りの物質

身の回りの物質についての観察、実験を通して、固体や液体、気体の性質、物質の状態変化について理解させるとともに、物質の性質や変化の調べ方の基礎を身に付けさせる。

ア 物質のすがた

(ア) 身の回りの物質の性質を様々な方法で調べ、物質には密度や電気の通りやすさ、加熱したときの変化など固有の性質と共通の性質があることを見いだすとともに、実験器具の操作、記録の仕方などの技能を身に付けること。

(ア) について

身の回りの物質はいろいろな性質をもっており、物質を見分ける手掛かりになること、また、それらの性質に着目して物質を分類できることを観察、実験を通して見い出させる。その際、加熱の仕方、実験器具の操作や記録の仕方などの技能を習得させる。ここで扱う物質としては、身近な固体などの物質を取り上げ、それらについて密度や電気の通りやすさ、加熱したときの変化などを調べる観察や実験を行う。例えば、金属については、導電性、金属光沢などの共通の性質があることに気付かせる。また、プラスチックや砂糖などの有機物は食塩や金属などの無機物と異なり、焦げて黒くなったり、燃えると二酸化炭素が発生することに気付かせる。密度については同じ体積でも質量が異なるものがあることを知る程度とし、計算については扱わない。なお、観察や実験に当たって、感電や火傷などの事故防止に十分留意することが大切である。

(内容の取り扱い)

(ア) の(ア)については、有機物と無機物との違いや金属と非金属との違いにも触れること。「密度」については、同じ体積でも、質量が異なるものがあることを知る程度にとどめること。

3) 本題材にかかわる小学校での既習事項

○3学年 物質とエネルギー

- ・電気を通すものと通さないものがあること。
- ・物には、磁石に引き付けられる物と引き付けられない物があること。

○4学年 地球と宇宙

- ・水は、温度によって水蒸気や氷に変わる。
- ・金属、水、空気の温度変化による体積変化。

○5学年 物質とエネルギー

- ・物が水に溶ける量には限度があること。
- ・物が水に溶ける量は水の量や温度、溶ける物によって違うこと。また、この性質を利用して、溶けている物を取り出すことができること。

○6学年 物質とエネルギー

- ・酸素と二酸化炭素の性質
- ・水溶液には、酸性、アルカリ性及び中性のものがあること。
- ・水溶液には気体が溶けているものがあること。
- ・水溶液には、金属を変化させるものがあること。

4) 物質の学習の系統性について

物質の概念が小学校から高等学校に至る教育課程の化学の目標にどのように反映されているかは次のようになっている。

①小学校

身の回りでの事象・現象の観察や実験を通して、ものが存在することに気づかせる。

②中学校

物質や物質が関係する現象の規則性を通じて、巨視的観点および微視的観点からの物質観を確立させる。

③高等学校

物質観をさらに精密化・定量化・体系化させるとともに、人間生活や社会と関係の深い物質・現象に適用させる。

このような学習の流れの中、中学校理科の化学分野では巨視的視点と微視的視点の両面から物質に関する概念を身につけさせることが主要な目標である。したがって、この段階が物質概念の形成にとって、もっとも重要な段階であるといえる。そこで、中学校の学習の中での1年生の段階では、物質を巨視的観点から見る 것이大切になってくる。

巨視的観点から見た物質観は、様々な性質が同一であるものは同じ物質であるにとらえることによって成り立つ。そして、物質の様々な性質は五感を使った感覚的認知による同定と区別、実験操作による性質の把握、物質の性質の定量化、物質の成分や組成の明確化という過程で定着させていく。すなわち、巨視的観点から物質をとらえる場合には、まず生徒自身の感覚を通して物質の性質をとらえることからはじめ、物質の持つ様々な性質を定量的にとらえることへと展開していく。この際に肝心なのは、物質の「同定」（その物質がある特定の物質であることを確認する）と区別（比べている2種類以上の物質が異なる物質であることを確認する）を中学校段階では意識的に強調することが大切である。

本題材では、金属と非金属、金属の分類、プラスチック、有機物と無機物など身近な物質を取り上げ、同定と区別に重点を置き、物質観を学習していく。その中で、調べ方の基礎を身に付けるとともに、日常生活と物質のかかわりについて理解を深めていきたい。

5) 本題材の学習目標

身のまわりの物質の性質をさまざまな方法で調べ、物質には、密度や電気の通りやすさ、加熱したときの変化など固有の性質と共通の性質があることを日常生活と関連づけて理解するとともに、実験器具の操作、記録のしかたなどの技能を身に付ける。さらに、物質を調べることについての興味・関心を高める。

6) 本題材における評価規準

○自然事象への関心・意欲・態度

物質の密度や電気の通りやすさ、加熱したときの変化など、性質に関する事物・現象に関心をもち、進んで観察・実験を行うとともに、それらの事象を日常生活と関連づけて考察しようとする。

○科学的な思考

物質の密度や電気の通りやすさ、加熱したときの変化など、性質について調べる方法を考えて観察・実験を行い、これらの事象について科学的に考察することができる。

○観察・実験の技能・表現

物質の密度や電気の通りやすさ、加熱したときの変化など、性質についての観察・実験を行い、観察・実験の基礎操作や記録の仕方を習得することができる。

○自然事象についての知識・理解

物質の密度や電気の通りやすさ、加熱したときの変化など、性質を調べる観察・実験の結果などから、物質には性質の違いや共通の性質があり、それにもとづいて分類できることや物質の性質などについて理解する。

7) 本題材における日常生活への関連

①日常生活の中で用いられる材料を用いる。

・家庭にある金属製品やプラスチック製品、また食塩や砂糖などの白い粉末など、生徒の身近な物体や物質を用いて、学習を進めたり、実験を行ったりする。

②日常生活の事象の中から課題を見だし、動機づけをする。

・家庭ごみの分別やごみ問題、資源問題などを取り上げ、主体的に自分の課題を見つけ出させるようにする。

③学んだ知識を日常生活と関連づける。

・金属、非金属の区別やプラスチックの分類などから家庭でのごみの分別やリサイクルの必要性について考えさせる。

④環境教育との関連づける。

・ごみ問題や資源問題、ダイオキシンについて取り上げる。

⑤生徒の興味・関心を高める発展的な学習を位置づける。

・金属の密度を求める実験から、実際に金属の区別をさせる。
・プラスチックごみの分類実験として、密度の実験やバイルシュタインテストを行う。

②展開（省略）

③学習に対する生徒の反応（日常生活関連クラスのみ記載）

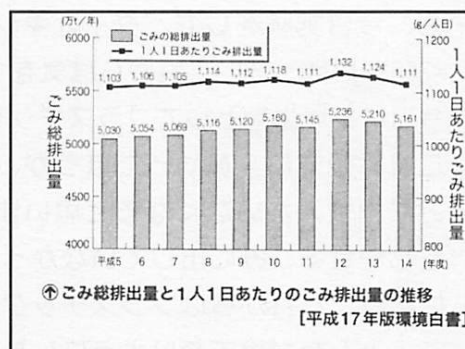
【事前レポート】

〔実際の生徒のレポート〕



【1時 導入の授業の感想】

- ・あまり、ごみ問題について事情をよく知らなかっただけに、今日の話は結構ショックでした。資源を守り、豊かな生活を続けるためにも、分別にしっかりと取り組んでいかないとだめだなと思いました。
- ・ごみを回収するのにすごいお金がかかっていることに驚きました。自分のこれからの未来のことを考えて少しでもごみをなくしたいです。
- ・今の現状に圧倒されるばかりだった。私たちが生きるこれからの時代が不安になった。しっかりとやれば良いことづくしなのに・・・と感じた。自分自身の生活も見直す必要がありそうだ。
- ・こんなに資源が大切だと感じたことはありませんでした。また、ごみの山の写真にもショックを受けました。税金も安くなるんだから、絶対に再利用できるものはしようと思いました。
- ・ぼくたちが知らぬ間に使っているごみは、今、日本でとても深刻な状況であるということを知りました。このまま使えば、未来で使えない物質が多くなると思います。そのためにも、身の回りの物質について考えていきたいと思います。



【2時 金属、非金属の区別の感想】

- ・金属は他のものと何が違うのかということが今まではいまいち分からなかったけど、金

属特有の性質、特徴にいろいろと不思議さを感じたし、今まで何気なくお金を使ってきたけど、金属という大切な資源を使っていて、ぼくたちは意外に幸せなのかもしれないなと思います。

- ・ぼくは金属はすべて磁石につくと思っていたが、全く関係ないということが分かりました。アルミホイルなどは、この金属の性質を使ってつくっているのすごいいいと思いました。だが、このまま日常的に金属を使っていると、もうすぐ金属がなくなり、非金属時代がやってくると思うと心配です。

【3, 4時 金属どうしの区別の感想 発展学習（密度の実験）】

- ・はじめは、色も形も似ている金属なんて、どうやって区別するのか分かりませんでした。「密度」ということを学び、物質というのはそれぞれに性質があって、それをつかめば何でも分かっておもしろいなと感じました。
- ・今日の実験でこんなにも正確な結果が出るとは思わなかった。物体の浮き沈みは密度で決まるということを知ったので興味をもちました。
- ・金属の種類によって重さがまったく違うことがわかりました。日常的には塗装などがしてあるので、どの金属がどのようなものなのかに興味をもっていなかったけど、これからは密度を量るとともにもっとくわしく調べたいと思いました。



【5, 6時 プラスチックの区別実験の感想 発展学習】

- ・今まで、もえるごみのところにふつうにプラスチックを入れていたし、プラスチックはほとんど分別していなかった。でも、今日実験をして、ダイオキシンが出るということがすごく印象に残った。これからは気をつけていきたい。
- ・今日は発展学習としてプラスチックの区別をやったのですが、これは絶対に全員やったほうが、プラスチックを燃やせるごみに出す人がいなくなると思いました。自分はプラスチックを燃やせるごみに出していなかったらどうかと心配になり、これからはプラスチックにもっと気を配って、みんなが捨てないようにしたいと思いました。
- ・ダイオキシンが発生するかどうかということ、こんな簡単な方法で区別できたことに驚きました。バイルシュタインテストによって危険なプラスチックを見つけられました。

実験（火に耐え、溶ける、燃える）
 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

種類	ポリスチレン	ポリプロピレン	ポリエチレン	ポリビニルアルコール	ポリスチレン	ポリプロピレン	ポリエチレン	ポリビニルアルコール
燃焼性	燃焼性あり	燃焼性あり	燃焼性あり	燃焼性あり	燃焼性あり	燃焼性あり	燃焼性あり	燃焼性あり
融点	105℃	165℃	115℃	170℃	105℃	165℃	115℃	170℃
密度	1.05	0.9	0.95	1.2	1.05	0.9	0.95	1.2
試験結果	燃焼性あり	燃焼性あり	燃焼性あり	燃焼性あり	燃焼性あり	燃焼性あり	燃焼性あり	燃焼性あり

今日の感想
 今日はプラスチックの区別実験をしました。プラスチックは燃やせるごみに出す人がいなくなると思います。自分はプラスチックを燃やせるごみに出していなかったらどうかと心配になり、これからはプラスチックにもっと気を配って、みんなが捨てないようにしたいと思いました。



5, 6時 参考資料

【プラスチックについて】

- 1 ポリエチレンテレフタレート・・・ペットボトル など
- 2 高密度ポリエチレン・・・プリンカップ、食品容器のふた など
- 3 ポリ塩化ビニル・・・食品用ラップ、ビニルテープ、レインコート など
- 4 低密度ポリエチレン・・・ポリエチレンのふくろ、食品用ラップ など
- 5 ポリプロピレン・・・ストロー、クリアホルダー など
- 6 一般・発泡ポリスチレン・・・プラコップ、発砲スチロール など
- 7 その他・・・ポリ塩化ビニリデン など

【プラスチックの分別法】

① 水に浮くかどうか。

【水に浮くプラスチック】

ポリプロピレン、ポリエチレン・・・密度が1 以下

【水に沈むプラスチック】

ポリエチレンテレフタレート、ポリ塩化ビニル、ポリスチレン・・・密度1 以上

② 「バイルシュタインテスト」

銅線をガスバーナーで加熱し、プラスチックを溶かし付けて、再びガスバーナーの炎の中に入れると、塩素を含むプラスチックは緑色の炎色反応を示す。

ポリ塩化ビニル・・・低温で焼却することでダイオキシンが発生。

【7, 8時 白い粉末の区別の実験】

- ・物質Bと物質Cの区別がうまくいかないことはあったけど、自分が学んだり、調べたりしてきたことをうまく利用して実験するのはとてもおもしろかったです。
- ・自分で実験をし、（方法も考えて）何か分からないものを追究することは初めてだったのですが、とても充実していました。
- ・BとCを区別するのが大変だったけど、自分たちで調べたことを生かしながら考えた実験でどうにか結果を出せてよかったです。いつも、実験などは教科書にのっているものを使って、それから結果を出していたけれど、実験方法から考えるのは初めてで、思ったより大変でした。でも、自分たちで結果を出せてうれしかったです。



実験結果・考察

4. 研究のまとめ（結果と考察）

アンケート結果

質問

- (1)理科の勉強が好きだ。
- (2)理科の勉強は大切だ。
- (3)理科の勉強は、受験に関係なくても大切だ。
- (4)理科を勉強すれば、私の受験に役立つ。
- (5)理科を勉強すれば、私の好きな仕事につくことに役立つ。
- (6)理科を勉強すれば、私のふだんの生活や社会に出て役立つ。
- (7)理科を勉強すれば、私は、疑問を解決したり予想を確かめたりする力がつく
- (8)受験に役立つよう、理科を勉強したい。
- (9)自分の好きな仕事につけるよう、理科を勉強したい。
- (10)ふだんの生活や社会に出て役立つよう、理科を勉強したい。
- (11)将来、理科の勉強を生かした仕事をしたい。
- (12)疑問を解決したり予想を確かめたりする力がつくよう、理科を勉強したい。
- (13)理科の勉強は、自然や環境の保護のために必要だ。

日常関連クラスについて(数字は人数を表す)

質問	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
日常生活関連2クラス 授業前(78名)	28	31	19	51	29	16	31	46	30	11	28	25	24
内訳													
日常関連クラスA(40名実施)	9	17	11	25	12	7	16	28	13	5	11	10	15
日常関連クラスB(38名実施)	19	14	8	26	17	9	15	18	17	6	17	15	9
日常生活関連2クラス 授業後(76名)	29	38	28	38	16	30	32	37	17	22	13	25	62
内訳													
日常関連クラスA(39名実施)	9	20	18	22	8	16	13	16	7	12	5	10	33
日常関連クラスB(37名実施)	20	18	10	16	8	14	19	21	10	10	8	15	29

普通クラスについて

質問	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
普通2クラス 授業前(76名実施)	22	31	27	49	23	13	36	43	25	22	20	30	26
内訳													
普通クラスC(37名実施)	9	16	13	24	10	8	18	18	9	12	5	13	11
普通クラスD(39名実施)	13	15	14	25	13	5	18	25	16	10	15	17	15
普通2クラス 授業後(73名実施)	32	30	24	39	12	16	32	37	12	14	11	23	48
内訳													
普通クラスC(36名実施)	15	15	9	18	6	9	17	18	5	11	5	15	23
普通クラスD(37名実施)	17	15	15	21	6	7	15	19	7	3	6	8	25

(1) アンケート結果より

- ・質問1「理科の勉強が好きだ」については、日常関連クラスはほとんど変化はなかったが、普通クラスでは約45%の増加が見られた。これは普通クラスはもともと理科の勉強が好きでない生徒が多く、今回の授業により理科学習の楽しさを改めて感じ、理科が好きになったのではないだろうか。
- ・質問2「理科の勉強は大切だ」では、普通クラスではほとんど変化は見られないが、日常生活関連クラスでは、人数が20%以上増加した。それとともに、質問3の「理科の勉強は受験に関係なく大切だ」においても普通クラスはほとんど変化していないにもかかわらず、日常関連クラスでは人数が約47%も増加しており、授業を日常生

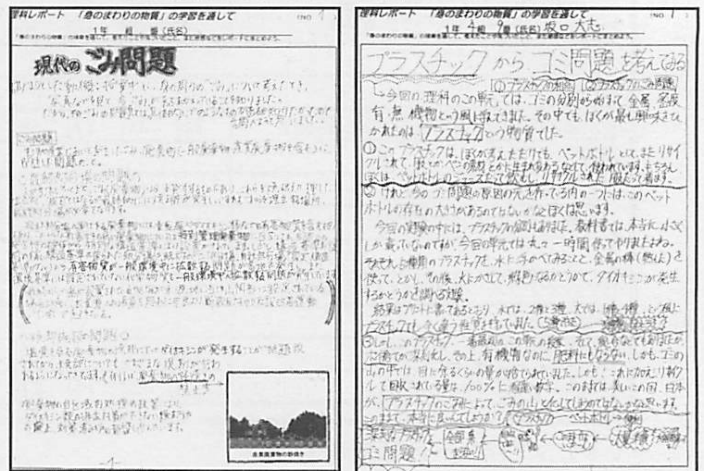
活と関連させることにより、理科学習の大切さや重要性を実感できる生徒が増えたと考えられる。

- ・質問6の「理科を勉強すれば、私のふだんの生活や社会に出て役立つ。」については、あきらかに日常生活関連クラスの方が増加しており、授業の中に日常生活や社会問題を取り入れることにより、生徒は理科学習の必要性を感じとれたと考えられる。
- ・質問10の「ふだんの生活や社会に出て役立つよう、理科を勉強したい。」については日常生活関連クラスは「そう思う」が倍増した。日常生活との関連を図った授業によって、理科学習への興味・関心とともに主体性が高まったように考えられる。
- ・今回の授業は環境への意識が高まりやすい題材であったが、日常生活関連クラスの方が普通クラスに比べ、より環境への関心が高まった。
- ・残念ながら、今回の授業から、質問5の「理科を勉強すれば私の好きな仕事につくことに役立つ。」や質問9の「自分の好きな仕事につけるよう、理科を勉強したい。」、質問11の「将来、理科の勉強を生かした仕事をしたい。」と考える生徒が減った。これは、日常生活関連クラスも普通クラスもともに減っていることから、生徒は本題材から理科学習の難しさや専門性を実感し、将来の仕事として選択したくないと考えた可能性があるのではないかと考えられる。

(2) レポートより

〔日常生活関連クラスの課題レポート〕

- ・日常生活関連クラスと普通クラスのレポートを比較したところ、日常生活関連クラスの方が、文献やインターネットなどで意欲的に調査したものや、社会問題や環境問題に取り組んだものが多かった。逆に普通クラスは授業内容の復習やまとめを取り扱ったものが多く見られた。このことから、日常生活と関連させながら授業を進めると、生徒の意識は、授業での学習内容だけでなく、理科での学習を生かし、積極的日常生活や社会問題に取り組もうとすると考えられる。



5. 研究を終えて

今年度、附属中学校に赴任し、はじめてこの共同プロジェクトに参加させていただいた。大学、小学校、中学校の三校が合同で研修を重ねる機会は大変貴重な時間となるとともに、提案や授業実践をさせていただき、自分自身は大変勉強になった。今後も、より研修に務め、よりよい理科の授業づくりに努力していきたい。

富山大学人間発達科学部附属中学校 新田稔先生の取り組みから

附属小学校 澤柿 教享

今年度のプロジェクトでは、自分自身、あいにく実際の授業場面で研修させていただくことはほとんどなかったことを反省している。研究主題「日常生活との関連を図り、主体性の高まりをめざす理科学習の在り方」の解明に向けて、数回にわたり共同で授業を構想したが、その際に感じたことを記してまとめたい。

1 「日常生活との関連」と「主体性の高まり」とはどんな関係か

私たちは、よく、学習の場面に生活経験を持ち込むことで、子供の興味・関心を高めようとする。確かに、身近なものは子供の目をひくが、それが一過性のものとなりやすいという実態もある。日常生活との関連は、すなわち、主体性の高まりに結びつく、とは限らない。

本年度のプロジェクトでは、むしろ、「主体性の高まりをめざす」ところに主眼があり、そのための手法として「日常生活との関連」という視点を持ち込んだものと解釈している。さらに、そのための「日常生活」とは、いったいどのようなもので、どの程度の関連度があることがふさわしいのか、ということが私の個人的な関心だった。

2 そもそも「主体性」というものをどうおくか

学習者が生き生きと学習活動を展開する姿には、確かに「主体性」が感じられる。事象をじっくりと見つめようとする姿にも、やはり「主体性」を感じる。一方、せわしくあれこれとものを持ち込んで実験しているようではあるが、さほどのこだわりもなく取り組んでいる姿には「主体性」は感じられないし、関心かなさそうに要点だけをおさえておこうとする姿にも、やはり「主体性」は感じられない。

学習者の内面に「主体性」が芽生える時、そこには、学習者の心がゆさぶられるものが必要である。「あれ？〇〇になるはずなのになあ」とか、「え？どうして〇〇さんは、そんなことを言うのかなあ」など、ものやひとのもつ自然の特性に、すれ、不確かさ、あいまいさ、矛盾等を感じたとき、「主体性」の第一歩が芽生える。

もちろん、それで「主体性」が確立したとは言えない。すれ、不確かさ、あいまいさ、矛盾等の内面的動きから、「もしかしたら〇〇になるのかなあ」とか、「こんな場合はどうなるのだろう」などと、一人一人が試行錯誤を繰り返したり、自分で考え進めたりすることの充実感を感じたりできることが大切である。

3 持ち込むべき「日常」とはどういうものか

「主体性」が確立していくには、対象となる自然の事象に、すれ、不確かさ、あいまいさ、矛盾等が重要な意味をもつと考えている。そうだとしたら、そこに持ち込むべき「日常」は、生活に密着しすぎてはあたりまえすぎて学習者の心の揺れを生まない。反対に、離れすぎていても同様かもしれない。いわゆるビックリ教材も、もちろんふさわしくない。

持ち込むべき「日常」とは、わかっているつもりでも、実はその本質については考えて見みなかった、というようなものなのだろうと思う。もっと言えば、生活経験はもとより、それまでの既習事項こそを生かして、そのすれ、不確かさ、あいまいさ、矛盾等が増幅していくような構想とセットで考えたい。

既習事項を総動員して思考した結果、〇〇と考えるしかないんだけどなあ。。と、予想したり、見通しをもったりして、試したくてしかたがなくなる状態に学習者自身が高まっていく。

持ち込むべき「日常」は、ただ身近にあればよいというものではなく、その単元の本質を備えていなければならない。そして、学習者の問題解決の過程に一本の筋を通すような追究の中心的な材として位置付けていくことが大切である。

4 「主体性の高まり」のサイクルをどう描くか

単元には、いくつかの内容がある。それぞれの内容に応じて学習過程の節もある。本実践例では、「金属と金属でないものを区別する」、「金属を区別する」、「プラスチックにはどのような種類があるか」、「粉末状の物質を区別するにはどうすればよいか」、「私たちの生活と物質とのかかわりについて考えよう」などがそうである。

これを一つの単元としたとき、初めから終わりまで「主体性」をもって追究することができればよい。しかし、初めから終わりまで「主体性」をもって追究することだけが大切なことではないだろうと考える。異なる複数の内容が一つの単元に含まれている以上、子供の思考の連続だけでそれらを全て網羅するというのは難しいからである。むしろ、そう考えることは避けた方がよいかもしれない。「初めから終わりまで」でなくても、大切なところで、本質にかかわる場面で、学習者が心の揺れをともなった確実で力強い問題解決を展開していくことをまずめざしたい。

そのために、本質をしっかりと見極める。(どの内容を重視し、どのような力を育てたいのか)

次に、その本質に向かう過程を1つのサイクルとおく。

次に、その本質に向かうための教材(本研究の場合なら、持ち込むべき「日常」)を選定する。

次に、どのようなすれ、不確かさ、あいまいさ、矛盾等をもつ個が教材となるか、子供理解に徹する。

次に、どのような場面で、互いに練り上げ、見直し、新たな価値(本質)を獲得していくか構想する。

これらは、単元全体を軽重つけずに行うのに比べ、短い期間のサイクルとなる。一つの内容(本質)に一つの単元があるようなものである。言い換えるならば、一つの本質に対し、学習者のすれ、不確かさ、あいまいさ、矛盾等が伴う、確実で力強い問題解決を保障しようという考え方である。

5 理科学習における共生的視点の大切さ

理科の場合、その本質に迫ることと、「実証性、再現性、客観性など」を高めることとは切り離せないものである。したがって、理科の学習場面では、個の追究はもとより、人とのかかわりの場面が欠かせない。一人だけの追究では実証性、再現性、客観性などが高まらないからである。

私たちは、よりよい教材や単元を開発する一方で、追究を重ねてきた個と個がどのように考えを練り上げていくかという場면을効果的に保障したいと願う。互いに異同を感じたり、自分の考えを説明したり、主張したり、その背景となっているイメージや根拠となる取り組みを互いに感じ取ったり、立ち止まって考えてみたくなる想が投入される一瞬を見極めたり、そこから新たな視点で考えを見直したり、互いに議論して創り上げたり、追体験して深く納得したり・・・そんな姿をできる限り想定していく。

学習者は、自らの学ぶ必要性や学ぶ楽しさを、共に学ぶ仲間存在にも見出しているはずである。そこに理科学習の生命線の一つがあるように思う。

今年度の理科教育共同研究プロジェクトを終えて

附属小学校 橋本大一郎

今年度は、中学校の新田先生の授業を中心に、研究を進めてきた。私たちに提案してくださった新田先生には心よりお礼を言いたい。

新田先生には、「日常生活との関連を図り、主体性の高まりをめざす理科学習の在り方」を研究主題として提案をしていただいた。子供たちが学ぶ意欲をもつために、日常生活とかかわりのあるものを教材化していくことが重要である。そのために何を子供たちに提案するかということがとても考えていかなければならないことだと思った。小学校であれば、子供たちがより興味関心をもつように、このようなことば重要であると思う。

よく、子供たちの興味を引き付けるために、教師はいろいろなものや現象を提示する。それは、とても重要である。そして、その提示が子供たちの科学的な見方や考え方が深まっていくものでなくてはならない。子供たちが、おもしろかったという満足感で終わるのではなく、「どうしてそうなのだろう」とさらに追究したくなるようにしなければいけない。その重要性を、新田先生の提案をたたき台として、このプロジェクトを通して考えさせてもらった。

新田先生は、家庭からでる資源ごみの区別の仕方から提示された。そこから、物質のもつ性質の違いについて子供たちが理解できるように展開していかれた。子供たちの身近にある物質を探ることで、興味をもって学習を進めていくにはとても大切なことであると思う。

そして、その際、何を目指していけばよいのかということが、このプロジェクトで議論された。ここが理科の本質として、欠かすことができない重要なポイントである。プロジェクトで議論されたことは、“密度”ということであった。物質の違いは、見た目、重さ、色、磁石に付くか、電気が流れるかなどいろいろと観察のポイントがある。その違いから、物質観を育てていくときに、密度が違っているということを実感させていくことの大切さを学んだ。

これは、以前私が共同研で授業をさせていただいたときも、同じところに焦点を当てていた。小学生では、分子、原子を扱わないことになっているが、水溶液のモデル図で考えるときに、分子や原子のレベルまで考えてもよいこととした。これは、子供がどうしてもモデル図を考えるときに、分子や原子まで考えざるを得ない状況になっていた。しかし、子供たちにとっては、モデル図を考えることを実験で再現しながら楽しんでいる姿が見られた。このように、本質に向かっている時には、子供たちはいろいろな思考を巡らせていく。共同プロジェクトでは、このように学習指導要領の枠を超えて取り組めることがよさであろう。

もちろん、子供たちに考えさせることができる内容や、実験で再現できることにも限界があるので、どのような実験ができるのかを、大学の先生方とも協力しながら考えていきたい。

また、中学校と小学校という2つの学校で研究を進めているということから、2つの連携がとても重要である。中学校では、身につけなければならないことや、受験が控えていることを考えると、厳しい条件の中で日々の授業を進めておられるのがよくわかった。そんな中学校で子供たちが、力を発揮していくために、小学校でできることはどのようなことか考えなくてはならない。中学校では、小学校以上に科学的な思考力が育ち、知識量も豊富である。そのような見方・考え方が発達している中で、子供たちにとって満足しうる教材の在り方について今後もこのプロジェクトで考えていきたい。

問題解決における理科で培いたい能力

附属中学校 堀田 充

1. 主体性を高める力

問題解決における理科で培いたい能力はたくさんあるが、「自分の考えをもつ」「自分をみつめる」ということに関わる資質や能力が主体性を高めるために大切だと考える。そこでそれらの資質や能力を4つの力「比較力」「意味づけする力」「先を見通す力」「多面的な視点力」で捉えてみたい。また、それら4つの力は、授業で扱う内容や素材（教材）が日常生活に関するものを対象にするほど、大きく培われると考える。

（1）比較力（実験・技能）

比較するというのは理科の問題解決の過程のあらゆる場合に関係する能力であるが、特に自ら問題を見出すことと深く関わってくる。これは、2つの事物・現象を直接比較する場合もあるし、目の前の事象と日常生活でのことを比較する場合も含む。そこから、共通点や差異点という視点から比較しながら調べていくことによって問題を見出すのである。また、追究の中で自然の事物・現象に見られる共通性や相互の関わり、物の性質や特徴などについての見方や考え方を養うことにも大いに関わってくる。

しかし、それら事物・現象が未知のものや、未経験のものであった場合、日常の何と関連づけるかで問題の捉え方が大きく左右される。中学段階では、唐突に科学的な現象を比較させることより、普段の生活で起きている現象と科学的原理との比較力を十分に身につけさせ、定性定量的な比較が出来るようになった上で、発展的なものに取り組んでいく必要があると思う。

（2）意味づけする力（科学的思考、知識、興味・関心）

「ある変化がおこる」それを「起こすもの」は何かと、関係ありそうなものを探し出そうとして、そこに起こっている現象の中から、あれこれ、いろいろ視点を変えながら探し求めることが関係づけであり、その関係をこうだからと意味をはっきりさせるのが、意味づけである。そのためには授業で扱う素材（教材）が重要になる。その素材が身近なものであればあるほど、他の日常生活と関連づけやすく、話し合いの場面でも、意見が発表しやすくなり、多くの意見が出ることで結果的に視点も広がる。このように、日常生活と関連を図ることは、思考力を深めるとともに、普段の生活の中で起こる何気ない現象に対しての疑問をもつなど、事物・現象に興味・関心をもつことにつながり主体性が高まる。そのことから問題解決に立ち向かう大きな力が発揮され、その過程で得られる自信や達成感が、より高い問題意識につながると思う。

(3) 先を見通す力(実験・技能、科学的思考)

見通しを持つと言い換えることもできる。生徒が疑問を持ったとき、ある程度見通しを持っているものである。見通しを持つということは、生徒の問題解決活動をより主体的にする意味がある。「こうすれば、こうなるはずだ」という見通しを持つことによって、実験・観察の方法も、より焦点化された具体的なものになる。それがその生徒なりの分かる道筋である。実験において大切な要素である条件規制というものも、結果に至るまでの見通しを持っていたなら、自ずと生徒から出てくるものである。ところが、見通しのもてない生徒は実験から得た結果についてもただその事実を受け止めるだけで、新たな疑問は出てこない。一方、見通しを持って取り組んだ生徒は、得た結果が自分の予想やイメージとずれた場合には「どうして、予想やイメージとちがうのだろう」「友達と自分の結果やイメージが違うのはなぜだろう」と自分の考えやイメージ及び実験の方法を振り返り、より妥当なものへと自分の考えを発展させていく契機となる。

(4) 多面的な視点力(興味・関心、科学的思考)

生徒はある枠を持って対象の一方向からしか見ていないことが多い。しかし、自然の事物・現象の相互関係や規則性というものは、いろいろな視点で見ることによって見えてくるものである。この多面的な視点で見るというのは対象に対してだけでなく、自分自身を振り返る視点にもつながる。一方向だけから自分を見ていては、自分というものの見方が偏ってしまう。いろいろな方向から自分を見つめることによって本当の自分が見えてくるものである。そのためには、他者の視点というものが必要になる。他者の視点から自分を見つめ直したときにまた新たな自分が見えてくるはずである。

2. 研究を終えて

本年度は、「日常生活との関連を図り、主体性の高まりをめざす理科学習の在り方」という主題で研究を行ってきた。日常生活に関わるものを素材に授業展開を行うことは、大変よいことである。しかし、指導要領に定める内容をこなしていくのがやっとな中で、すべての単元で実施することの難しさを、年度末にきて改めて痛感させられた。ましてや指導要領外の内容を今の授業時数で取り扱うことはかなり無理がある。ただ、教科書の実験・観察が、本当に学習内容を理解し、主体性を高めることにつながっていくのか、ということとそうでもないものがある。生徒の実態に合わせたもっとよいものがあればと思う。特に、微視的・巨視的なもので、机上で実験・観察がしにくいものである。このようなことから、今後の共同研究の一つとしてとして、目標の達成にもっと有効な教材開発なども考えられるのではないだろうか。特に専門的立場からの視点で教材開発などしていただければ、共同研究の価値も一層高まるのではないかと思う。その上で、「比較力」「意味づけする力」「先を見通す力」「多面的な視点力」の4つの力で捉え、主体性の高まりを研究したい。

新田式「日常生活関連」授業の上級学年での展開を考える

一生徒の職業観と理科学習に対する意識との考察を通して一

附属中学校 堀 篤史

1. はじめに

ひとりの理科教師の思いとして、自分の授業を受けた生徒が、その授業から何らかの影響を受け、職業選択のきっかけとしてくれたならこんなに嬉しいことはないだろう。

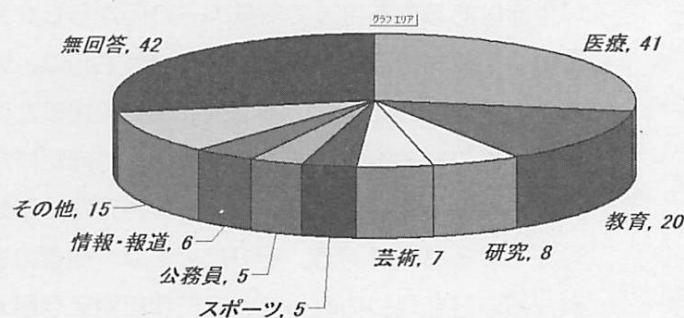
しかし、学習を終えてのアンケート結果の中に、気になるデータがあった。質問5の「理科を勉強すれば私の好きな仕事につくことに役立つ」や質問9の「自分の好きな仕事につけるよう、理科を勉強したい」、質問11の「将来、理科の勉強を生かした仕事をしたい」といった設問に対して、「そう思う」と回答した生徒の割合が、大きく減少したのだ。新田先生は、「本題材から理科学習の難しさや専門性を実感し、将来の仕事として選択したくないと考えた可能性がある」としている。

そこで今回は、新田先生が調査したアンケートと同内容の調査を第2学年（対象：149名）でも実施し、それぞれの生徒の希望進路と照らし合わせて、生徒の理科学習に対する意識について考察し、次年度に向けての授業展開について考えてみた。

2. 希望進路の実態

第2学年生徒を対象に行った将来の進路希望アンケートでは、右のような結果になった。医療関係（医師、看護師、薬剤師、獣医）を目指したいと考える生徒が最も多く、次いで、教育（教師、保育士、司書）、研究（科学者、研究者）、芸術と続く。

問 私が将来つきたい、または、強く興味をもっている職業は何ですか。



2007年2月実施 対象 149名

3. 理科学習に対する意識

医療関係に進みたいと考えている生徒が、各教科に対してどのような意識をもっているのか、まとめてみた（表①）。

傾向として、医療関係を目指す生徒は、概ね理科が好き（※1）で、仕事につくのに役立つ（※3）と考えているが、実際に勉強しなければいけないのは、数学と英語だ（※2）という認識をもっているようだ。これは、どのような意識から生まれてくるのだろうか。おそらくは、実際に医師になる前には、高校受験、さらには大学受験を乗り切らなければいけないことを生徒自身が理解しており、英語と数学が特に大切だと信じているからではないだろうか。自らこの感覚を体得する場面は今までになかったであろうから、これは、大人など、周囲から与えられた情報を鵜呑みにし

ている結果であると捉えることができる。

自分は理科が好きで将来役立つと思っているのに、実際には力をかけることができない環境があるとすると、生徒には、

表① 医療関係に進みたいと考える生徒の教科に対する意識

対象 41名

好きな教科を2つ書きなさい。※1			勉強が大切だと思う教科を2つ書きなさい。※2			私の好きな仕事につくのに役立つと思う教科を2つ書きなさい。※3		
1位	理科	28.0%	1位	数学	25.6%	1位	理科	37.8%
2位	英語	14.6%	2位	英語	22.0%	2位	数学	29.3%
3位	数学	13.4%	//	理科	22.0%	3位	国語	12.2%
4位	音楽	11.0%	4位	国語	15.9%	4位	英語	8.5%

幾分かのフラストレーションがたまっているのではないだろうか。この問題を、どう打開していけばいいのか。

4. 上級学年での展開

理科学習に、新しい意味づけを！ ⇒ 理科の学習で疑問解決や予想を確認する力がつく！

生徒から「なぜ、僕たちは勉強しないといけないのか？」という質問を投げかけられることがよくある。私は、そんな時、こう答えるようにしている。

『理科の問題を解いていたときの自分をあとから振り返ると、脳をフル回転して考えていた自分がいるだろう。その問題を解くという過程で、頭を使うことこそが大切なんだ。答えが出るかどうかは、二の次…。その考えている時間こそが、君の脳を鍛える時間になって、今の君たちに必要なことなんだ。ここで力が付けば、ほかの教科も追従して伸びてくるよ』と…。

下のアンケート結果にも現れているように、生徒は、理科を学習すれば、課題解決の能力がつく(※4)とは思うが、この部分に積極的に取り組もうとは思わない(※5)実態がある。これは、実際に自分が、課題解決の活動に取り組んだ経験が乏しく、また、解決したときの喜びを知らないからではないかと思う。

そこで、上級学年での展開としては、疑問から仮説を立て、課題解決活動を自らの判断で展開できるような、単元と授業の構成を考えてきたい。このことで、広い意味での「理科離れ」に歯止めをかけるきっかけになっていけばと願う。

表② アンケート結果（新田教諭が実施したものと同内容）

対象 2 年生 149 名

	そう思う・どちらかといえばそう思う	そう思わない・どちらかといえばそう思わない
(1) 理科の勉強が好きだ	79%	19%
(2) 理科の勉強は大切だ	92%	7%
(3) 理科の勉強は、受験に関係なくても大切だ	74%	19%
(4) 理科を勉強すれば、私の受験に役立つ	93%	4%
(5) 理科を勉強すれば、私の好きな仕事につくことに役立つ	53%	29%
(6) 理科を勉強すれば、私のふだんの生活や社会に出て役立つ	65%	27%
(7) 理科を勉強すれば、私は、疑問を解決したり予想を確かめたりする力がつく。※4	72%	19%
(8) 受験に役立つよう、理科を勉強したい	90%	7%
(9) 自分の好きな仕事につけるよう、理科を勉強したい	62%	25%
(10) ふだんの生活や社会に出て役立つよう、理科を勉強したい。	65%	27%
(11) 将来、理科の勉強を生かした仕事をしたい。	45%	40%
(12) 疑問を解決したり予想を確かめたりする力がつくよう、理科を勉強したい。※5	60%	30%
(13) 理科の勉強は、自然や環境の保護のために必要だ	77%	13%

共同研究プロジェクト・「身の回りの物質」の授業について

人間発達科学部 原 稔

理科の共同研究プロジェクトは、この数年間、児童・生徒が物質概念をいかに形成していくかについて検討してきた。今年度は、附属中学校1年生4クラスの理科第1分野「身の回りの物質」の授業について行った。この単元では、日常身近な物について、物体と物質の違いから始めて、物質には電気を通すもの通さないもの、磁石につくものつかないものなどがあり、物質の密度はその物質特有の値をもつことなどを学ぶ。授業の導入部では、教科書にも記載されている家庭ゴミの分別を取り上げた。本プロジェクトにおいては、従来通りの授業を行う2クラスと発展的内容にも力を注いだ授業を行う2クラスとに分け、単元の開始前と終了後に生徒へのアンケート調査を行い、比較・検討することになった。

単元終了後の生徒のレポートは、導入部の印象が強かったのか、ゴミ問題を取り上げた生徒が多かった。情報の量や質が、大学生のレポートをしのぐものも見られ、インターネットで同じ情報源を利用するかぎり、年代間に顕著な差がないことを思い知らされた。

アンケート調査では、2種のクラス間の事前・事後の差は顕著ではなかった。設問によっては、予想や期待と逆の結果になっているものもあった。著者は次の点に注目してみた。

(1) 肯定的回答が事後に増加した設問

- ①理科の勉強が好きだ（通常クラスで顕著）
- ②理科を勉強すれば私の普段の生活や社会に出て役立つ（発展的内容クラスで顕著）
- ③理科の勉強は、自然や環境の保護のために必要だ（発展的内容クラスで顕著）

(2) 肯定的回答が事後に減少した設問

- ①理科を勉強すれば、私の受験に役立つ
- ②理科を勉強すれば、私の好きな仕事につくことに役立つ（全クラスでほぼ半減）
- ③自分の好きな仕事につけるよう、理科を勉強したい（全クラスでほぼ半減）
- ④将来、理科の勉強を生かした仕事をしたい（3クラスでほぼ半減）

これを見るかぎりでは、導入部のゴミの分別が生徒たちに強い印象を残したたようである。

(1)の「環境保護のために必要」がほぼ倍増していることは、その点では大きな効果があったことになる。しかし、この単元の目標からは、ややずれてしまったことは否めない。この辺りが導入部の難しさであろうか。また、(2)に共通するのは「好きな仕事」である。

(2)③及び④に関しては、肯定的回答（「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」）が事前ではともに50%超であったのに対し、事後では30%程度になっている。これは、科学的な仕事にはつきたいが、ゴミの分別や環境保護に関する仕事は御免だということであろうか。大きな夢を抱いているこの年代に、環境に関する仕事がいくら大切だからといって、複雑で地味なこの種の仕事に大勢がつくことを期待する方が無茶なのかもしれない。

この結果からは、物質概念の変容は定かではないが、導入部の重要さが再確認された。

本当の理科好きにさせるために —日常生活の関わりだけで理科が好きになるか—

人間発達科学部 市瀬和義

1 はじめに

今年の共同研究プロジェクトは、「日常生活との関連を図り、主体性の高まりを目指す理科学習の在り方」を研究主題に、新田先生が主体となって取り組んで下さった。しかし、正直な話、授業を見る機会がいろいろなことと重なり、全く見に行くことができなかった。それは誠に申し訳ないことであった。そこで、ここでは、指導案と授業結果のアンケートの中から、本当に理科好きにさせるためにどうしていったらいいかを考えてみたい。

2 理科学習と日常生活との関連

2006年8月の部会で、「理科嫌い」「理科離れ」になっている原因の一つとして、理科の学習があくまでも学校だけのものと感じ、自分たちの生活に役立っていると感じられないことが上げられた。そして、理科では特殊な器具や薬品を使うことから馴染みにくく、何のために学習するかわかりにくいという理由もあげられた。私はこのときに、やや反対の意見を述べた記憶がある。

確かに身の回りのものを使えば、親しみやすく、生徒もくつつきやすい。ペットボトルにしろ、アルミホイルにしろ身の回りにあるものである。しかし、逆に言えばこれらはいろいろ複雑な物質からできており、親しみやすいが完全に理解しようとするとき難しいものがある。そのため、単純化したがゆえに、歪曲されて理科の事実が伝わる恐れがある。大事なところは、やはりきちんとした形で教えなければならない。本当に理科が好きになるのは、そういった理科の「すっきり感」とか「系統だててものを考える」ことのよさではないだろうか。そう私は思ったのである。

3 日常生活と関連づけて

今回、「身の回りの物質」を通常教科書通り、導入（物質・物体）→金属・非金属→密度→密度の計算→有機物・無機物→身の回りのプラスチック（発展学習）→まとめといった流れで行ったクラスと、そうでない流れのアンケート比較がされた。新田先生の提案の教科書とは違った流れは、家庭ゴミの調査から入って、資源ゴミの分別に話題を絞り、金属・非金属の区別に話題を入れ、金属部分で密度を扱い、プラスチックの種類、粉末物体の区別に話が及び、最後はレポートをまとめるというものであった。

これを見ると明らかかなところはいくつかある。新しい流れのクラスでは理科が好きになったこと以外に、理科を勉強すれば、ふだんの生活や社会に出て役に立つと考えるようになった子が圧倒的に増えている。またレポートの書かせ方にもよったと思われるが、理科の勉強は、自然や環境の保護のために必要だと思ふ子がふえている。これはおそらく授業の中で、このような内容を意識づけて行ったからであり、レポートを見させてもらうとかかなりのことを調べ、それが自分のためになったことが分る。そういう意味では、意識づけをさせて授業を展開したこの方法は間違っていないかと思う。やはり何らかの動機付けにはなったと思われるし、大いに評価したいし、この積み重ねがいるとは思ふ。

しかし、今後、このようなこと全てで、理科好きになるかは定かではない。私の中では、今までの学んだことがしっかりとつながることや、原理や理論のすっきり感、データをまとめて見取る力、事実をもとにして語るよさも今後考えていく必要がありはしないか、そこにも力点をおきたいと思っている昨今である。

キャリア教育から見た理科教育

人間発達科学部 梶座圭太郎

1 比較研究元年

H18 理科連携プロジェクトの最大の成果は、クラスごとに異なった授業を行い比較するという研究が行われたことであろう。附属中の新田教諭は、中学校 1 年の物質の単元において、教科書沿った従来型の授業を 2 クラス、導入時に資源ごみの分別を考慮した「家庭ごみの調査」の事前学習や、中間時にはプラスチックの種類についての発展学習、およびまとめとしてゴミ問題やリサイクル問題のレポートを作成させるなどした提案型の授業を 2 クラスについて行った。

著者の興味は、2 つの導入方法が、理科への興味関心や自学自習の態度を高めるか、さらには自分の将来を考えるきっかけに影響するかにあった。新田教諭は、違いを明らかにする方法の一つとして、国立教育政策研究所の平成 13 年度教育課程実施状況調査と同じ質問を用いたアンケートを授業前と授業後に行っている。著者は、そのアンケートから、近年小中学校に導入されつつある「キャリア教育」という視点から興味深い傾向を見いだしたので、そのことについて簡単に論じたい。

2 当事者性から見た質問の分類とアンケート結果

授業前と授業後に行われたアンケートの質問は、平成 13 年度教育課程実施状況調査理科の設問 1 と同じである。設問 1 のうち (1) から (12) までを用いている。表 1 は、従来型 2 クラス約 75 人および提案型 2 クラス約 75 人のうち、「5. そう思う」を選んだ人数、および授業前の人数で授業後の人数を除して 100 倍した「指標」を示している。

従来型	前	22	31	27	49	23	13	36	43	25	22	20	30	26
約 75 人	後	32	30	24	39	12	16	32	37	12	14	11	23	48
	指標	145	97	89	80	52	123	89	86	48	64	55	77	185
提案型	前	28	31	19	51	29	16	31	46	30	11	28	25	24
約 75 人	後	29	38	28	38	16	30	32	37	17	22	13	25	62
	指標	104	123	147	75	55	188	103	80	57	200	46	100	258

今回、著者は、設問 1 の各質問を、当事者性、すなわち、ここでは自分の問題としてとらえるか否かという観点から A から E の 5 つに分類した。以下には、分類の結果と分類の定義をまとめた。また「指標」を、従来型と提案型の順に示している。

A グループ 理科が好きか否か：自己認識を問うている

(1) 理科の勉強が好きだ 145 - 104

B グループ 中学生一般論：建前的な答えが出やすい

(2) 理科の勉強は大切だ 97 - 123

(3) 理科の勉強は、受験に関係なくても大切だ 89 - 147

C グループ 受験勉強への影響：今回の授業は受験勉強としては効率が悪い

(4) 理科を勉強すれば、私の受験に役立つ 80 - 75

(8) 受験に役立つよう、理科を勉強したい 86 - 80

D グループ 社会人一般論：建前的、優等生的な答えが出やすい

(6) 理科を勉強すれば、私のふだんの生活や社会に出て役立つ 123 - 188

(7) 理科を勉強すれば、私は、疑問を解決したり予想をたしかめたりする力がつく
89 - 103

(10) ふだんの生活や社会に出て役に立つよう、理科を勉強したい 64 - 200

(13) 理科の勉強は、自然や環境の保護のために必要だ 185 - 258

E グループ 自分論：将来当事者としてかかわるか

(5) 理科を勉強すれば、私の好きな仕事につくことに役立つ 52 - 55

(9) 自分の好きな仕事につけるよう、理科を勉強したい 48 - 57

(11) 疑問を解決したり予想をたしかめたりする力がつくよう、理科を勉強したい
55 - 46

(12) 将来、理科の勉強を生かした仕事をしたい 77 - 100

3 当事者としてかかわることを避ける生徒たち

提案型の授業を受けた生徒の B と D グループの質問の指標は、従来型の生徒のものよりも大きく上昇している。物の区別が環境問題とも関係することを具体的に学んだことが影響していると考えられる。一方、自分の将来とかかわる E グループの質問の指標は、従来型および提案型ともに約半分になっている。

この違いは、理科の教材や授業を工夫すれば理科が好きになるか、などの視点ではなく、自分の将来というキャリア教育の視点から説明することが可能であると考えた。大きく指標が上昇した B と D グループの質問は、建前的、優等生的に答えやすいものである。状況が認識できれば、重要性を指摘するのは簡単である。従来型の生徒に比べて伸び率が高いのは、提案型の授業が状況認識に効果的であったことを示している。重要なポイントは、答えはあくまで一般論あるいは他人がやることとしたものであり当事者性がないことである。一方、E グループの質問は、自分が当事者としてかかわっていくかどうかを聞いている。提案型の授業により、状況が認識されただけでなく、その複雑性や解決の困難性に気づいてしまい、科学者や技術者になるのは大変だと思った可能性がある。当事者として考えた場合、代わりの方法や自分に対する説明が思いつかず、とりあえずかわらないという安全策をとったように思える。

理科が好きかという(1)の質問でも、従来型の指標は高くなったのに対して提案型は変化しないという結果が得られた。従来型の生徒は、物質を見分けるのに科学は役立つのだと評価を高めたのに対して、提案型の生徒はむしろ科学は万能ではなく、分別回収など社会システムの重要性に気づき、他人事として建前で答えられる BD グループの質問のように無邪気に「理科が好き」とは答えにくくなっているようである。

4 それでも「そう思う」と答えた生徒は本物か？

以上のように、提案型の授業は、理科への興味や関心を高めることには成功しているが、キャリア教育としては十分なものではないことがわかった。ただし当事者としてかわりたくないとする生徒が多いなかで、それでも「そう思う」すなわち「かわりたい」を選んだ生徒の意志は、むしろ強固になった可能性がある。アンケートによる統計を減ったと読むのではなく、意識のしっかりした個人が着実に増えたかどうかを読むことも重要である。このことは、感想文を丁寧に読み解いたり、授業ビデオを精査することで見えると考えられるが、今後の新田教諭や大橋さんの卒論の結果を楽しみにしたい。

考えさせられたこと：科学としての手続きに関連して

人間発達科学部 片岡 弘

2006 年は物理や化学の分野において「ニセ科学」が話題に上った年であった。日本物理学会のシンポジウム[1]や日本化学会誌上[2]において警鐘が鳴らされた。その背景には、学校教育の一部の現場にニセ科学が浸透したことへの危機感がある。科学を一見装っているが、科学として成立していない荒唐無稽な話を、教員や生徒が科学的な事実として信じてしまう事例が発生しているのである。例えば「水は言葉を理解できる。水によい言葉（ありがとう等）を見せるときれいな結晶となり、汚い言葉（ばかやろう等）を見せると汚い結晶ができる。」という主張（所謂「水からの伝言」）が「言葉を大切に」「人に思いやりを」といった道徳教育のキーワードと合致するため、インターネット上で指導案として公開され全国に広がった。この辺りの事情については書籍[3]や web サイト[4]を参考にされたい。「水からの伝言」は根深く広がり、国会の文教・科学委員会で好意的に紹介されたこともある[5]。2007 年でも教科書出版会社の道徳教材[6]に指導案が掲載されている。もちろん筆者は「水伝」の教育現場での無批判な使用に反対の立場である（科学リテラシーの教材には打ってつけたと思うが）。

ニセ科学のなにが問題なのであろうか。荒唐無稽が悪いわけではない。科学を装い、科学に疎い人々を騙すところに問題がある。科学とは物事の因果関係を帰納的推論によって解明しようとする行為である。仮説（理論）と実験的検証（再現性）のバランスの上に成り立ち、何がしかの効果を主張する際は基準との比較検討が必要など、幾つかの基本的ルールがある。「ニセ科学」にはそれが欠落している。例えば「水からの伝言」では水が言葉を理解する原理を「波動」という科学用語を用いて説明しようとする。しかしそこに物理学的な根拠はなく、実験結果の再現性も確認されていない。つまり科学とよべる代物ではなく、それは提唱者自身も認めている[7]。それでもこの話は科学として一部の教育現場に広まった。その原因として、教員の科学知識や科学リテラシーの不足、逆説的な科学への信頼による効果などが指摘されている。科学者が社会に対して情報発信を怠ったことも要因であろう。教員養成にかかわる身として考えさせられる。

今年度の本研究部会では授業単元の導入方法に関して 2 種類の方法が比較検討された。これが科学的な方法であることは言うまでもないが、学校現場で厳密な対照実験を行うことは多くの困難を伴う。担当された先生は、異なる授業を別々の学級で実施する上での様々な配慮が必要となり、大変な苦勞をされたことと思う。教育において「仮説」を検証することの大変さを改めて認識した次第である。

参考資料 [1] 日本物理学会第 61 回年次大会 30aWA 物理と社会シンポジウム『「ニセ科学」とどう向き合っていくか?』（2006）。[2] 安井至, 化学と工業 59, 953 (2006)。[3] 左巻健男「水はなんにも知らないよ」ディスカバー携書 001 (2007)。[4] 田崎晴彦『「水からの伝言」を信じないでください』<http://www.gakushuin.ac.jp/~881791/fs/> [6] 参議院会議録情報 第 150 回国会 文教・科学委員会 第 2 回 [5] 諸富祥彦・尾高正浩・土田雄一（編著）「小学校「道徳シート」とエンカウンターで進める道徳 高学年」明治図書(2007)。[6] AERA 2005 年 12 月 5 日号（朝日新聞社）。

現場・地域から日本の科学教育を変える —附属中学校・小学校・学部共同研究の可能性—

人間発達科学部 林 衛

松本謙一は、新学部誕生 1 年を期した紀要第 1 号のなかで、“学部再編を契機にした附属総合学園（仮称）構想”を示している（富山大学人間発達科学部紀要，第 1 巻第 1 号：93-100(2006)，学部ホームページからダウンロードも可能）。学部がになう教員養成能力の向上，地域での教員研修の充実，教育委員会との連携による中核教員育成への貢献といった課題にいつその取り組みをするためのだいたんな改革案が具体的に述べられている。

この構想を目にし，その詳細を評価するだけの準備が筆者には整っているとはとても思えないものの，1990 年代以降に深まった日本の教育政策の迷走を振り返るにつれ，実践的な教育と研究を強力に進めていくためのしくみづくりの大切さを痛感させられている。そういった問題意識をもちつつ（共有しつつ），理科共同研究の可能性について，この場をお借りして簡単にまとめさせていただきたい。なにより大切なのは，現場にねざした理想性と実効性だと考える。

論点その 1・「発達段階」再考

「子どもの発達段階からみて早すぎる」「〇年生だったらこのくらいのレベルで」「定量的な扱いはむずかしいので定性的に」といった学習内容の設定に関する言説にしばしばでくわす。では、「早すぎ」「このくらいで」「むずかしい」といった判断の根拠は，充分なものになっているのだろうか。

文部科学省学習指導要領の改訂によって，理科の時間数も削減され，内容が厳選され，取り上げられなくなったり，低学年から高学年，中学校，高校へと先送りされるようになった。その際には，学力テストによって定着が悪いとされた部分が優先的に厳選，削除，先送りの対象となったという。ペーパー試験の正答率でみた定着の低さは，厳選の根拠として妥当だといえるのだろうか。

たとえば，10 歳のと時の世界観ならば新鮮な体験になるような観察や操作を先送りしたことで，幼稚な印象のある魅力の薄れた体験にとどめてしまうデメリットも見逃せない。「定性的な扱いにとどめる」といった表現が学習指導要領に目立つようになったが，定性的な扱いを実感をもって納得するためには，定量的な扱いに少なくとも一度や二度くらい挑戦する方法が何といても有効かつ必要な選択肢なのだともいえる。たとえ「むずかしい」内容であっても，意欲的に取り組むことで克服してほかの学習や将来の生活に結びつくのであれば，「むずかしさ」をカリキュラムからはすす理由にあげるのはまちがいであろう。

すべての教員が経験的にその存在に日ごろから接し，授業づくりにも必ず応用している「発達段階」をよりよく理論化し，共有できるものにする意義はいま高まっていると考えられる。その成果は，現場の教員レベルだけでなく，教育政策のレベルでも生かせるものになりうるだろう。

幅広い年齢の児童・生徒を継続的に追跡できる附属学校園をもつ学部にとってふさわしい研究テーマでもある。小学校，中学校，学部から教員が参加して実施した今回の授業実践研究は，その端緒を開くものとしても位置づけられよう。他の参加者のレポートにも，この観点からの考察が含まれているものと期待される。

論点その2・「科学リテラシー」「理科離れ」問題再考

1990年代は旧文部省による「新しい学力観」「教育におけるゆとり政策」が広がる時代であったと同時に、その半ばには旧科学技術庁などによる「理科離れ」キャンペーンが始まった時代でもあった（若者の理工系離れを1994年の科学技術白書で特集）。「理科離れ」キャンペーンは、理数系を中心とした学力低下論とともに「教育におけるゆとり政策」批判に結びつき、21世紀に「科学リテラシーの確立」という政策課題を産み落とした。

なかでも、日本学術会議と国立教育政策研究所を中心とした「日本人が身に付けるべき科学技術の基礎的素養に関する調査研究」（2006年度科学技術振興調整費「重要政策課題への機動的対応の推進」に採択）が規模のうえで最大で注目される。評議会、企画推進会議、事務局に加え、数理科学、生命科学などの七つの専門部会が並びA4ページ3枚のメンバーリストには、科学者やジャーナリストなど延べ約200人の氏名と所属がびっしり書き込まれている。

同プロジェクトにおける科学技術リテラシー＝「成人段階を念頭において、全てのの人々に身に付けて欲しい科学・数学・技術に関係した知識・技能・物の見方」が、「わかりやすく具体化して、文書化」されることで、90年代以降混乱が続いてきた教育政策のうちの科学教育部門に一つのゴール設定がなされる意義は小さくないと思われる。

いっぽう、つぎのような疑問に基づく懸念をぬぐえない。

（1）均質な個人の集まりを想定した「古典派経済学的」なリテラシーが、実際にはそれぞれが専門性を持ち寄って個人的あるいは社会的な意思決定を支えあうというネットワーク的・社会的なリテラシーに対してどこまで意味をもちうるのか（根本的な疑問）、（2）科学技術社会論やメディア論がさんざん批判してきた「啓蒙的」「国家動員の」「一方向的」な科学や科学教育が科学離れの原因なのだとしたら、原因と結果をとりちがえた対策は失敗に終わるのではないか（方法論的な疑問）、（3）教育現場から切り離された議論の結果が、トップダウンで教育現場に落とし込まれようとしたときに、現場教員の効果的な授業づくりにうまく結びつくのか（現実的な疑問）。

きわめて理想主義的な「新しい学力観」は教育現場に混乱をもたらしたものの、必ずしも歓迎されず、いまや葬り去られようとしてしまっている。それに代わって登場してきたのが、個人間、学校間の学力競争による差別化をもたらす新自由主義的な教育政策だ。

評価を教員による教育の改善のための道具にはするものの、個人間、学校間の学力競争を徹底的に避け、個人の動機付けを高めた学びとそれを保証する地域の学校を一つ一つよくしていくことを優先し、PISAテストにおいて「学力世界一」と経済発展を手に入れたフィンランドの教育改革のレポート（福田誠治：競争やめたら学力世界一、朝日選書（2006））を読むと、日本はフィンランドよりも先行していた理想主義を諦めて、それと逆行した路線に足を踏み入れようとしていることがわかる。モデルとされているのは、日本よりも国際学力試験の結果が悪い、英米の新自由主義的な公教育である。グループ学習や個人の動機付けを大切に学習、学力の底上げを重視したフィンランドの方式とは、じつに対照的だと感じられてならない。（上で紹介した科学技術リテラシーの考え方も、英米の新自由主義の流れと無関係ではない）。

1990年代以降、日本の教育政策は大きく振れ続けてきた。その悪影響を最小限に食い止めたのは、学校現場での教員たちの経験と力量と努力であったと思われる。附属学校園と学部教員が中心となって、地域を巻き込みながら、現場に則した実行可能性が高いかたちで、「科学リテラシー」「理科離れ」問題を共同研究し、有効な解決策をみいだし続けていく努力も大切であろう。

共同プロの新たな可能性

中学校 1 年理科「身の回りの物質」についての実践研究より

人間発達科学部 松本謙一

1 研究の取り組みから：部会運営における新たな展開

今年の理科部会では、附属中学新田教諭の授業実践 1 年理科「身の回りの物質」を中核に据えて、授業者である新田先生が自身の学習指導上抱いている問題の所在を明らかにして、その問題を部会の問題として取り上げる形で行った。

毎回理科部会では、単元計画や研究の手法だけでなく、全授業も公開するという取り組み方をしており、今年もその形で行った。授業者の負担が大きいだけに、何より授業者本人にとって価値ある研究とならなければならない。

今回の取り組みでは以下の 2 点の新たな展開が見られた。

① 複数学級における比較研究

今回の取り組みではじめて、1 学年 4 学級存在することを生かし、2 通りの単元展開を 2 学級ずつ行い、子どもの反応の比較研究を行った。まず、授業直前の子どもの実態調査を一斉に行い、4 学級がほぼ同じ実態であることを確認し、単元展開による子どもの育ちを比較する手法を試みた。これによって客観的なデータの取得が可能であると考え試みた。

なお、附属学園の子どもは、研究のための材料ではない。従って、2 種類の取り組みはどちらも子どもにとって価値があると考えられる方法で展開した。

② 卒論に生かす大学生の参加

今回のプロジェクトには、大学 3 年生も参加した。毎回の研究部会の記録や全授業のビデオ撮影、アンケートの整理や考察などすべてに参加し、この記録を手がかりにしてさらに学生自身の卒業論文作成のデータとして研究を深めていく予定である。

2 研究内容から：再考！「役立ち」と「探究」とのバランス

今回の研究を通して、改めて何のために理科を学ばせるのかということが気になってきた。「くらしに役立つから」という視点も確かに大切だが、「不思議に思うことをそのままにはしておけない」といった探究への意欲という視点も大切だろう。

両者のバランスをいかに保ち、『今を生きる子ども』にとっても『未来を開く子ども』にとっても価値ある授業を模索しなければならない。新たな問題が生み出されてきたように思われる。

社会科教育グループ 「おもしろい社会科授業」の創造（１）

人間発達科学部	岡崎 誠司 ・ 田尻 信一
附属小学校	瀬戸 健 ・ 松浦 悟 ・ 阿久津 理
附属中学校	山田 智子 ・ 西 嘉朗 ・ 堀内 和直

１．研究の目的と方法

昨年度、この共同研究プロジェクトでは、「社会科における小・中連携の模索（２）」のテーマのもと、資料活用能力の育成に焦点を当てて、小学校・中学校それぞれ１本ずつ公開し、検討した結果、「学習内容に直結する問い」「討論を中核とした授業構成」の有効性が授業観察・記録から明らかとなった。

本年度は、新しいメンバーが多数加わったこともあり、新しいテーマのもと授業開発を中心として取り組みを始めることとなった。研究の目的は以下の通りである。

- （１）「おもしろい社会科授業」を実現する条件を異校種間の意見交流を通して、具体的に明らかにする。
- （２）授業実践の検討を通して、本プロジェクト参加者の個別研究課題を探求するとともに、各教員の力量形成を図る。

「おもしろい社会科授業」というキーワードには、社会科授業の時間数が削減され、総合的な学習の時間が新たに実施されるという社会科の存在意義が問われる今日、改めて、社会科の本質を明らかにしようという意図がある。また、本プロジェクト参加者それぞれにとってより意義ある研究となるよう具体で論じようという意図がある。

この目的を達成するため、本年度は西嘉朗教諭によって中学校の公民的分野「人権について考えよう」を公開・検討した。西教諭は、「基本的人権の意義や人権の擁護・救済のあり方を理解させたい」という意図のもと、授業を開発した。そして、本授業の検討を通して、時事的な問題を取り上げるという「教材選択の視点」にはプロジェクト参加者の賛意が得られた。ただ、授業者が指摘しているとおり、生徒に視聴させたビデオには「資料としての客観性があるのか」、教師の発問に対して期待する生徒の反応はどのような知識を求めたのかという「学習内容の明確化」が、今後の課題として残ったといえよう。

とはいえ、西教諭の仮説「おもしろい授業とは『わかる授業』でもある」は、社会科の本質を言い表しているとともに、今後のさらなる研究を必要とする仮説には違いないだろう。

2. 中学校の社会科授業

(1) 題材名 人権について考えよう

(2) 題材の目標

- 1) 基本的人権がすべての人間に保障されていることを、自分たちの身のまわりの生活や国内外の出来事から意欲的に考えることができる。
- 2) 個人の尊厳と人間尊重についての考え方を、基本的人権を中心に深め、わが国の政治が日本国憲法に基づいて行われている意義について、多面的・多角的に考察し、判断することができる。
- 3) 人間の尊重についての考え方に関する様々な資料を収集し、学習に役立つ情報を適切に選択して活用するとともに、追究し考察した過程や結果をまとめたり、説明したりすることができる。
- 4) 人間の尊重の考え方を基本的人権を中心に深め、日本国憲法に基づく政治によって国民の自由と権利が守られていることを理解し、その知識を身に付けることができる。

(3) 題材について

人権とは、人間が人間らしく幸福に生きるために必要な権利であり、誰もが生まれながらにしてもち、誰からも侵されることのない権利である。現代の社会生活において、人間の生き方が問われ、豊かな人間性を育てることが基本的な課題として重視されている。その際、人間の尊重を核心とする基本的人権の理念は最もすぐれた具体的な指針となると考えられている。

本題材は、学習指導要領大項目「(3)現代の民主政治とこれからの社会」中項目「ア人間の尊重と日本国憲法の基本的原則」にあたる。基本的人権の学習については、基本的人権の理念が、人類の多年にわたる自由獲得の努力の成果であり、過去幾多の試練に堪えてきた価値あるものであること、自由で幸福な人間らしい生活を願う人々にとって、広く支持され得る普遍的な内容をもっているので社会生活に具体化する有効な指針となっていることを理解させる必要がある。そのためには、日本国憲法が保障している人権を網羅的に取り扱ったり、憲法の条文の解釈をしたりするのではなく、生徒にとって身近で具体的な事象を取り扱う必要がある。

そこで本題材では、条文解釈に深入りせず、基本的人権の基本的な考え方を具体的な生活、実際におこった出来事、時事的な問題などとのかわりから学習させ、自由・権利と責任・義務の関係を正しく理解させたい。

本時では、「松本サリン事件」を取り上げる。この事件は、某新興宗教団体がサリンを使用したテロ事件である。だが、一方で被害者であり第一通報者であった会社員が、当初は事件を起こした犯人であるかのように扱われた事件としても有名である。

会社員自身による手記が出版されたり、事件をもとにした映画が制作されたりと事件の後も話題となっていた。この事件は、メディア・リテラシー（情報を評価・識別する能力）の授業で取り上げられることが多いが、さまざまな場面で会社員の人権が侵害されていることから、この事件を取り上げた。事件を通して、どのような人権が侵害されたのかという視点から基本的人権の意義や人権の擁護・救済のあり方を理解させたい。

（４）生徒の実態より

松本サリン事件は、1994年におきた事件である。今から10年以上も前におきた事件であるが、知っている生徒が多かった。小学校の教科書にも載っている事件であり、小学校の授業でも取り上げられたためだと思われる。中には地下鉄サリン事件と混同している生徒が多くみられたが、この事件の方がより衝撃的だったからではないかと思われる。

松本サリン事件は、生徒の認知度が高く、興味をもって取り組める教材であると思われる。また、犯人扱いされた会社員の手記が出版されたり、その手記をもとに映画化されたりしており、それらを効果的に使い、この事件への興味を高めるとともに具体的な場面を通して人権について考えさせたい。

生徒へのアンケート調査より（37名対象）

- | | |
|---|-----|
| 1 「松本サリン事件」を知っていますか？ | |
| ・知っている | 17名 |
| 〈知っていること〉（複数回答あり） | |
| ・宗教団体が地下鉄でサリンをまいた。 | 10 |
| ・宗教団体によサリン事件 | 2 |
| ・住宅街にサリンがまかれた | 3 |
| ・第一発見者が犯人扱いされた | 6 |
| ・聞いたことはある | 20名 |
| ・初めて聞いた | 0名 |
| 2 日常生活の中で人権が侵害されることにはどんなことがあるか？（自由記述、おもな回答） | |
| ・悪口 | 9名 |
| ・いじめ | 8名 |
| ・個人情報の流出 | 8名 |
| ・噂 | 3名 |
| ・差別 | 2名 |
| 3 人権を守るためにはどのような手段があるか？（自由記述、おもな回答） | |
| ・個人情報を守る。 | 7名 |
| ・セキュリティを強化する。 | 4名 |
| ・情報をしっかり管理する。 | 2名 |
| ・訴える。 | 2名 |
| ・警察に訴える。 | 1名 |
| ・裁判をおこす。 | 1名 |
| ・きちんと自分の権利を主張する。 | 1名 |

生徒たちは、日常生活と人権侵害との関係については、悪口やいじめなど、身近なところで人権が侵害される場合があると考えている。また、人権を守るための手段としては、自己責任において人権を守ろうとする考えの生徒が多い。しかし、実社会の

中には、自分の力だけでは対処しきれない場合も多くある。人権が侵害された場合に裁判を受ける権利、公務員の違法行為によって損害を受けた場合の賠償請求権などが請求権として保障されていることを確認するとともに、基本的人権を守るための権利についての理解を具体的な事象を通して深めたい。

(5) 全体計画（全7時間）

- | | |
|---------------------------|---------------|
| 1) 「ちがい」と「差別」の違いは何だろう | ………… 1 時間 |
| 2) どうしたら平等になるのだろう ～平等権～ | ………… 2 時間 |
| 3) 「個人の自由」か「全体の利益」か ～自由権～ | ………… 1 時間 |
| 4) 人間らしく生きるためには ～社会権～ | ………… 1 時間 |
| 5) 新しい人権が認められるようになった背景は | ………… 1 時間 |
| 6) 人権を守るためには | ………… 1 時間（本時） |

(6) 授業の実際

1) 目標

- ・ 日常生活の中で人権の侵害がおこることに気づき、人権の意義や人権を擁護するための手段について理解することができる。

2) 展開

学 習 活 動	指導上の留意点
<p>○ 「松本サリン事件」の概要を理解する。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 10px; margin: 10px 0;"> <p>1994年6月27日の夕方から翌日6月28日の早朝にかけて、長野県松本市の住宅街で起こった、テロ事件。猛毒のサリンが散布され、7人が死亡、660人が負傷した。</p> </div> <p>○ 当時の新聞記事から、河野さんが主張している事実と報道での扱われ方の違いを確認する。</p> <p>《河野さんの主張》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 被害者であり、無実である。 <p>《報道での扱われ方》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 通報の会社員家宅搜索 薬品数点を押収 ・ 調査ミスで発生 松本県警が見方固める 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 事件の流れを把握しやすくするために表を使って説明する。【資料1】 ・ 当時の新聞記事の見出しを提示し、どのような報道が行われたかを理解させる。【資料2】

○ 本時の課題を確認する。

人権を守るためにはどのような手段があるのだろうか。

○ ビデオ「日本の黒い夏 [冤enzai罪]」を視聴し、各場面で河野さんが侵害された人権は何かを考える。

- A 事件発生
- B マスコミの報道や対応
- C 警察での事情聴取
- D 退院後の自宅での生活

○ 河野さんはこのあと自分や家族の人権を回復するためにどのようなことをしたかを考え、発表する。

- ・弁護士をつける ・裁判をおこす
- ・マスコミに謝罪と訂正の報道を求める

○ 本時の感想を書く。

・ この事件で河野さんは、自由権、社会権、プライバシーを守る権利など、さまざまな基本的人権を侵害されたことに気づかせる。

・ 日常生活の中で人権が侵害されることが起こり得ることを確認する。

・ 河野さんは、日弁連人権擁護委員会に人権救済の申し立てを行ったことも説明する。

・ 人権回復の手段を確認し、人権を侵害された場合には自ら考え行動する大切さに気づかせる。

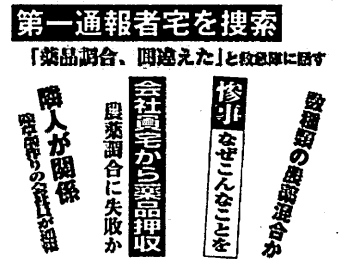
【資料1】

松本サリン事件の概要

1994年 6月27日
 22:40 河野さんの妻、意識不明
 23:09 119番通報
 23:14 救急車が河野家に到着、河野さん、妻、長女を病院に搬送
 6月28日 長野県警捜査一課長 記者会見
 「会社員宅から捜査令状により薬品数点を押収した。
 被疑者不詳、罪名は殺人」
 7月3日 捜査本部記者会見「原因物質はサリンと推定」
 7月30日 河野さん退院、記者会見を行う、松本警察署で事情聴取
 1995年 2月6日 河野さん記者会見「社会復帰のめどがたった」
 1995年 3月20日 地下鉄サリン事件
 4月20日 朝日新聞が河野さんに謝罪
 （この後、各新聞社が河野さんに謝罪）
 6月1日 捜査当局が松本サリン事件をオウム真理教の犯行と断定
 6月2日～各テレビ局で訂正・謝罪の放送

(『報道は何を学んだのか』岩波ブックレット、河野義行『「疑惑」は晴れようとも』文藝春秋より)

【資料2】



3) 生徒の反応

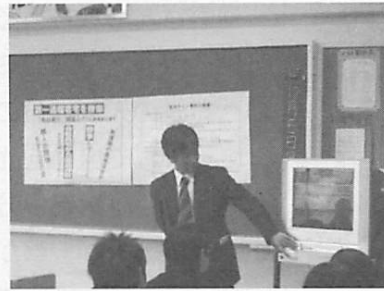
○ビデオを視聴し、A～Dの各場面で河野さんが侵害された人権は何か。

A「事件発生」の場面

- ・妻が苦しんでいる→生命の危機

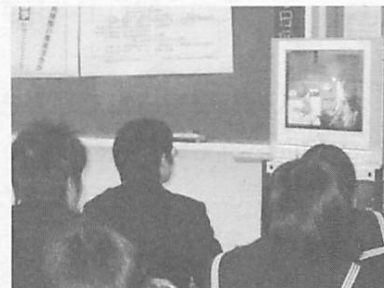
B「マスコミの報道や対応」の場面

- ・犯人であるかのような新聞記事を書かれた
- ・記者会見で犯人扱いされた
- ・勝手に写真を撮られた
- ・多くのマスコミ関係者に追跡された



C「警察での事情聴取」の場面

- ・診断書では事情聴取の時間は2時間と限定されていたが、7時間にわたって尋問された
- ・犯人と決めつけて自白させようとした
- ・確かな情報ではないのに犯人だと決めつけた
- ・黙秘権があるのに自白を強要した



D「退院後の自宅での生活」の場面

- ・えん罪なのに嫌がらせを受けた
- ・家族までもが犯人扱いされた

生徒から出た意見をまとめながら、具体的な事象からどんな人権が侵害されているかをまとめる必要があった。



○自分や家族の人権を回復するための河野さんはどのようなことをしたか。

- ・ずっと自白をしない
- ・証拠を警察に出す

残念ながら、生徒からは期待していた反応が返ってこなかった。期待した反応とは、「弁護士をつける」「裁判をおこす」「マスコミに謝罪と訂正の報道を求める」などである。実際には、これらの他に会社員は「日弁連人権擁護委員会に人権救済の申し立て」も行っている。人権を守るための権利について、教科書や資料集で調べてまとめる時間をとる必要があった。

《授業を終えての生徒の感想》

- ビデオを見て、マスメディアの影響力の大きさを実感しました。実際にはえん罪であってもその力によって世間の人々が事実だと信じてしまいます。その時に私たちに認められている裁判を受ける権利などを上手に使うことが大事だと思います。
- 無実の罪というのはとても苦しいものなのだなと思った。しかし、誰にも

河野さんになりうる可能性がある。絶対にそういうことを起こしてはいけないと思う。マスコミについても考えなければいけないと思った。

○ 警察の人が自分の言い分を信じてくれなくて、しかも、自分が悪いみたいと言われて自白を強要されたことが理不尽で、社会復帰にも差し支えるので、もう少し証拠を十分に集める必要があったと思う。

○ 無実の人が警察から無理矢理脅迫されてやってもいないのに河野さんがかわいそうだと思います。河野さんの人権を守るために、もっと証拠を集めてから取り調べをするべきだと思います。

人権を侵害された河野さんや警察、マスコミに対しての感想が多く、人権回復の手段にふれている人は少なかった。ビデオを視聴した後、侵害された人権について丁寧に確認し、人権を守るための手段を理解させることができなかったからである。

(6) 成果と課題

1) 映像資料の活用について

今回の授業では、映画『日本の黒い夏 [冤enzai罪]』を資料として活用した。1時間59分の作品であるが、主人公である会社員の人権が権限されていると思われる部分を抜粋して生徒に提示した。有名な俳優も出演しており、生徒は興味をもって感情移入しながら視聴していた。しかし、この映画は、事実をもとにしたフィクションである。監督や脚本家がねらいをもって撮影したものであるため、事実と異なる点が強調されているかもしれない。また、生徒は、脚色された警察官やマスコミの行動を見ることによって、実際の警察やマスコミに対してよくない印象をもつかもしれない。映像資料を使用する場合、本時の目的にあったものかどうかよく吟味する必要がある。

2) 知識の定着について

おもしろい授業とは「わかる授業」でもある。1時間の授業の中で、どんなことを

学んだかがはっきりしなければ、生徒はおもしろいと思わない。今回の授業では、基本的人権が侵害された場合に、その人権を回復する手段について学習した。そ

《中間考査での問題》

右の資料は、「松本サリン事件」で犯人であるかのように扱われた会社員が、人権を回復するためにとった行動である。他にどんな方法があるか、日本国憲法に保障された「人権を守るための権利」の中から答えなさい。

資料

- ・弁護士を頼んだ
- ・日弁連人権擁護委員会に人権救済の申し立てを行った

こで、その後の中間考査で、次の問題を出題した。

結果は以下の通りである。

《正答例》

裁判を受ける。

《正答率》

51.6%

《おもな誤答》

- ・ 請願権で警察やマスコミに賠償を求める。← 請求権と請願権を混同している。
- ・ 裁判所に訴え、無罪の判決を受ける。← 刑事裁判と民事裁判を混同している。
- ・ 警察に訴える。← 訴える機関を間違っている。
- ・ 信頼のあるテレビ局や新聞社に協力してもらう。
- ・ 新聞社などに訂正の記事を書いてもらう。

← 憲法で保障された「人権を守るための権利」ではない。

残念ながら、知識が確実に定着しているとはいえない状態だった。教えることは教えることとしてしっかり指導しなければならない。思考は積み上げていくものなので、思考の判断材料となる知識について、わからないようだったら丁寧に説明する必要があった。わかる授業のために基礎・基本となる知識を洗い出し、その知識を抑える必要を再認識した。

生活・総合グループ

附属幼稚園	廣田仁美，吉田真寿美，福江厚啓
附属小学校	松浦悟，松井昌美
附属養護学校	加藤雄一，柳川公三子，野原秀年
学 部	岡崎誠司，久保田真功，松本謙一，黒羽正見

I 研究主題

授業実践を通した生活・総合的な学習の時間のあり方の探究

II 主題について

今日の教育改革は競争という市場原理を積極的に導入することによって、学校組織の基底にある教員と教員の情緒的な絆を分断し、機械的教師像を認知させている傾向を強めている。その結果として、今日子どもたちの望ましい成長発達を保障すべき学校の基盤崩壊の危惧を禁じ得ない。というのも、競争という市場原理の導入が子どもと教師にカプセル化した学びを余儀なくさせ、共に学び合い、高め合って成長していく上で不可欠な対話を欠如させている実態を浮き彫りにしているからである。

そこで、本プロジェクトでは、次の2つの視点から生活・総合的な学習の時間のあり方を探究することにした。

- 1 各園の研修課題を踏まえた授業実践の分析・考察を通して、各園及びそこに所属する教員の成長発達を図る。
- 2 各園の授業実践を専門的見地から分析・考察して、理論と実践の統合を図る。

III 研究方法

研究方法は、昨年と同様に各自の生活・総合的な学習の実践事例をナラティブ的に分析しながら、教師自身の授業実践を振り返ることで、生活・総合的な学習の時間のあり方を考える。その際の主な方法として、授業カンファレンスを取り入れる。授業カンファレンスは具体的な授業ビデオ（映像）を通した検討・吟味である。個々の具体的な場面において、具体的な言葉、具体的ななかかわり合い、教師と子どもの学びの事実など、そのような相互行為に即して検討・吟味する。

以上のような授業カンファレンスは、授業実践を観察・批評し合う共同研修を通して、提案者と参加者の授業観，児童観，教材観などを交流するなかで、一人一人が変わる場として機能している。参加者の多様な視点は各自の参加者の経験に基づいている。そのようなさまざまな経験が授業カンファレンスの場において共有されていく。共有されることによって、参加者自身が自ずから変わっていくのである。一つの場面の見方が授業カンファレンスを通して変わっていくのである。このような授業カンファレンスによる振り返りの手続きは、次の通りである。

- ・ 年間9回を予定し、事前に課題に基づき、各自が自分の実践から考えを整理してくる。（今年度は、諸事情により、6回の実施となった。）

- ・ 提案者の授業実践のビデオ視聴（提案者のコメントを添えながら）
- ・ 参加者から提案者への批評・感想（コメント用紙に記述し、発表）
- ・ 浮かび上がってきた課題を全員で検討・吟味（参加者からの質問への応答も含む）
- ・ 提案者の振り返り（参加者の批評を踏まえての省察）
- ・ 毎回、意見交流をしたことに対する自身の気づきを整理し、最終的に「プロジェクトから学んだこと」と題する実践報告を各自がまとめる。

【研究の経過】

	実施日	場所	参加者	研修内容
第1回	H18.7.6	附属幼稚園 2階会議室	12名	・メンバー紹介 ・研究内容の検討
第2回	H18.8.28	附属幼稚園 2階会議室	8名	・附属小学校の実践事例の分析を行い、授業観や指導観等の検討
第3回	H18.9.5	附属幼稚園 2階会議室	8名	・附属幼稚園の実践事例の分析を行い、授業観や指導観等の検討
第4回	H18.10.19	附属幼稚園 2階会議室	7名	・附属養護学校の実践事例の分析を行い、授業観や指導観等の検討
第5回	H18.12.7	附属幼稚園 2階会議室	8名	・附属幼稚園の実践事例の分析を行い、授業観や指導観等の検討
第6回	H19.1.18	附属幼稚園 2階会議室	10名	・大学側からの問題提示：一教師の実践事例の分析を行い、授業観や指導観等の検討
第7回	H19.1.24	附属幼稚園 2階会議室	12名	・附属小学校の実践事例の分析を行い、授業観や指導観等の検討

Ⅳ 学び合いを深める中で気づかされること

昨年と同じ学びに帰結した。すなわち、各園の生活・総合の授業実践について話し合うなかで、子どもの学びの姿を深く見つめ直し、教師が子どもを学びの主体とする授業を創り出そうと思いをめぐらす大切さを実感したことである。参加者の一人が次のような感想を書き記している。すなわち、「多様な視点から協議は、その支援の裏にある子どもへの思い、多分にそれはその授業だけでなく、学校での活動すべてにおいて持っている思いを聴けてよかった。授業は教科としての内容も教えないけれど、学校教育全体を通して教えることもあることを改めて感じた。多人数で協議すると、自分では気づけなかったところに目が向けられたり、教えられたりして、とても勉強になる。授業場面ではついつい子どもの活動に乘せられて、見失ってしまう指導観の大切さを感じた」と。上述の通り、授業カンファレンスは一人一人が変わる場として機能している。各自の参加者の経験に基づく多様な視点が授業カンファレンスの場において共有されていく。そして、共有されることで参加者自身が自ずと変わっていくのである。この授業カンファレンスによる学びが語っているように、今日最も大切にすべきことは、教師個々人が自分の学級の足元をきちんと見つめ、自身の実践知を豊かにする日々の授業実践に徹することではないだろうか。それも独りよがりの実践に安住することなく、学び合いによって自身をひらくことである。

保育者の役割について考える

附属幼稚園 廣田 仁美

1. 1月30日の保育実践より（年長組 男児14名、女児13名 計27名）

いよいよ幼稚園生活の終盤となる3学期、子どもたちは同じクラスの友達5人から10人の集まりで遊びを楽しむ様子がうかがえる。その中で劇場を開いたり新しいルールの鬼ごっこを考えたりと仲間で遊びを生み出し、考え、進めようとする姿が見られるようになってきた。こういった姿の子どもたちに保育者はどんなことを意識し、具体的にどういった援助をしていくことが必要なのかを考えてみた。

【場面1】遊戯室でグラグラ迷路を大型積み木で作るS男と保育者

三角積み木の置き方を工夫し、自分なりの“グラグラ迷路”を作って楽しむS男。グラグラしているかどうかを自分で確かめながら迷路作りを進めている。保育者は迷路を歩きながらS男に「面白いねえ。でもここグラグラしていて、危なくない？」という。しかし、S男は気にして見に来るものの「大丈夫！」の一点張り。そこへ遊びに来たR男が「ここ何だかグラグラして危なくない？」と言う。S男は素直に積み木の組み方を考え直していた。

前日の降園時にS男が遊びを紹介したところ、大勢の友達から「面白そう！明日まで」と言われたこともあり、よりグラグラを楽しめるものにしたいと張り切っていた。S男の意識は“友達が「面白い」と言ってくれること”にあったと思われる。同じことを友達に言われるのと保育者に言われるのでは、その意味は大きく違っていると感じた。

【場面2】保育室で劇をつくっていくA子たちと保育者

役割分担したり音楽をかけたりして劇「兵隊たちの戦い」をつくっているA子たち10人組。T男らに「悪者になってくれない？」と声をかけ了解をもらったり、「音楽が終わったら戦いは終わりにしよう」と相談して決めたりとそれぞれが遊びを進めようとしている。しかし、なかなか全員に劇の進行が伝わらない。保育者は悪役の仲間になり、一緒に戦ったり「次はどうなるの？」と声をかけたりして子どもと共に流れを確認しながら遊んだ。



10人という大勢の子どもが集まって1つの遊びを進めていく経験が今までないため、全体をまとめていくためにどうやっていけばよいのか試行錯誤しているようである。

2. この時期の子どもたちにとっての保育者とは

この時期、「仲間である」という結びつきが強くなり、“保育者に認めてもらいたい”というより“友達と認め合い、楽しみたい”という気持ちが強くなっていることが分かる。さらに一人一人が自分の遊びを再考していき、それらを伝え合って一つの遊びをつくり上げる充実感を味わえるように、子ども同士の結びつきを生かし間接的に援助したり、時には仲間になったりして援助していくことが必要であると考えます。

提案事例 自分の遊びを大切にしながら仲間とかかわるけんじ

けんじへの保育者の願い

仲間と一緒に運動的な遊びを楽しみ、つながりを深めてほしい。

保育者がかかわった場面

保育者がけんじのそばへ来た時、すぐ横でたくさん子どもたちが元気にサッカーをしていた。「今日は、サッカーはいいの？」と声をかけた。しかし返事はない。続けて「ハサミムシ、今日は何匹が目標なのかな？」と尋ねた。しかし、「さあ」とつれない返事。保育者はしばらくハサミムシ探しをするけんじの横にいたが、他の遊びに呼ばれてその場を去った。

保育者は、ここでけんじへの願いと目の前のけんじの姿にズレを感じた。しかし、ビデオでこの日のけんじを見直すと、保育者とかかわる前には・・・。

けんじは、ペットボトルを手に、朝からハサミムシを探していた。いつもサッカーをする仲間のりくたちも一緒だ。けんじがハサミムシをつかまえると、りくは「ぼくにちょうだい。」と言う。しかし、けんじは答えない。しばらくしてもう一匹ハサミムシをつかまえた時、けんじはりくにハサミムシを一匹渡した。その後、りくや他の仲間はサッカーの遊びに移っていった。しかし、けんじはハサミムシ探しを続けた。その中で、ハサミムシに興味のある何人かの友達と会話を交わした。「ハサミムシには砂を入れてあげないとだめだよ」という友達の言葉を聞いて、園庭の砂をペットボトルに入れた。



けんじの経験

友達とつながりを持って遊んでいる。

自分がやりたいハサミムシ探しに夢中になっている。

友達の誘いを受け入れて仲間に入っている。

つかまえた虫に思いをかけている。

元気にサッカーをして体を動かしている。

保育者が去った後には・・・。

けんじはハサミムシを数匹つかまえた後、友達の誘いをきっかけにサッカーの仲間に入った。その際には、人数の少ない方のチームの仲間になっていた。ゴールの横にハサミムシの入ったペットボトルを置いて、時々中を確認するようにのぞいては、また、サッカーに戻っていた。それから片づけの時間まで友達と元気にサッカーをした。



保育者は、サッカーが大好きなけんじがすぐ横で友達がサッカーをしているにもかかわらず、一人で虫探しをしている場面に焦りを感じた。友達とかかわってほしい、体を動かす遊びを楽しんでほしい、という願いが強かった。けんじの「今は虫探しをしたい」という気持ちを汲み取れずにいた。

けんじは、自分自身が虫探しに満足したこと、友達の声かけによって、サッカーの仲間になった。

ビデオを見返したことや協議会から学んだこと

* 保育者は、子どもに願いをもってかかわっていたが、それが強すぎたため子どものしていることを認められなくなっていた。

* 保育者は、子どもとかかわった切り取られた一場面でその子を判断してしまっ、育ちにつながる経験をしていることをとらえきれていなかった。


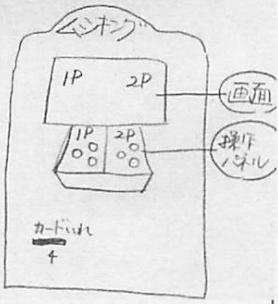


「子どもの育ちの課題を的確につかみ、子どもの内面を読みとって、意図的・計画的にかかわることが大切であるが、1点に絞りすぎると子ども自身の育ちや感動を見落としてしまうことがある。子どもの主体性や力を尊重することも大切である。」
「保育者が見た一場面を全てとらえるのではなく、子どもの生活の連続性の中の一場面ととらえ、子どもの気持ちや育ちを見ていく姿勢が大切である。」

思いを伝え合うために

附属幼稚園 福江厚啓

前日までたいへい・まさきが中心になって作ってきた「ムシキングゲーム」の機械。前日から加わったしゅんたは、機械の画面部分と操作パネル部分（紙が貼ってある）に「1P・2P」と勝手に書き込んでしまい、しゅんたが画面部分をつけては、意図に合わないと言ってまさきが外し…というやりとりになる。

T	（白い画面を取り付けようとしているまさきに）	
まさき	まさきくんはどうしたい？白いまま（の画面）がいい？	
しゅんた	うん。真っ白けっけでいい。	
T	描いたもの（1P・2Pと書いてある）を貼りに来る。	
しゅんた	しゅんちゃんの描いたの、1ピー、2ピー…？	
T	1P2Pって（画面と操作パネルを照らし合わせ、対応していることをまさきにも示す）。	
まさき	ははーん。しゅんちゃんのやっとなこと、先生にはわかったけど、お友達わからんかもしれんわ。	
T	（黙って1P2Pと書かれた操作パネルを取り外し、捨てる） （外されたパネルを拾っておく）	
しゅんた	しゅんちゃんが描いたの、1人用と2人用ってことやったんやね。で、1、2って書いてあるんやね。本物と一緒にや。	
T	大きい紙はどこにある？	
まさき	大きい紙、あるよ。これ（機械）、画面変わるようにすればいいのに。（しゅんたが以前作っていたものを暗に示す）	
しゅんた	（取り外した画面も拾っておく。しゅんたに紙を渡す）	
T	せっかく作ったムシキングー。	
しゅんた	（たいへいに）しゅんちゃんの考えてたことがわかりましたよ。画面に、1人の時と2人の時と出とって、ボタンもそこになってる（対応してる）ってことやよね。	
T	あァ！そういうことかぁ。	
しゅんた	そういうこと！ちゃんと意味あるんだよ。	

※研修会では、この場面をビデオで取り上げ、保育者の意図と併せて援助のあり方を考察した。

○保育者のかかわりの意図

当時のしゅんたは、遊びのイメージやアイディアは持っているが、友達とのかかわりはまだ浅く、それを言葉で友達に提案したり、一緒に相談しながら遊びを進めたりすることがまだ困難であった。保育者は、一人の仲間として一緒に遊びながら、しゅんたの思いやアイディアと一緒に遊ぶ子どもたちに伝えることで、しゅんたが友達と一緒に遊ぶ楽しさを感じ、少しずつ友達を内面化していくことができるのではないかと考えていた。

一方、たいへい・まさきは年少組からの進級児であり、互いにイメージを共有し合い、以心伝心のような関係で遊ぶことができた。2人にとって思いの読めないしゅんたが、彼なりにいいアイディアや思いを持っていることに気づき、いいところを認められるようになっていってほしいと考えていた。

○研修会を終えて

保育者がしゅんたの思いを伝えたことで、「そういうことか」とすぐ納得するたいへい。一方、「真っ白けっけでいい」と言ったまさきは、（このシーンの後）しゅんたの思いを知った後も自分のイメージにこだわった。子どもたちは「ムシキングの機械」を媒介として、自分なりの思いを出している。研修会では「必ずしもこの子たちが、一緒に仲良く遊ぶ必要があるのか、遊ばなくてはならないのか」という意見があった。遊びの中で自分の思いを表現しながら、少しずつ互いの思いにも気づいていくことが、近い将来にはイメージを出し合って遊ぶ楽しさを味わうことにつながっていくと考える。このシーンは、そのステップの一つであったのではないだろうか。

3年生における総合のあり方を探る

附属小学校 松浦 悟

1 導入期、3年生の総合をどう仕組むか

今年度、初めて3年生の総合に挑戦した。「先生、総合って何するの?」「生活科とどこ違うの?」。子供たちの姿に試行錯誤しながら、3年生の総合を実践してみた。

2 生活科と総合はどこが違うのか?

1学期は「呉羽山の自然を 楽しんじゃお」という単元を設定した。呉羽山の自然を楽しむ中で、地域の方にとっての呉羽山の意味に気づいていく学習を仕組んだ。市役所の公園緑地課の方、ファミリーパークや昆虫博士との出会いが、子供の呉羽山観や自然へのかかわり方にどんな変容をもたらせるかが生活科と総合の違いを考えるヒントになると考えた。



生活科・総合学会の全国大会の公開授業で、こんな子供のやりとりがあった。

美沙： 呉羽山で捕まえた虫の世話をしていない友達がいる。それは自然を楽しむのではなく虫を殺している。

理彩： じゃあ、(昆虫博士の)大野さんが一番虫を殺している。

隼人： 大野さんはわざと殺しているのではない。標本にするため。

理彩： 虫にとっては同じじゃないかな?嫌だと思う。

忠洋： 僕たちが死なせているのは意味なく殺している。大野さんののは意味がある。

亮： みんなに虫の名前を知って欲しいじゃないかな?

大紀： さわるのも嫌という人に、虫を見せてあげて関心をもってもらうため。

3 友達の生き方とかかわる

3学期は呉羽山の老人センターに来られる「おじいちゃん、おばあちゃんと なかよくなろう」という単元を行った。

1回目の交流会でお年寄りに劇を見せて大喜びをされた康宏は、自分のなかよし度(どれだけ仲良くなれたかを点数で表す)に100点をつけた。ところが、同じ劇を行った悠人が70点にしている事実に出会う。「確かに、おじいちゃんもおばあちゃん



も、劇を楽しんでくれた。でも、僕はもっともっと上手に劇ができたはずだった。自分に満足できなかった分、マイナス30点」と話す悠人。その発言を聞いて、康宏は「僕も台詞を間違えたことがあった。次は自分も楽しめるものにしたい」と言った。

子供たちは、活動を通して友達の生き方や価値観と比べながら、3年生なりに自分を見つめ直す場面がたくさんあった。来年度の総合で、どんな笑顔やどんな悩んだ表情、真剣な目を見せてくれるか楽しみだ。

授業カンファレンスから得た視点について 再度考えてみる

附属小学校 松井昌美

1年生 生活科「でかけてあそぼう あんようぼうこうえん」の授業カンファレンスで話題となったキーワード「気付きの深まり」。H児の1年間の歩みを追う中で、H児にとっての気付きの深まりとは何を意味するのかを考察していく。

<H児の主な活動>



1学期 ☆ぐるぐる遊具で 電車ごっこ☆
車内アナウンスのまね、友達に人気

※ 遊具で遊ぶ子供たちは流動的。
パッと乗って楽しみ、違うところに行って遊びまた戻ってくるという繰り返し。

<教師の支援>

教師もともに遊ぶ。楽しさを共感する仲間として

楽しさアピール 仲間を誘い込む楽しさ 「ねえ、来て来て！」



2学期 ☆ジャングル探検☆

発見した幻の花、天狗の葉っぱで
草花ケーキづくり

※ 隊長や隊員になって探検隊として活動し、新たな発見を報告し合う。草花ケーキの場が「活動の基地」になっている。

教師も一緒に探検。驚き、感動を共感、共有する仲間として

「自分たちの楽しさ」として共有する喜び 「これ、見つけたよ」「すご～い！」



3学期 ☆マッサージ屋さん☆

お客になって参加する楽しさ
「うれしい・楽しい」を伝えて、
もっと仲良く楽しく、仲間も広がる
※ 「アルバイトさせて」と仲間。
H児の提案が受け入れられ、
人気が出て、遊びが広がる。

仲間に入るのを断られたH児。日頃の感情を引きずっている様子。「お客さんならどう？この場所も空いてるよ」H児「マッサージしてください」「はい、いいですよ」Iの声かけが、参加のきっかけに。

相手のよさを認めながら互いに楽しむ喜び 「これ楽しいよ」「うれしいよ。もっとやろう！」

一瞬一瞬の気付きがその子供の中でつながり、その子供に変化をもたらす。つまり、「気付きの深まり」とは、その子供が活動を通して「何を学んでいったのか」「どう変容していったのか」というその子供の成長そのものを意味しているととらえていきたい。

「自分の求めること」の実現に向けて、対象と主体的にかかわる中で、気付きが生まれる。心から求めることが実現できた時にこそ、その子供の中に気付きが生まれ、心に深く刻まれるのである。子供が「何に気付いていたか」を知るには、まず、「その子供が何を求め、願っていたか」ととらえることが先決となってくるだろう。

入学以来、友達とのトラブルが多いH児。この実践でH児の様子を追うと、日頃のトラブルも「心を通わす友達を求めて、積極的なかかわりをした上で生じたもの」ということがいえるように思う。「H児が、自分が楽しいと思うことを一緒に楽しむ友達が積極的に求めていること」が見えてきた。そのような願いをもちながらも、自己中心的な言動が優先し、ついついトラブルを起こしてしまう。そのような時には、教師も間に入り、自分の行いを見つめて改善できるような立ち止まる場をつくってきた。H児の「公園にあるもの」への気付き、その感性は人一倍敏感である。その感動を伝える仲間を求め、また、友達もH児の発見に興味をもって集まってきた。互いの楽しさを共感し合う中で、次第にH児の仲間づくりは、流動的なものから、固定的なグループへ、そして、一番苦手であった「既存のグループへの加入」に、そして、そこから遊びや仲間の発展へと様相が変化していったのである。この1年間の実践で、H児の気付きの深まりは、「公園で様々な発見をしながら、友達と工夫して遊ぶ楽しさを実感していったこと」「互いの感動や楽しさなどを共感する中で、友達とのかかわり方を知り、かかわりを深めていったこと」だったといえるのではないだろうか。

自閉性障害を有する児童に対する日常生活で生かせる国語の指導

附属養護学校 柳川公三子・野原秀年・加藤雄一

1 はじめに

本学級は、小学部5年生3名と6年生2名の計5名からなり、そのうち4名が自閉性障害を併せ有する。そのため4名の児童は視覚優位であり、「話す」「聞く」活動は苦手だが、「見て読む」「書く」活動が得意である。これまでの学習では、「実際に体感してみる、やってみる」「空欄にカードをはる」「読んで発表する」「書いて覚える」など自閉性障害の児童にとって質問の意味や答え方が分かりやすいように工夫した。

本題材では、自閉性障害の児童が特に苦手とする「気持ちを表す形容詞」を取り上げ、自分の気持ちを言葉で表現する、相手の気持ちを聞いて自分が学習場面で獲得した言葉と置き換えて理解するなど日常生活の中での気持ちを表す形容詞の獲得を目指した。家庭において、どんな場面で、どんな支援で「形容詞」や「副詞」を使用したかを毎日記録してもらう保護者との交換記録ツールを導入して、保護者にもより豊かな言語表現を促すよう、連携を図った。

2 指導の実際

<展開> ※ 児童は M、N、O、P、Q

配時	学 習 活 動	教師の支援（個々の児童への支援）
	あいさつ	
1分	<p>○あいさつをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・パソコンを操作し、活動のスケジュールをスクリーンに映し出す。(Q) ・スクリーンの活動スケジュールを手掛かりに号令を掛ける。(M) ・M児の言葉掛けとベルの合図でQ児にパソコンの操作を依頼する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・最初のパソコン操作のタイミングが分かりやすいように「始めます」の言葉を合図とする。 ・パソコンの操作がしやすいように、Q児はパソコンの隣に座席を置く。
	<p>集団への配慮</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スクリーンに活動の流れを随時映し出すことによって、全員が見通しをもって活動できるように配慮する。 <p><スクリーン></p>	
	報告しよう！	
5分	<p>○家庭で使った形容詞を発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スクリーンに映し出された「気持ちノート」を見ながら、発表する。 	<p><気持ちノート></p>
	<p>集団への配慮</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発表者が発表しやすく、聞き手の児童も注目し、内容を理解しやすいように「気持ちノート」をスクリーンに映し出す。 	

- ・課題ボックスを座席の傍に置き、流れに沿って上から順に課題を入れておくことで、児童の動線が複雑にならずに、教材の準備や活動への取り組みが円滑になるようにする。

<課題ボックス>



答えてみよう

9分 ○場面を表す絵を見て気持ちを考える。

嬉しい 悲しい つらい 気持ちいい
気持ち悪い 寂しい 楽しい こわい
恥ずかしい おもしろい

- ・場面を表す絵を見て形容詞を答える。
- ・指名する (M)
- ・正誤を○×で提示する。(P)
- ・誤答の場合、正答を発表する。(N)



- ・形容詞を間違えた児童には、友達の正解を聞いて再度正解を導き出すようにする。
- ・誰の気持ちを答えるかが分かりやすいように、場面を表す絵にコミック会話形式の吹き出しを付けておく。



集団への配慮

- ・児童同士が役割分担することで、友達の発表を聞いたり、自分の役割を果たしながら活動に参加したりできるようにする。

はってみよう

5分 ○気持ちを表す形容詞のカードを読んで、ふさわしい場面の絵の吹き出しにはる。

- ・カードをはる。
- ・読んで発表する。

- ・文字を読むことができないN児には、どんな気持ちを表す形容詞なのかが分かるようにシンボルマークを付けておく。

集団への配慮

- ・移動に時間がかかるM児とN児は、形容詞のカードをはる活動のみを行い、素早く行動できるO児、P児、Q児は場面の絵のシートを準備する活動と形容詞のカードをはる活動の2つを行うことで、終了の一斉化を図る。

書いてみよう

12分 ○場面を表す絵を見てふさわしい気持ちを表す形容詞を吹き出しの中を書く。

- ・「～は～」と2語文を一人で書く。(P, Q)
- ・「～は～」と2語文を視写する。(O)
- ・気持ちの形容詞の部分だけを一人で書く。(M)


- ・活動の流れが途切れてしまう可能性があるN児には、手元のスケジュール表で次の活動を知らせる。



<2語文で記入>



<形容詞のみ記入>

	<ul style="list-style-type: none"> ・気持ちの形容詞の部分だけを視写する。 (N) ・書き終えたら、所定の位置に並び、教師にチェックしてもらう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・一人一人の到達段階に応じてステップアップをねらった課題を提示する。
	<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <p>集団への配慮</p> <ul style="list-style-type: none"> ・書き終えたら、1列に並んで待つことができるように、テープで床に印を付け、逸脱する児童には、印の線を指さしたり言葉掛けしたりして整然と並ぶようにすることで、全員が集中して課題に取り組む雰囲気を作るようにする。 </div> <div style="text-align: right;">  </div>	
5分	<div style="text-align: center; border: 1px solid black; width: fit-content; margin: 0 auto; padding: 2px 10px;">発表しよう</div> <ul style="list-style-type: none"> ○黒板に提示された場面を表す絵を見て、吹き出しのマスの中に気持ちを表す形容詞を記入する。 ・一人で書く。(M、O、P、Q) ・視写で書く。(N) ・読んで発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・一人で「読む」「書く」ができないN児には、シンボルマーク付きの形容詞カード2枚提示し、自分でふさわしい言葉を選んでそれを見ながら書くようにする。
	<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <p>集団への配慮</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一斉の活動から逸脱しやすいN児が進行役をすることで、ワークシートを指示棒で指し示しながら発表者を指名したり、友達の発表を聞いたりして活動に集中できるようにし、集団活動がスムーズに遂行できるようにする。 </div>	
3分	<div style="text-align: center; border: 1px solid black; width: fit-content; margin: 0 auto; padding: 2px 10px;">片付け・あいさつ</div> <ul style="list-style-type: none"> ○ワークシートをファイルに綴る。 ○課題ボックスを片付ける。 ○あいさつをする 	
	<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <p>集団への配慮</p> <ul style="list-style-type: none"> ・早く片付けが終わった児童(P児、Q児など)は時間がかかっている児童(M児、N児)がいたら一緒に片付けを手伝うことで、待ち時間を少なくし、一斉にきちんと終了できるようにする。 </div>	

3 まとめ

- 抽象的概念の理解が難しいと言われる自閉性障害を有する児童に対しても、静止画像を使い視覚的に場面の様子が明確に分かるようにしたことで、正確な言葉の意味の理解につながった。
- 保護者との交換記録ツールを通して保護者の意識が高まり、保護者が児童に対して既学習の言葉を使用するように働き掛ける姿が見られた。
- 題材が変わり、学習内容が変わっても、活動の流れを一定にすることで、児童が見通しを持ちやすく、学習内容の習得に効果があった。

授業研究会で明らかにしたいこと

人間発達科学部 岡崎誠司

本学に赴任して2年目。初めて、生活・総合共同プロジェクトに参加させていただいた。プロジェクト参加者の熱意と一人一人の子どもを大切にする真摯な姿勢に敬意を表したい。研修会は、いつも参加者の熱気を帯びた討論会となり、時間がたつのを忘れるほどであった。さて、実践者であれば、ここに自分の実践を子どもの変容とともに記載するところであるが、あいにくそれができないため、「授業研究会で明らかにしたい」と常に気にかけていることを書いてみたい。

公開授業をみたり、授業後の検討会に出席したりするとき、いつも考えるのは以下のことである。

「なぜ、この教材を扱うのだろうか」「この授業の内容は何だろうか」「なぜ、こういった方法で授業をするのだろうか」「授業者の考える学力とは何だろうか」

「子どもたちにとって、より意味のある一時間一時間であってほしい」と願う。親なら当然、教師ならもちろん…である。子どもの立場に立って考えた場合、毎日が日曜日なら嬉しいだろう。今日何をしても自由、明日することも自由、これが一番いいに決まっている。それを無理矢理学校という枠に閉じこめ、45分という時間制限を付けるのだ。一つ一つの授業に意味がなければ、子どもはそれこそ「やってられない」だろう。「目標も曖昧で何となく活動している授業」「先生の願いや信念につきあわされる授業」を受ける子どもは不幸である。（これは、本プロジェクトで公開された授業を指しているわけではない。念のため。）授業は、他者（保護者・参観者）に対して説得力を持ち、子どもが充実感を持つものでありたい。

授業者には何らかの教科観そして授業観があり、児童観・幼児観がある。だから、授業者によって千差万別の授業があり得る。それらが語られぬまま授業が公開され、検討される。だから、筆者はいつも、目に見える授業の裏に隠されている見えない教科観や授業観を探りつつ授業研究会に参加している。そして、いろいろな意見が飛び交い、授業者が様々な視点から語ることによって、教科観や授業観、児童観が見えてくる。ただし、その頃には、授業研究会（研修会）の時間は終了時刻となる。

願わくば、授業記録や学習指導案の前に教科観など授業者の基本的スタンスを明らかにしてもらえないだろうか。そうすれば、すぐに授業の核心部分についての討論を始めることができる、と考えるのだが。

生活科の充実・発展に向けて

人間発達科学部 久保田真功

今年度も昨年度に引き続き、生活・総合共同プロジェクト（以下、「プロジェクト」と呼ぶ）に参加した。プロジェクトに参加するなかで、附属学校の先生方の教育実践を垣間見ることができた。とりわけ印象に残っているのは、附属小学校の１年２組の担任をされている松井先生の実践である。松井先生は、生活科における子ども達の活動の様子や子ども達に対する支援等について説明された。以下では、松井先生の実践から学ばせていただいた点について述べるとともに、生活科の抱える課題について私見を述べたい。

松井先生の実践でまず驚かされたのは、資料の多さである。指導案をはじめ、授業内容を録画したビデオの内容を活字にしたもの、個々の子どもの実態を記述したもの、生活科で活用している公園の見取り図（子ども達の活動の様子等についても記述されている）などが配布された。これらの資料から、次の２点がうかがえた。１つは、松井先生が個々の子ども達の実態をおさえ、それに応じた支援の在り方を模索されていることである。教師には、１人で数十人の子ども達の教育的ニーズを把握し、それに応じた働きかけを行うことが求められる。このことは決して容易なことではない。しかし、松井先生の実践からは、このような難題に果敢に取り組まれている姿がうかがえた。

もう１つは、校外学習を行うにあたり子ども達の安全面に非常に気を使われていることである。このことは、公園の見取り図を見ても明らかである。見取り図には、公園の全体像が詳細に記述されているとともに、「上からジャンプした勢いで（子ども達が）けがをしないよう注意」といった記述や「（円旋塔を）すい分早くまわせるようになったので（けがに）注意」といった記述が見られる。公園は、子ども達にとって格好の遊び場である一方で、子ども達がけがをしやすい場所でもある。松井先生の実践からは、子ども達がケガをすることによって子ども達の学びが損なわれないよう配慮されている様子がうかがえた。

最後に、生活科について私見を述べ、本論を締めくくることとしたい。あらためて言うまでもなく、生活科が誕生し、その教育がはじまったのは平成元（1989）年の学習指導要領改訂による。それにともない、低学年の社会科と理科が廃止されることとなった。生活科では、身近な人や社会、自然と直接関わる活動や体験を通じて、子ども達に知的な気づきが生まれることが重視されている。一方、生活科の問題点としては、単なる活動や体験のみに終始しがちであるために、子ども達の知的な気づきが深まらない、といったことなどがあげられている。このような問題点を克服するために、教師はどのような環境づくりをすべきなのか。また、子ども達の知的な気づきを深めるためには、教師にどういったことが求められるのか。これらは我々教育関係者に課せられた大きな課題であるといえよう。

『自立への基礎』に直結した学びを保障するために

人間発達科学部 松本謙一

1 問題の提起

学習指導要領（生活科）に示された8つの内容についてまんべんなく学ぶことで究極的にねらう『自立への基礎』へ迫ることができるのだろうか？ 単元学習を重ねる中で、「子どもが願いをもって、何度も対象に働きかけ、解決していく。その結果、できる喜びを感じることを繰り返し体験していくことこそ大切ではないか。

ここでは、そういった学びを保障する上で、指導案における2つの提案をする。

2 指導案の単元目標の描き方への改善への糸口

《提案1》

問い直しの視点：子どもの立場からの問い直し - 単元構想・支援と評価について -

- ・ 教科学習と何が同じでどこが違うのか：「自分」を中核に据えた問題解決
- ・ 価値ある支援とはどんな支援か：子どもにとってうれしい支援
(能力・資質をつけることをねらいと考えてよいのか)



提案：教師は評価規準の視点から支援を行うのではなく、あくまで子どもの立場に立ち、「目指す子ども像」の視点から支援する。

・・・・・・単元の目標の描き方を工夫することで、提案を具体化できないか（全人的な姿）

《提案2》

問い直しの視点2：究極的な目標「自立への基礎」「生きる力」からの問い直し

- 年間計画について -

- ・ 内容をまんべんなく扱うことでねらいに迫れるのか：単元を重ねる意味
- ・ 内容と配時中心の年間計画で、子どもの育ちを保障したことになるのか



提案：内容の質的な違いではなく、どの内容にも共通する項目を年間計画に明記し、学習の積み重ねの中での育ちにも目を向けていく。

・・・・・・年間指導計画（複数年の場合もある）の立て方を工夫することで提案を工夫できないか（内容以外の視点）

情報教育グループ

1. 研究メンバー

附属人間発達科学研究実践総合センター	小川 亮
附属小学校	荻中泰弘
附属養護学校	浅川義丈

2. 研究経過

- (1) 前期に3者でプロジェクトの方針について検討を行った。
- (2) 平成19年度の活動として以下のような計画を立てた。
 - ・ 小学校における情報モラル教育の実践を行う。
 - ・ 附属学校園の保護者を対象とした情報モラル教育を検討する。
 - ・ 小学校、養護学校に共通した情報教育の教材を検討する。
 - ・ 附属学校園の情報環境について検討する。
- (3) 小学校における情報モラル教育の授業案を検討した。
 - ・ 保護者を巻き込んだ情報モラルの授業を共同で計画した。
 - ・ 附属小学校での実践は時期的に難しかったので、今年度は公立小学校で実践を試行した。
 - ・ 授業内容を資料に示す。
- (4) 小学校と養護学校に共通した情報教育の教材を検討した。
 - ・ 複数の資料を比較検討し、自分たちで開発する可能性も含めて検討した結果、学研から出版されている小学校中学年用、高学年用の情報の教科書仕様の参考図書を選定し、必要数を購入した。

「私たちと情報」(5・6年用) 学研	100冊
「わたしたちとじょうほう」 学研	100冊
 - ・ 今年度は実践が間に合わなかったため、来年度からの実践でその効果を検証することとした。
- (5) 附属学校の情報環境については、消耗品についての希望があったが、(4)の図書を今年度は購入することとした。

3. 親子で学ぶ情報モラルのカリキュラム(次ページ以降の資料を参照)

資料 開発した授業内容

1. 被験者

この研究の対象者は、魚沼市立堀之内小学校の小学6年生の2クラス計60名であった（男子36名、女子24名）。担任教師によると、児童たちは、インターネット検索やプレゼン、ワープロなどを自由に操作できるスキルがあるとのことであった。

担任教師が1学期に行ったアンケートでは、40%の家庭においてインターネットを利用していた。また、10人程度の児童が、ブログの開設を行っており、チャットや掲示板等を利用している児童もいるとのことであった。

1学期に、ブログがらみの問題が発生し、これに対し教師は、情報モラルの授業を行ったことがわかっている。またこの授業では、板書、アニメーションによる指導、具体的事例の紹介、学習内容の振り返りが行われた。その他児童たちは、5年生の頃からインターネットの危険性について指導を受けてきた。

このように、被験者は、情報モラルに対する学習経験のある程度持っている児童たちであった。

2. 教授者

富山大学教育学部情報教育課程教育情報システム専攻の学生1名が授業を行った。

3. 補助者

担任教諭1名および補助教員1名

4. 記録者

研究者1名

5. 指導内容

5.1 指導目的

本研究の授業実践では、情報モラルに関する分野の中でも、「個人情報の適切な取り扱い」について指導する。

5.2 指導目標

- (1) 個人情報の重要性を理解することができる。
- (2) 個人情報がどのように扱われる可能性があるのかを知るとともに、適切に対応することができる。
- (3) 自分や他者の個人情報を保護しようとする態度を身につける。

5.3 指導内容

いまや大人同様に多くの子どもたちが、インターネット上に自分のホームページやブログを作成したり、電子掲示板やチャットに参加したりしている。また、子どもたちであっても容易にインターネット上のアンケートや懸賞に応募することができる。そのような場合に、不用意に個人情報を流出させてしまい、トラブルや犯罪に巻き込まれてしまう場合がある。一度インターネット上に流出した情報は、回収あるいは消去することが難しく、また、インターネット上に流出してしまった情報は不特定多数の人に知られてしまう可能性がある。

このようなトラブルに巻き込まれないようにするためにも、子どもたちに個人情報の適切な取り扱いについて指導することは重要なことであると考え。

本授業では、個人情報の適切な取り扱い方について、“アンケートに答えると無料でプレゼントがもらえる”という場合にトラブルに巻き込まれる事例を通して学ばせる。

プレゼント付きアンケートや、懸賞への応募には以下のような特徴がある。

- 子どもであっても簡単に応募することができる。
- 思わず応募したくなるようなうたい文句が書かれている。
- 個人情報収集の目的など重要な事柄について子どもが理解するのは難しい。
- 記入を求められる個人情報の項目の中には、不必要なものが含まれている場合もある。
- 記入した個人情報を、適切に扱ってくれる主催者であるかどうかを見極めるのは難しい。
- 子どもは、「無料」という言葉に安心し、大人に相談することなく応募する場合がある。

このようにインターネット上のアンケートに回答することは、児童ならびに保護者にとって決して安全な行為とは言えない。このような事態に対する学習を可能にすることは、情報モラルの教育として意味のあることである。

5.4 IT 教材の利用

IT の活用を用いた指導場面では、児童の集中度や参加度が高まるとともに、能動的な行動が多く見受けられることが明らかになっている(山本・清水,2005)。

そこで、本授業においても、教材にデジタルコンテンツを使用し、子どもたちの学習意欲を高めるとともに、具体的なイメージを持てるようする。

5.5 親子の学習

授業では、子どもたちに個人情報の記入によって、どのようなことが起こり得るかということや、個人情報の記入によって、困ったことが起こらないようにするためには、どのようなことに気をつけるとよいかといったことについて、考えさせることにした。

しかし、このような学習は子どもだけが行っても、その効果が持続しにくいことが指摘されている。(梶本・堀田, 2004 : 和田・井上, 2004 他)。そこで本研究では、保護者に情報モラルの教育に関心を持ってもらうと同時に、子どもたちの理解を深めるために、親子で共に取り組む学習を宿題の形で取り入れた。

今回家族で学習してもらえように出した宿題の内容は、以下の通りであった。

- (1) インターネットの使い方について、児童が保護者と話し合う。
- (2) 話し合いのテーマは、「アンケートや懸賞へ応募するとき、どんなことに気をつけるとよいか。」である。家にインターネットがない人は、インターネットがあったとしたら、どんなルールを決めると良いかを話し合うことにした。また、家の人と話し合うことができない場合は、どんなルールがあると良いか自分の考えを書くことにした。
- (3) 児童に、宿題の説明および記入欄が設けられているワークシートと、保護者宛の資料を配布した。なお、保護者宛の資料には、今回行った授業の内容を説明したものと、宿題の内容やインターネット上のアンケートや懸賞に応募する際の注意点を記したものの2種類を用意した。

6. 授業の流れ

以下の表 2-1 に示したような流れで授業を行った。

表 2-1 授業の流れ

時配	児童の活動	学習活動への支援
4	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「ある」か「ない」か答える。 ○ 「できる」か「できないか」答える。 ○ 「個人情報」についての説明を聞く。 ○ 具体的な「個人情報」の例を挙げる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「個人情報」という言葉を聞いたことがあるかどうか問う。 ・ 「個人情報」がどんなものであるか説明できるか問う。 ・ 「個人情報」とは何か説明する。
4	<ul style="list-style-type: none"> ○ 発表の中では出てこなかった個人情報の例を聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 具体的な個人情報の例としてどんなものがあるか考えさせ、発表させる。 ・ 例を挙げるのに苦労している場合は、「学校に関係すること」や、「おうちの人に関係すること」で何かないか考えさせ、意見が出やすくなるよう工夫する。 ・ 子どもたちの発表の中では、出てこなかった代表的な個人情報の例

3	<ul style="list-style-type: none"> ○ 個人情報についてのプリントを受け取る。(まとめ1) ○ 個人情報についてのまとめを聞く。 ○ アニメーションを見る。 ○ 補足説明のプリントを受け取る。 ○ 補足説明を聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 個人情報についてのプリントを配布する。(まとめ1) ・ 個人情報について簡単にまとめる。 ・ アニメーションを途中まで見せ、その後どうなったかを考えさせる。 ・ 補足プリントを配る。(補足プリント)
4	<ul style="list-style-type: none"> ○ ワークシートを受け取る。 ○ ①アンケートに答えた後ダイスケくんになんかことが起こったかを考え、考えたことをワークシートに書く。 ○ 記入したことを発表する。 ○ アニメーションを最後まで見る。 ○ ダイスケくんのようにならないようにするには、どんなことに気をつけるべきかを考え、考えたことをワークシートに書く。 ○ 記入したことを発表する。 ○ まとめのプリントを受け取る。 ○ まとめを聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ アニメーションの主人公ダイスケくんが記入した個人情報の項目と、利用目的の注意書について補足説明をする。 ・ ワークシートを配布する。 ・ ①アンケートに答えた後ダイスケくんに、どんなことが起こったかを考えさせワークシートに記入させる。(記入場所を指示する。) ・ 考えたことを発表させる。 ・ アニメーションを最後まで見せる。 ・ ②ダイスケくんのようにならないようにするには、どんなことに気をつけるべきかを考えさせワークシートに記入させる。(記入場所を指示する。) ・ 考えたことを発表させる。 ・ まとめのプリントを配る。(まとめ2)
4 3	<ul style="list-style-type: none"> ○ 授業のまとめを聞く。 ○ 授業の感想を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ まとめる。 ・ ① 個人情報の漏洩によってどん

3	<ul style="list-style-type: none"> ○ 宿題のプリントを受け取る。 ○ 宿題についての説明を聞く。 ○ プリントを受け取る。(保護者の方へ宿題、保護者の方へ授業) ○ ワークシートを提出する。 	<p>なことが起こりうるかについて説明する。</p> <p>② 個人情報記入の際の注意点について説明する。)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 授業をまとめる。 ・ 授業の感想を書かせる。 ・ 宿題のプリントを配る。(宿題) ・ 宿題について説明する。 ・ 保護者宛のプリントを配る。(保護者の方へ宿題、保護者の方へ授業) <p>・ ワークシートを回収する。</p>
---	---	--

7. 使用教材

ネット社会の歩き方より 11 「住所や電話番号を教えるのは慎重に」

URL: http://www.cec.or.jp/net-walk/ujnidx/kojinjoho_k.html を使用する。

学習内容

個人情報の保護について、重要性を知り、情報を守るための方法について理解する。

あらすじ

主人公のダイスケくんは、プレゼントがもらえる Web サイトを見つけ、アンケートに答えてしまう。アンケートには、名前や住所などの個人情報も記入してしまったために、たくさんのダイレクトメールなどが届くようになってしまった。

アニメーション画面数：6







<本授業でのデジタルコンテンツの使用方法>

本授業では、スクリーンにデジタルコンテンツ（以下コンテンツ）を表示し、口頭でストーリーについて説明を加えながら使用する。

また、本授業では上述の指導目標を達成するため、使用するコンテンツに以下のような設定も加えた。

1. ダイスケくんがアンケートに記入した、具体的な項目を設定した。
 ⇒スクリーンに、記入した項目を表示するとともに、順に読み上げた。また、記入した項目を明記した資料を配布した。
2. ダイスケくんが答えたアンケートには、注意書きが書いてあったという設定にした。⇒スクリーンに、書いてあった注意書きを表示するとともに、読み上げた。先に配布している資料に、書いてあった注意書きを明記した。
3. ダイスケくんが、アンケートに答えた際に、家族の名前やお父さんの携帯電話の番号を教えてしまったという設定にした。
 ⇒先に配布してある補助資料に明記するとともに、口頭でも説明を加えた。

8. 補助教材

本授業では、Power Point で作成した画面をスクリーンに映し出し、補助教材として使用した。その内容は、配布した資料に即したものである。実際に使用したものを巻末の資料 7 に示した。

また、板書は行わず、あらかじめ質問や予想される回答は、模造紙等を書いて用意しておいた。そして、それら準備しておいたものを、発表に応じて黒板に貼付けていった。予想外の回答が出た場合は、その場に応じて書き加えたり、口頭により対応したりすることにした。

9. 配布資料

9.1 まとめ 1

まとめ 1 のプリントには、個人情報についての説明と、具体的な個人情報の例が書いてある。

資料は巻末の資料 1 に示した。

9.2 補足プリント

補足プリントには、ダイスケくんが記入したアンケートの項目と、アンケートに書いてあった注意書きが書いてある。

資料は巻末の資料 2 に示した。

9.3 ワークシート

ワークシートには、以下に記述した 3 つのことを記入させた。

- ① アンケートに答えた後、ダイスケくんになんかことが起こったか。
- ② ダイスケくんのようにならないようにするには、どんなことに気をつける
といいか。
- ③ 今日の授業でわかったことや思ったこと
資料は巻末の資料 3 に示した。

9.4 まとめ 2

まとめ 2 のプリントには、個人情報を入力した場合に起こり得る事柄と、個人情報を入力する際の注意点について書いてある。

資料は巻末の資料 4 に示した。

9.5 宿題

宿題プリントには、宿題の内容と宿題をする際の注意点が書いてある。また、宿題を入力する欄も設けられている。

資料は巻末の資料 5 に示した。

9.6 保護者用のプリント

保護者用プリントには、授業についての説明と、宿題についての説明が書いてある。

資料は巻末の資料 6 に示した。

国際理解教育研究グループ

国際理解教育の実践状況に関する研究

代 表 者	田尻 信壹
附属小学校	澤柿 教淳
附属中学校	堀内 和直
学 部	田尻 信壹

1. はじめに

平成18（2006）年度の国際理解教育研究グループ（以下、「国際理解G」と略記する。）には、澤柿教淳（附属小学校）、堀内和直（附属中学校）、田尻信壹（学部）が参加した。国際理解Gでは、今年度の研究テーマとして「国際理解教育の実践状況に関する研究」を設定し、各校が行っている国際理解教育の実践を持ち寄り、意見交換を行うことを決めた。そして、富山大学人間発達科学部附属人間発達科学研究実践総合センターで、3回の研究会〔平成18（2006）年7月27日、12月12日、平成19（2007）年2月22日〕を実施した。

今年度は、三つの実践について検討を行った。

（1）澤柿教淳

附属小学校が取り組んでいるロシア、中国、韓国との環日本海交流について

（2）堀内和直

附属中学校第2学年の総合的な学習「国際コース」の取り組みについて

（3）田尻信壹

富山大学人間発達科学部附属人間発達科学研究実践総合センター主催の国際理解教育・開発教育研究会の内容と教材開発について

それでは、それぞれの実践の概要と今後の展望について、次節以降で述べることにする
（文責：田尻信壹）

2. 附属小学校での取り組み ～今年度の環日本海交流の活動～

(1) 環日本海地域（中国、韓国、ロシア）から本校へ

環日本海地域から本校へ児童や教員が派遣されて行っている主な交流活動は、次の2つである。

1) 本校創校記念音楽会への参加

2) 本校での授業交流

1) については、昨年度、韓国ソウル・キョンヒ大学附属キョンヒ初等学校の児童約15名及び校長1名、教員3名が本校の創校記念音楽会に参加してバンド演奏などを披露した。

2) については、これまでに、中国の大連海事大学附属学校小学部から1回、韓国のソウル・キョンヒ大学附属キョンヒ初等学校から2回、ロシアのウラジオストク・ネヴェルスキー海洋大学附属小学校から1回、それぞれ校長や教員を迎えて本校で授業をしていた。教科は主に、図工や音楽、社会科である。

本年度も、平成18(2006)年11月15日～18日に中国大連から2名の先生が来校、次のような交流活動を展開した。

1) 譚彦非校長先生、林立先生(中国大連海事大学附属学校小学部)が、本校創校記念音楽会へ参加

11月16日、本校創校記念音楽会が行われた。この日に向けて子供たちも教員も心を一つにして美しい歌声を磨き上げる。歌うことの楽しさや、みんなでハーモニーを響かせることのすばらしさを心から実感できるこの活動の全過程は、その本格的な歌声とともに、本校の伝統的な財産の一つとなっている。このような学校行事に、中国大連から2名の先生が参加されるということには大きな意味がある。

当日、会場にはたくさんの関係者、保護者にお集まりいただいた。そこで中国からの2名の先生が紹介される。会場からは温かい拍手がわき起こる。2名の先生方は、親しみを満面に浮かべた笑顔で挨拶。会場は、国境を意識させない一体感で包まれた。

プログラムの中盤で、中国の先生による独唱が披露された。ピアノの傍らに立ち、遠くの一点を見つめるその凛とした姿が、一瞬にして私たちを惹き付けた。その透き通るような歌声は、会場いっぱいに広がり、聞く者一人一人の心にしみわたった。歌詞の意味はわからなくとも、どこかしら懐かしさを覚えるメロディーとそこから伝わる情景に、共感できるものがあった。

このような感動を伴う体験は、これからの国際社会、いや環日本海社会を築く子供たちに、大切な素養を培うこととなるだろう。

2) 林立先生（中国大連海事大学附属学校小学部）が、本校4年生に音楽の授業

11月17日、林立先生が本校4年生に音楽の授業を行った。中国ではよく踊られているというダンスと、そのバックに流れるリズムが中心的な教材となっていた。

初めに、中国の映像が流され、実際に踊っている様子を見る。子供たちは、その音楽や動き、服装などに注目していった。

次に、実際に体を動かしてみる。足のステップが1→2→3→4と図示され、子供たちはすぐに試すことができた。また、指先や手首の細かな動きには、頭を抱えながらも何度も繰り返し挑戦しようとする姿があった。

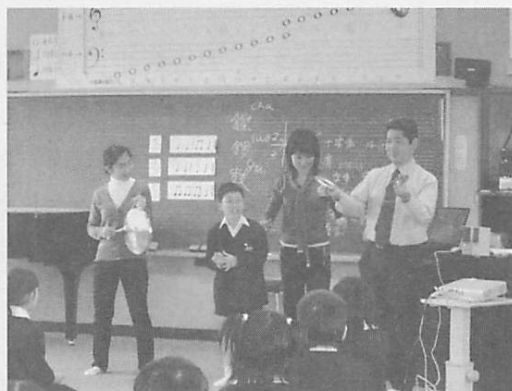
次に、リズムを作ったり、重ねていったりする活動が展開された。ここでは、中国独特の楽器も投入され、子供たちの興味はいっそう高まっていった。数名の子供を前に出して一緒にダンスを楽しんだり、周囲の教員まで巻き込んでリズムを作ったりして、終始笑顔の絶えない授業となった。

以前、本校で行われた中国の先生による図工の授業と比較してみる。共通している点として、以下のことがあげられる。

自国の文化（切り絵、中国の楽器など）をもちこんで授業が構想されているということ。

また、実体験や実物に触れる機会が豊富に設けられていること。さらに、教員のその教科における本質的な技能（切り絵の神業的な技能、人を魅了する歌唱力など）が高いということ。

そして何よりも、どの子供にも常に笑顔で接し、一人一人を認めていこうとする教育愛にあふれた人間性を持ち合わせているということである。



（2）本校から環日本海地域（中国、韓国、ロシア）へ

本校から、環日本海地域へ教員が派遣されて行っている主な交流活動は、次の2つである。

1) 交流校での音楽会への参加

2) -①② 交流校での実地授業

1) については、昨年度、本校副校長および教員1名が、韓国キョンヒ大学附属小学校の音楽会に参加した。

2) -①については、これまでに、中国大連海事大学附属学校小学部へ1回、韓国ソウル・キョンヒ大学附属キョンヒ初等学校へ2回、ロシア・ウラジオストク・ネヴェルスキー海洋大学附属小学校へ1回、それぞれ校長や副校長、教員、ふたば会代表等を派遣して授業をしてきた。教科は、主に図工や音楽である。

本年度も、12月11日～13日、韓国ソウル・キョンヒ大学附属キョンヒ初等学校へ本校校長、教員2名、ふたば会代表が訪問した。今回初めて社会科の授業を試みた点は、多くの示唆を与えるものとなった。

2) -② 本校の松浦悟教諭による韓国ソウル・キョンヒ大学附属キョンヒ初等学校での社会科授業の実施

12月12日、本校の松浦悟教諭が、韓国ソウル・キョンヒ大学附属キョンヒ初等学校の5年生を対象に、社会科の授業を行った。本時では、日本の国技「相撲」を中心的な教材とした。単元名「大相撲から日本が見える」には、大相撲を通して日本の文化や風習を理解するだけでなく、



韓国人が昔から守ってきた心情や態度、誇りなどにも目を向けて自国を見つめ直す契機となればよいという願いが込められている。初めに、「トントン相撲」の遊びを通して、楽しみながら相撲のルールや特徴を理解できるようにした。一人一人が十分に活動したり、グループで対戦したりできるように、用具の数などにも配慮した。子供たちは、あっという間に相撲の楽しさを体感していったようである。同時に、正々堂々と戦う態度や相手を敬う精神も学んだようであった。

次に、「大相撲の映像」を資料として提示する。土俵やまわしなど子供にとって新鮮な情報が資料から読み取れるだけでなく、実際の力士の気迫や緊張感などといった本物だけがもつ独特の感覚までをも、子供たちは獲得していくことができた。

次に、その映像から不思議に思ったことや気になったことなどについて話し合う場を設定した。この時、一人一人が着目した視点を「付箋を活用して資料にはる」という手立ては、大きな効果があった。例えば、授業者はどの視点について深めたり広めたりするかを、言葉を介さずに的確に判断することが可能になるし、子供たち同士も、互いの異同を意識して対話することができるようになるのである。

最後に、韓国の国技テコンドーについても言及していく。そこで、子供たちは自国の文化を改めて実感していった。そして、そのよさを見出したり、他者に伝えたり、もっと調べてみたい視点をもったりしていった。

(文責：澤柿 教淳)

3. 附属中学校での取り組み ～第2学年総合的な学習「国際コース」～

(1) 本校の取り組みについて

本校の総合的な学習の時間は、3年間で身に付ける力を明確にし、見通しをもって取り組んでいる。第1学年では「郷土富山」をテーマに、富山についての課題を設定し、追究計画、追究、発表・まとめまでを一通り経験してみるというねらい、第2学年では「21世紀に生きるⅠ」をテーマに、第1学年で身に付けた力をもとに、特に発表・まとめの力を身に付けることをねらいに、第3学年では「21世紀に生きるⅡ」をテーマに、第1・2学年で身に付けた力をもとに、自分たちにできることを外部に提言していくことをねらいに取り組んでいる。

(2) 留学生へのインタビュー

第2学年では、各自が設定した課題をもとに、環境A、環境B、情報、国際、福祉、健康・スポーツ・その他の6つのコースに分け、コースごとに担当教師の指導や生徒同士の情報交換をもとに追究活動を進めている。

私が担当している国際コースでは、34名の生徒のうち3名の生徒が平成18(2006)年11月15日(水)、富山大学に来ている留学生にインタビューを行った。国際コースは、課題が海外に関係することなので、実際訪問して聞き取り調査を行うのが困難なことが多い。そこで、富山大学に来ている留学生に聞き取り調査を行うことにした。手順は以下の通りである。

1) 富山大学留学生センターから得た情報をもとに、国際コースの生徒全員に留学生にインタビューしたいかどうかアンケートをとる。

・生徒に、留学生の出身国を教え、どの国の人にどんなことを聞きたいかをアンケートに書いてもらった。

2) 担当教諭が留学生センターへ行き、留学生と打ち合わせを行う。

・職員の方から、留学生は平日は正午から午後1時ぐらいまでセンターの1階にいらっしゃることが多いという話を聞き、その時間に行って、生徒からの質問を説明し、訪問予定日に都合がいい留学生の方とアポをとった。

3) インタビューの実施要項を送付する。

・内容は期日、ねらい、訪問先、訪問生徒、質問内容、希望する留学生、生徒の交通手段、当日の生徒の日程、中学校の連絡先、現在アポが取れている留学生とその時間である。

4) 生徒が留学生センターへ訪問し、インタビューを行う。

・Kさん、Mさん、K君の3人は学校から歩いて行き、午後2時から3時までインタビューを行った。

(3) インタビューの様子

1) 経緯

Kさんは「韓国と日本の食文化の相違点」、Mさんは「韓国はなぜデモをするのか」、K君は「日本と外国の食の違い」について追究していた。KさんとMさんは韓国の方へ、K君は韓国だけでなく中国、ベトナム、マレーシアの方にもインタビューをした。

2) 質問内容と留学生の方の解答

韓流ブームをきっかけに韓国の文化に興味をもち、食文化に焦点を絞ってKさんのインタビューを紹介する。

- A 自分の国の食の文化、歴史について何か知っていますか。
 - ・主食は米で、はしを使って食べるが、はしは金属のものを使う。
- B 自分の国の食事をする時のマナーについて何か知っていますか。
 - ・食事の時に声を出さない。茶碗を持って食べない。目上の人より先に食べてはいけない。汁物はスプーンで食べる。食べる順番はない。
- C 日本と自分の国の食の違いは何ですか。
 - ・犬を食べる。食事中にフルーツは食べない。

3) インタビューを終えて

Kさんは、インタビューをしたことによって、自分の課題の答えが見えてきて、追究活動もはかどったという。直接話を伺うことの大切さを実感したようである。

(4) 考察

生徒の感想にもあるように、Kさんは学校にはなかなかできない海外の話を直接聞くことができ、追究活動にとっても役立ったようである。同じ大学の関係施設の訪問ということもあって、始めは気軽に考えていたが、実際留学生センターと連絡をとると、担当教諭が直接伺ってアポをとることが必要だった。

今後も、きちんと手続きを踏み、国際コースの生徒にとって有意義な留学生センターの訪問を続けていきたいと思う。

(文責：堀内和直)



富山大学留学生センター（五福キャンパス内）

4. 大学での取り組み～国際理解教育・開発教育研究会の実施と教材開発～

(1) 国際理解教育・開発教育の教材開発

ここでは、人間発達科学部附属人間発達科学研究実践総合センターで行った小・中・高校で活用できる国際理解教育・開発教育のカリキュラムや教材の開発を支援する研修会の取り組みについて紹介する。

1) 国際理解教育・開発教育研修会の実施



人間発達科学部附属人間発達科学研究実践総合センターでは、国際理解教育・開発教育のカリキュラムや教材の開発を支援するために、毎年、研修会を実施している。今年度は、平成18(2006)年11月3日(土)に人間発達科学部多目的教室を会場に、県内の中・高校教員や富山大学生など34名が参加して行われた。

今年度の研修会は、午前、午後の2部形式で行われた。午前の部では、2つの研究発表が行われ、また午後の部では、同志社女子大学教授の藤原孝章先生を講師に迎えてのワークショップが実施された。

セッション1(午前の部)

講師：窪木靖信氏(富山大学学生・NGOインドネシア教育振興会代表)

インドネシア教育支援のボランティア活動を通しての教材開発

田尻信壹(人間発達科学部附属人間発達科学研究実践総合センター教授)

ケータイを使っの多文化カルタ作り

セッション2(午後の部)

講師：藤原孝章先生(同志社女子大学教授)

地球的問題と私たちの暮らし マレーシアの油やし・プランテーション開発を題材に

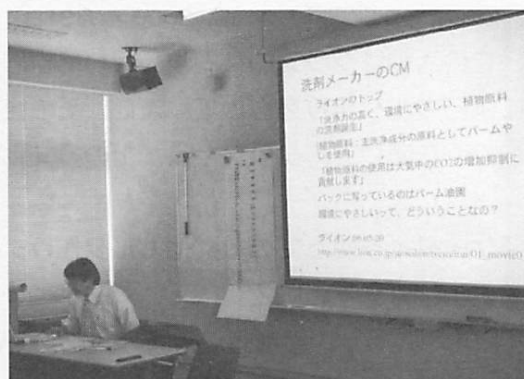
当日は、韓国やインドネシアの留学生も参加し、活発な意見交換や活動が行われた。参加者からの意見を二、三紹介しよう。

○ワークショップの経験が少なく少し不安もありましたが、内容が分りやすく楽しめるものでした。事前の準備や資料もそろっていた点も助かりました。今日のように、いろいろな世代や国、違った職業の方々が集まり、国際理解教育や実際に教材を使って活動できたこ

とがとてもためになりました。(富山大学生)

○開発教育に興味があり、担当する社会科授業でも、一度「パーム油」を使った授業をやってみました。その時は無理矢理にこじつけた面がありましたが、今回、藤原先生の実践についてお聞きし、大変参考になりました。次回の実践では、今回のお話を参考にしていきたいと思います。(中学校教員)

○日々の忙しさからつい単調な授業をしてしまっていることに気づき、この研修会に参加させて頂きました。写真を使った話し合い、ケータイの使用など、少し準備すれば授業に使えるそうで、たくさんのヒラメキを頂くことができました。パーム油の実践は、一から授業をつくることは難しいので、今回教えて頂いたものを一度私なりにアレンジして実践してみたいと思います。本日はとても参考になりました。(高校教員)



今年度の国際理解教育・開発教育研修会については、参加者へのアンケート調査でも、「大変参考になった」との声が多く聞かれた。この研修会はワークショップ形式の楽しい催しであり、ユニークで面白いカリキュラムやアクティビティが紹介されるので、是非、多くの教員や学生達に参加してもらいたい。

2) 「ケータイを使っの多文化カルタ作り」の紹介

国際理解教育・開発教育研修会で紹介された教材や授業の中から、筆者が開発した「ケータイを使っの多文化カルタ作り」のアクティビティについて紹介しよう。

①「ケータイを使っの多文化カルタ作り」の意義

国際化の進展の中で、地方都市でも、多くの外国人が居住し、生活する姿を目にすることは当たり前になってきた。この結果、日本社会には、多くの外国人によって多種多様な習慣や文化が持ち込まれてきた。児童・生徒たちには外国人の生活や文化、歴史を正しく理解し、偏見をなくしていくことが必要となっている。そのため、今日の教育では、多様な文化をもった人々と共生していくための資質や技能の育成を目指すことが求められている。このアクティビティはこのような能力を育成するために開発したものである。



上記のカルタは国立民族学博物館のワークショップで参加者が作成したもの（吹田市万博公園，2006年7月31日）

で、この活動はクラスの共同作業として位置づけることもできる。クラス全員の分業と協業によるカルタ作りを通して、また、その後の自分たちの作ったカルタを使っての「カルタ取り」を通じて、クラス全員が街の多文化的状況を学ぶことを目指した活動である。

私たちは、街の多文化的状況について、意識して見ないと見落としてしまうのが実情である。今回、開発したアクティビティは、日本人の7割以上がもつという携帯電話を使い、街を歩いて多言語表示や外国料理のレストラン、宗教施設などを写真に撮り絵札とし、それに対応した読み札をつくるというものである。この作業では、児童・生徒に「街の多文化的状況」を意識化させることを目指した。また、予めカルタの読み札と絵札を児童・生徒に割り振ることで、

②「ケータイを使っの多文化カルタ作り」の方法

【アクティビティの概要】

「カルタ作り」の参加者に、「いろは四十八」枚の絵札を割り当てる。ケータイ（携帯電話）の内蔵カメラで写真に撮って絵札をつくり、それにそった読み札を考える。

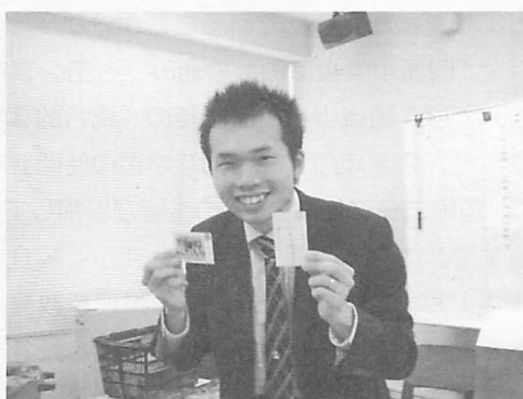
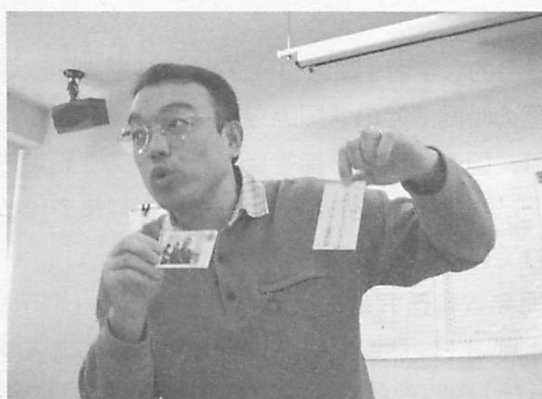
【用意するもの】

- ・携帯電話（カメラ付き、赤外線送信ができる型）[各自]
- ・ケータイプリンタPiVi（フジフィルム製）と専用フィルムMPFP1
- ・サインペン（油性ペン・黒）[参加者分]
- ・マイタックラベル円形（絵札と読み札に貼るので糊付きのもの）
- ・読み札用台紙（厚手の画用紙）



〔絵札・読み札の作り方の手順〕

絵札の作り方	読み札の作り方
a 携帯電話の内蔵のカメラで撮影 b 画像を携帯電話からPiviへ赤外線送信 c Piviから受信後20秒でフィルム送出 d 右上にラベルを貼る e ラベルに割り当ての文字を書き込む	a 右上にラベルを貼る b ラベルに割り当ての文字を書き込む c 絵札写真を見て、読み札の文句を考えて、読み札に書く



↑ ケータイを使って作ったカルタ

← (作品)の発表風景



③ 「ケータイを使っての多文化カルタ作り」を終えて

カルタ作りはクラスの一員が一体となって参加し、活動できるアクティビティである。日本人の7割以上がもつという携帯電話を使い、クラス全員の分業と協業による「カルタ

作り」を通して、「街の多文化的状況」を学ぶことを目指した活動である。今回のワークショップでも、大学生も教員も和気あいあいとカルタ作りを楽しんでいた。

携帯電話を教室に持ち込むことには色々な議論があろう。小・中学校では、携帯電話の学校への持参を禁じているところも多いと聞く。携帯電話の普及状況を考えるならば、「コロンブスの卵」の例の如く、私たち教員は発想を転換して授業で活用していくことを考えてもよいのではないだろうか。

(文責：田尻信壹)

5. おわりに

今年度は、国際理解Gに参加した3人が所属する学部や学校園の実践を持ち寄って、意見交換を行った。

2「附属小学校での取り組み ～今年度の環日本海の活動～」(澤柿教淳報告)では、富山大学人間発達科学部附属小学校と海事大学附属学校小学部(中国・大連)、キョンヒ大学附属キョンヒ初等学校(韓国・ソウル)、ネヴェルスキー海洋大学附属小学校(ロシア・ウラジオストク)との交流が紹介された。富山大学人間発達科学部附属小学校と日本海を囲む中・韓・露三国の交流では、それぞれの国の教員が他国の学校の授業に参加するなど、着実な進展が見られていることが分かった。

3「附属中学校での取り組み ～第2学年総合的な学習『国際コース』～」(堀内和直報告)では、附属中学校2学年の「総合的な学習の時間」での「国際コース」の実践が紹介された。2学年の「総合的な学習の時間」では、国際や環境、福祉など6コースが設定され、国際コースには34名の生徒が参加している。附属中学校の生徒と富山大学に來ている留学生との交流の様子がほほえましく紹介されていたのが印象的であった。

4「大学での取り組み ～国際理解教育・開発教育研究会の実施と教材開発～」(田尻信壹報告)では、平成18(2006)年11月3日(土)に人間発達科学部附属人間発達科学研究実践総合センターが主催して行った「国際理解教育・開発教育研究会」での活動が紹介された。「ケータイを使っでの多文化カルタ作り」や「インドネシア教育支援のボランティア活動を通しての教材開発」、「油やし・プランテーション開発を題材としたワークショップ」など、国際理解教育・開発教育のカリキュラムや教材の開発について、具体例を示しながら進められ、参加者は国際理解教育・開発教育を行う上での多くのヒントを得ることができた。

国際理解Gの今年度研究会では、参加者の実践を持ち寄ることによって国際理解教育の取り組み方法やスキルについて共有できたことは大きな成果であった。今後は、国際理解Gへの参加者を増やすとともに、国際理解教育を通して学部と附属学校園との連携を深めていくことが重要になってくるであろう。

(文責：田尻信壹)

先端研究の教育利用グループ

学 部 林 衛（研究代表）
附属幼稚園 永井 鷹介

1. 先端研究の教育利用の目標

大学などの研究機関で生産される学問知を、社会の中で生かしていくのは重要な課題となっている。しかし、その実現は、簡単なことではない。

たとえば、SSP（サイエンス・パートナーシップ・プログラム）やSSH（スーパー・サイエンス・ハイスクール）などの予算を利用して、研究現場から教育現場への「先端研究」出前授業の機会が増えているものの、その多くは必ずしも教育的な効果を生んでいないという。そうになってしまう理由の一つは、学校で学ぶべき内容につながりのある出前授業にならずに、生徒が我慢して講演の時間をすごすだけの、その場限りのものになってしまっている点にあるという。

学問知を、社会のいろいろな現場で利用するためには、その現場の実情に応じた選択や加工が必要になってくる。それを実現するための学問世界と現実世界とのコミュニケーションによって、学問世界の情報が現実世界に伝わるだけでなく、学問世界の人間が、自分たちの研究の意義を問い直す機会を得られるといったメリットも注目されている（科学コミュニケーションの「双方向性」）。

そこで、附属学校園という教育現場と、学部での研究を新たな形で橋渡しし、先端研究を教育利用する可能性を広げるという目標を立てて、本研究を企画し、参加を呼びかけた。

本年度は、共同研究の呼びかけに応じて参加した永井の保育者としての仕事につながるよう、「保育の研究成果を現場の保育者や親たちに役立つ形で情報発信する」というテーマを設定した。

本学部での卒業研究などによって、実践的なデータが毎年得られているが、その成果は残念なことに地域の保育者や親たちの目にはなかなか届かない。そこで、ある卒業研究の内容やその意義を、指導教員として研究を進めた小林助教授へのインタビューによって引き出して、ウェブ上の読み物として公開する計画を立てた。読み物にする意義は、論文よりも多くの読者（子どもの親や家族、現場の保育者、その卵）に読んで、活用してもらえることにある。

最新の卒業研究のなかから、「自己抑制タイプ児に対する支援の在り方」（2006年3月卒業の中村侑子による）を選び、その研究成果を軸にインタビューを実施するこ

とした。また、この研究で分析した事例と似た状況への対応は、保育者がしばしば経験するものである。そこで、現場の保育者にも意見を求め、研究結果の普遍性や応用可能性をさぐることにした。

2. 本年度実施状況

以下のとおり研究打合せとインタビュー調査を実施した。インタビュー記事づくり以外にも、富山大学幼児教育教室の現在と将来をスタッフが集い語りあう座談会をもとにした記事づくりや、参加者を集めての科学カフェスタイルのイベントも候補にあがったが、最終的に、じっくり聞き出し、じっくり読めるのが特徴である単独のインタビュー記事づくりが選ばれた。

- ・ 7月5日：第1回打合せ（附属幼稚園にて）
 - ・ 10月22日：第2回打合せ学部内の保育関係論文を検討（教育学研究科大学院生 亀井信も参加）
 - ・ 12月11日：第3回打合せで小林助教授へのインタビューに絞る
 - ・ 12月13日：小林真助教授と3人で第4回打合せ
 - ・ 1月22日：インタビュー内容の打合せ（付録1のインタビュー項目案を準備）
 - ・ 2月2日：小林助教授インタビュー実施（聞き手：永井，写真撮影：林）
 - ・ 2月17日：インタビュー原稿完成に向けた打合せ（以降まとめに入る）
- # 電子メールを使つての打合せは随時

インタビューでは、永井が若い保育者である自身の体験や疑問を折り込みつつ小林助教授に問い掛け、回答を得るスタイルをとり、テキストのまとめの際には「サイエンス・ライティング」の手法を活用した。

ここで、同じ分野の専門家同士が、専門のためのやりとりをする科学の書き方を「サイエンティフィック・ライティング」と呼ぶとしたとき、専門や職業（さらには年齢は生活経験のちがい）を越えてより多くの読者に伝わるような科学の書き方が「サイエンス・ライティング」である（例えば、林衛・西村尚子：「サイエンス・ライティング2・ストーリーの立て方・専門用語の取り回し」、千葉和義・仲矢史雄・真島秀行編著：サイエンス・コミュニケーション・科学を伝える5つの技法、日本評論社（2007）90-106）。

3. 本年度の達成点

本年度に計画した新プロジェクトであったが、附属学校園から1名の参加を得て、活動を開始できた。準備段階での調査、実際のインタビューを含めて、小林助教授の地域

に根ざした活動に触れたことは、幼児教育についてわずかな読書経験しかなかった林にとって、本学部の教員の専門性の広がりを知る好機となった。

卒業研究時の論文執筆とは異なる、広範な読者に向けた表現法（サイエンス・ライティング）経験を含む永井の感想については、別項をごらんいただきたい。

現在、インタビュー原稿がほぼ完成しており、関係者への確認の後、科学技術社会コミュニケーション研究室サイト（4月オープン予定）にて公開する準備が進んでいる（付録2のサイト完成イメージ参照）。

林は、ほかの科学ジャーナリストたちに呼びかけて、2002年ごろからサイエンス・ライティング講座プログラム開発の試みを開始した。すでに、サマースクール（生化学若い研究者の会、物性物理若手の会、総合研究大学院大学湘南レクチャー）や大学学部（東京大学教養学部、東京工業大学）、大学院（京都大学大学院生命科学研究科、お茶の水女子大学教員養成GP）、NPO法人サイエンス・コミュニケーション主催・共催講座（駒場講座、京都大学講座）向けに実施してきた。この共同研究は、これまでの蓄積を生かし、富山の地で新しい科学コミュニケーション活動を進めていく第一歩となった（参考として、林衛：市民科学革命の道具としての「科学技術社会コミュニケーション」、富山大学人間発達科学部紀要、第1巻、第1号（2006）81-91）。

4. 今後の展望

今回のインタビューのねらいであった若い保育者向けの情報提供は、新年度も続けていきたい。とくに、サイエンス・ライティングによって表現された読み物を若い保育者や保護者ほかにも読んでもらい、評価を受けるところまで進めてはじめて、研究としての意義の有無が確認できる（付録3にあるとおり、卒業研究に現場で協力した幼稚園の担任の先生の場合、研究の内容を生々しく記憶・理解している。サイエンス・ライティングの成果は、より広範な読者によって評価される必要がある）。

そういった評価のための活動を、若い保育者同士が情報交換や切磋琢磨できるネットワークづくりにつなげることも視野に入れて取り組みたい。

サイエンス・ライティングを初めとする科学コミュニケーション手法の活用対象は、もちろんのこと、幼児教育に限らず、学部内外の多様なテーマに適應できるだろう。新年度に本プロジェクトが継続されれば、より多くの共同研究者の参加を望みたい。

先端研究の成果を、小学校や中学校の教科教育でよりよく利用する教材開発も継続課題である。

（文責：林 衛）

共同研究の感想

附属幼稚園 永井 鷹介

「先端科学の教育利用」というテーマを見て、色々な科学分野の先端知識を得られるのであれば、自分の人間観を形成する上で役に立つのではないかと思い、参加を決めた。

実際に始まってみると、自分のイメージを越えた活動やできごとが多かった。第1回目の打合せでは、まず参加者が1名ということに驚いた。その後、林先生と話すうちに自分が一方的に講義を受けるのではなく、文字通り大学の先生と共同で活動を進めていくのだということをじわじわと実感し、「できるのかと」という不安と、「面白そう」という興味が湧いた。

実際に活動を進めていく中で、インタビューやウェブ上での公開を意識して文章をまとめるなど、これまで経験したことのない活動が多かったため新鮮で興味深かった。と同時に戸惑うことも多かったが、大学の先生のアドバイスと協力のもと安心した気持ちで活動を進められた。インタビューは林先生の得意分野であったため、素人の自分が進めやすい形で活動を計画、立案できた。インタビューにおいては、事前に二人でインタビュー内容を作成・検討することで、当日口下手な自分でも小林助教授から話をうかがえた。

幼児教育専攻にしながら学生時代には知り得る機会のなかった小林助教授が現在のような研究に取り組むこととなったきっかけや、研究者としての信念などもうかがうことができ意義深かった。また「研究成果を親や保育者など広範な読者に向けて発信する」ということを意識してインタビュー項目をまとめてあったため（付録1）、文章に起こしやすいインタビューとなった。そのため思ったより苦労せずに文章にまとめることができた。ただし、実際にその文章が読みやすかつ読み応えがあるかどうかはまだわからない。ウェブで公開したあとの意見や反応を待ちたい。

共同研究での経験は新鮮で興味深いものが多く、大学や研究に対するイメージを広げ、身近にしてくれた。今後の展望としては機会があれば、さらに別の研究を紹介したり、ウェブ上の文章に関する意見や感想を得たりしてページを更新していきたい。またそうする中で親や保育者など幼児と関わる中で悩んでいる人と知り合いになり、悩みを話し合ったり、意見しあったりできるようになったら嬉しい。特に自分と同じような立場の若い保育者と知り合うきっかけとなったらさらに嬉しい。そういう意味ではこの共同研究はやればやるほど意義深いものになるのではないかと予感している。今はまだ始まったばかりだが今後の展開に期待したい。

付録1. インタビュー項目案

小林先生に送る質問事項の柱

- ・なぜ年長組でやったのか
- ・子どもの社会性の育ちにとって幼稚園のはたす役割
- ・子どもをどう選んだのか（自己抑制タイプ見ってどんな子どもなの）
- ・働きかけの方法と子どもたちに起こった変化
- ・保育者や親へのヒント
- ・研究や子育て支援で小林先生がこれからやりたいこと

インタビュー記事の流れ（計画→これ以上いいものにするための最低ライン）

★年長さんってどんな時期（なぜ年長組でやったのか＝なぜ年少、年中でやらなかったのか）

自分たちで遊ぶ

女の子同士のグループができていく（男のほうかゆるやか）

★幼稚園は、子どもからみてどんな環境なのか（子どもの社会性の育ちにとって幼稚園のはたす役割）

親や兄弟と暮らしていたところから、親がいない状況で集団保育を経験する

保育者との関係づくり

友だちになっていく

ぶつかりあったり、怒ったり、泣いたり、感情を爆発させたり、家庭内とはちがった経験をしていく

子ども通して思い通りにいかないとき（親は「ものわかりがとてもしい」）、限度なく叩いちゃう子もいれば、何もできない子どももいる。

★子どもの特徴を把握する方法（子どもをどう選んだのか）

対象児の選出の際のインタビューの方法

自己抑制タイプ見って

★働きかけの方法と子どもたちに起こった変化

変化をどう変化と認めているのか

たまたまではないのか

担任の先生はどうみたのか

#ビデオ観察の方法や問題は必要に応じて（必須ではない）

★保育者や親へのヒント

保育相談や子育て支援とのかかわりも

★小林先生の今後の活動・研究の計画（明らかにしたいこと、生かしてもらいたいこと）

#県教委とのプロジェクトの社会性育成パネル？

小林真先生のプロフィール

児童相談所の経験もある。毎日遅くまで、質問に来るゼミ生だけでなく、幼児教育や発達臨床の学生への質問にていねいに答えている。土曜日には、教育相談に県内から親子連れが研究室を訪れる。

付録2 サイト完成イメージ

ウェブページに、写真入り、図表入りの読み物として掲載する準備を進めている。

タイトル、リード、予定項目（小見出し）は、以下の通りである。

研究室から実践の現場へ・・・現場から研究室へ

若い保育者や親へ、保育・育児のヒント集、のぞいてみませんか？

子どもと向かい合い、日々悩みながら保育に取り組む若い保育者、子育てのヒントを求めている親御さんたちに向けて、保育や育児のためのヒントとなる研究を紹介します。

○子どもだって人間関係で悩んでいる

○働き掛けで子どもたちが変わる

○若い保育者をさりげなくサポートする環境が大事

付録3. 紹介した自己抑制タイプ児の担任だったA先生によるインタビュー原稿への感想

お二人の対談を読んで、懐かしさが湧き出てきました。

今回の研究は、自己抑制タイプの子どもへの支援ということでしたが、保育後に様々なことをインタビューしていただいたことで、自分の保育を振り返り、今後に生かしていけるいい機会をいただいたと感謝しています。

保育者は好きな遊びの時間やクラス単位の活動場面などで、クラス全員、その中のグループ、また、個人など、いろいろな人間関係や個人の願いを瞬時に判断し行動しなければなりません。当然、保育者の願いもあるわけです。

ですから、保育者の援助を客観的に記録することで、その子に対する保育者の願いを確認できたり、潜在的な思いなども発見できたりしました。また、研究対象を絞ることで、その視点から個やまわりへの援助のあり方を整理して考えたりできました。

さらに、保育者はその子が今どのような願いをもち悩みを抱えているかを、しっかり観察し、明らかにしていく必要があると改めて感じました。特に幼児期は発達はまだ未分化な時期ですから、表情や言葉、行動など、まるごと受け止め判断していく力が求められます。子どもの、ある一部分だけをみて判断し保育してしまったことが何度もありましたから。

今回の研究でも、その子の社会的スキルの実態を確認した上で適切な援助を行ったところに成果が出ているといえます。

貴重な研究に担任として参加させていただき本当にありがとうございました。

学校教育相談グループ

附属中学校におけるピアサポーター養成プログラム 実施についての事例研究

学 部	:	稲垣応顕・尾崎康子
附属小学校	:	永田純子
附属中学校	:	島田みどり
附属特別支援教育学校	:	谷尾千里
附属幼稚園	:	岩田郁代

1. はじめに

昨年来、学校教育現場における子供たちの問題として、いじめが再びクローズアップされている。このいじめは、極めて現象学的な側面を有するため、それを定義する事も難しい。その中で、例えば文部科学省(1997)は「自分より弱いものに対して一方的に、身体的・心理的な攻撃を一方的に加え、相手が深刻な苦痛を感じているもの」とし、警察庁(1998)は「単独または複数の特定人に対し、身体に関する物理的攻撃又は言動による脅し、嫌がらせ、無視等の心理的圧迫を反復・継続して加える事により、苦痛を与える事」としている。一方森田(1999)は、彼自身の国際比較研究を踏まえ、いじめの操作的定義の構成要素が世界各国でほぼ同じである事、それが①被害の発生、②被害の継続性もしくは反復性、③力のアンバランスに基づく力の乱用、であると述べている。

ところで、今日の学校教育現場では、いじめを含む子供たちの様々な問題に対し、事後処理的な指導ではなく、平素から子供たちの発達の・成長的な側面に着目して、子供たち自身で問題に対処できる力を育てようとする開発的・予防的カウンセリングの発想による開発的・予防的カウンセリングの発想による心理教育が行われるようになってきている。具体的には、構成的グループエンカウンター、ソーシャルスキル・トレーニング、などがその代表例であろう。それに対し筆者らは、滝(2002a)が提唱するピア・サポートに着目している。これは、“仲間通しの支え合い(助け合い)”を意味している。そして、着目の理由として、学校教育現場においては多数の子供に対し教師の数が極めて少ない。したがって、個々への決め細やかな指導は大切ではあるが限界もある。また、教師には見えにくい子供同士の世界が存在する。したがって、その世界を良質なものに向かわせやすいのは、子供たちの自治能力

であるとの考えを有している。これはロジャーズが述べる「クライアントの問題をどのようにしたら良いかについて、最もよく知っているのはクライアント自身である」との指摘にも通じるところである。

ちなみに、ピア・サポートにも複数の流派が存在するが、筆者らは滝(2002b)の考え方を支持している。それは、第1段階として活動の中核となるピア・サポーターを養成し、第2段階としてそこで養成されたサポーターが、各学級や部活動などの集団で“草の根的に”他者をいたわり支え合う雰囲気や問題解決への力が広がっていくというものである。

2. 目 的

改良を加えたピア・サポーター養成プログラムを附属中学校の生徒に継続して適用し、①生徒たちの心理的変容を把握する。また、②プログラム内容が生徒たちにどのように受け止められていたのかについて検討する。

3. 方 法

- (1) 期間：2006年5月～9月。1回当たり約50分のプログラムを6回(原則として隔週)で実施する。
- (2) 場所：人間発達科学部附属中学校研修室
- (3) 対象：人間発達科学部附属中学校生徒24名(生徒会のA委員会所属の生徒であり、各学級2名が選出されている)。

なお、昨年度同様、学部および大学院学生の教育を兼ね、これまで本プログラムの企画と実践に関わってきた人間発達科学部の学生(8名)をメイン・ファシリテータおよびサブ・ファシリテータとした。筆者らは、スーパーバイザーの役割を担った。

- (4) プログラム内容：基本的に、プログラムのテーマおよび内容は稲垣ら(2004)を踏襲した(表1)。ただし、用いる教材(掲示物・ワークシート・振り返りシートなど)は、改良を加えた。
- (5) 分析方法：毎回の振り返りシートの項目における回答の変容および自由記述を分析の対象とした。なお、本シートの質問項目は、①活動を楽しむことが出来ましたか、②グループの雰囲気に溶け込むことが出来ましたか、③活動において、自分の言いたいことが言えましたか、④活動において、相手に自分を理解してもらえたと感じますか、⑤活動において、相手を理解しようと思いましたか、⑥今後、この活動は何かに生かせると思いますか、の計6つであり、「その通り」―「その通りではない」までの5件法で回答を求めた。

表 1 ピア・サポーター養成プログラムの内容(テーマと主活動)

	＜テーマ＞	＜活動内容＞
第1回	仲間作り	自己紹介と他己紹介
第2回	仲間作り	1円玉のありかを探せ
第3回	話の聴き方・伝え方	ロールプレイング「3種類の話の聴き方」
第4回	話の聴き方・伝え方	様々な質問の仕方(クローズド・クエッション、オープン・クエッション、5W1H)
第5回	問題解決の方法	5段階プロセスによる問題解決
第6回	全体シェアリングによる振り返り 自由討論によるプログラム評価と自己への気づき	

4. 結果と考察

前述で述べた「振り返りシート」の回答結果を、図1～6で示した。全体を通して回が進むにつれ評価が高くなっており、プログラムの転移効果が認められた。ただし、第6回についてはいづれの項目も評価が下がっている。これは、その回の内容がそれまでのエクササイズの演習というスタイルではなく、プログラム全体を通してのシェアリング、すなわち感想の報告や意見交換であったためだと考えられる。生徒にとってはフォーマルな形式によるディスカッションよりも、レクリエーション的な要素を含んだエクササイズを通した活動の方が、リラックスした自己開示、筆者らが意図したねらいに対する機能的学習を果たしていたことが窺われる。

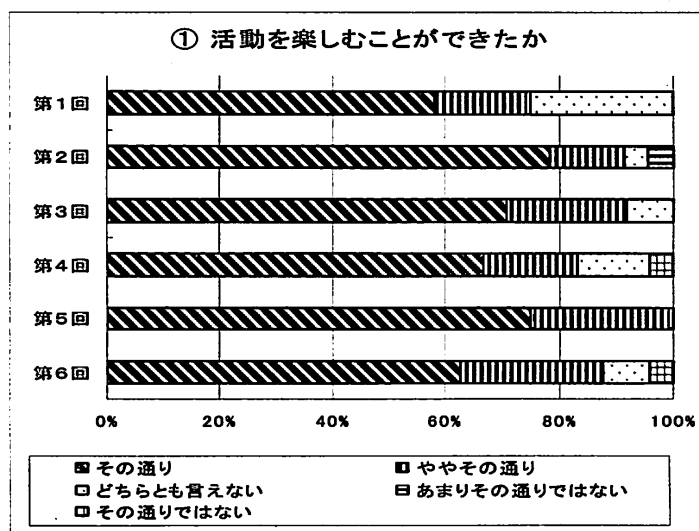


図 1 「①活動を楽しむことが出来ましたか」の回答

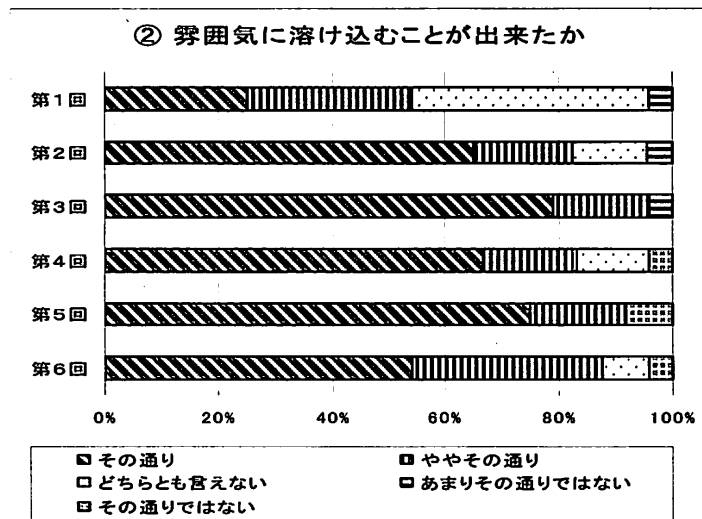


図 2 「②グループの雰囲気になじめることが出来ましたか」の回答

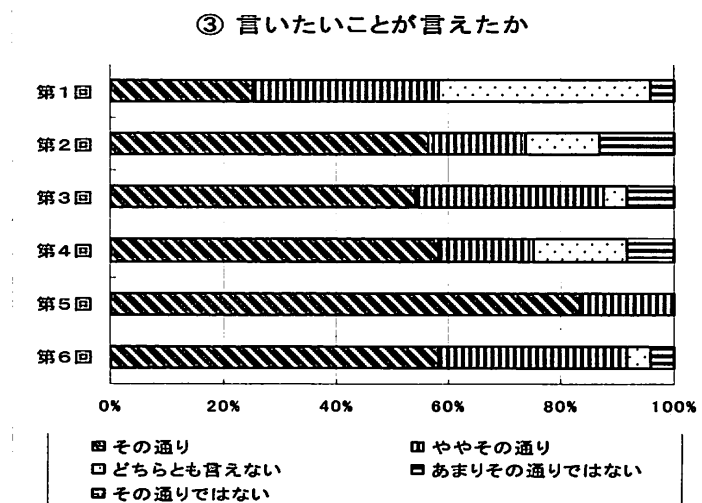


図 3 「③活動において、自分の言いたいことが言えましたか」の回答

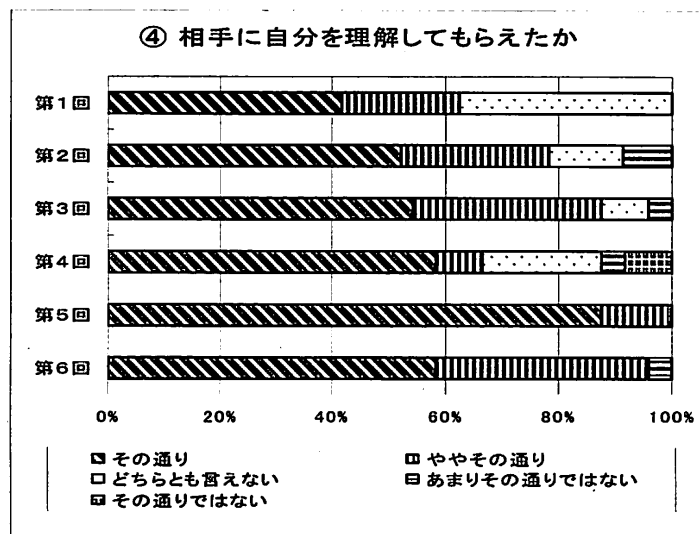


図 4 「④活動において、相手に自分を理解してもらえたと感じますか」の回答

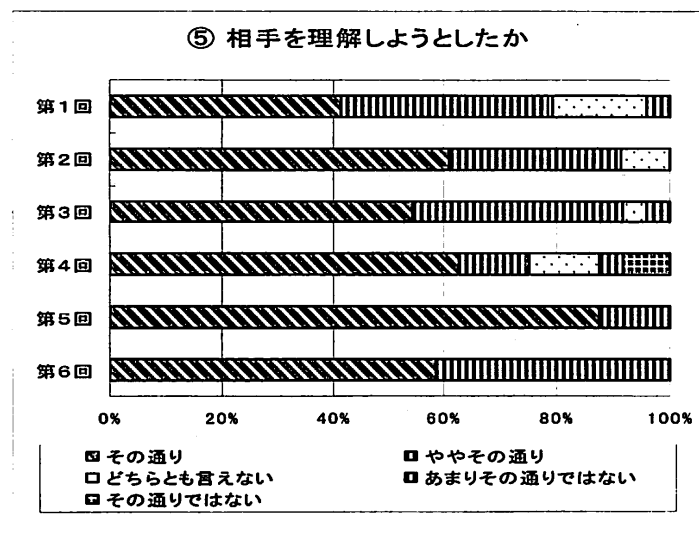


図 5 「⑤活動において、相手を理解しようとしたか」の回答

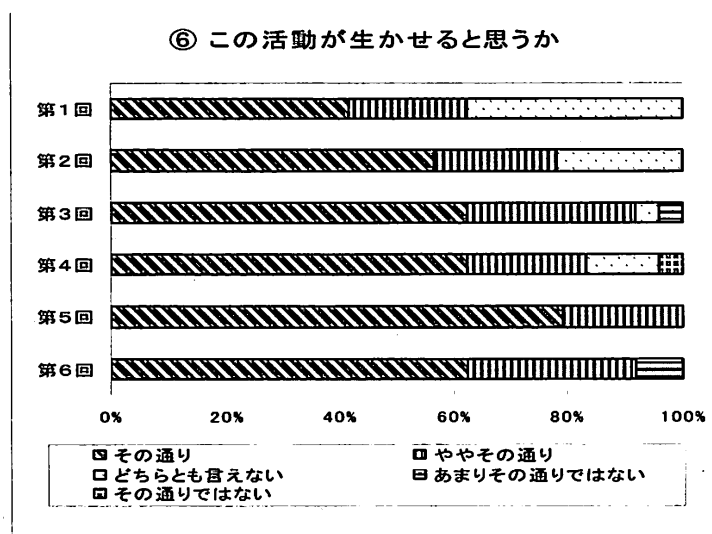


図 6 「⑥今後、この活動は何かに生かせると思いますか」の回答

次に、項目毎の変容を考察する。「①活動を楽しむことが出来ましたか」については、第2回以降全ての回で「その通り」また「ややその通り」の合計が80%を越えており、第1回も78%がそのように回答している。このことから生徒たちは、おおむね楽しみながらプログラムに望んでいたと思われる。ただし、第4、6回では「その通りではない」と回答する生徒が若干存在した。これらの回のエクササイズはいずれも理論的また実存的（＝感覚で楽しむというよりも、自分自身と向き合う）要素が大きく、生徒によっては取り掛かりにくい面を有していたとも推察される。

しかし、「②グループの雰囲気に入れ込むことが出来ましたか」については、「その通り」また「ややその通り」の回答の合計が、約55%であった。第2回以降そのパーセンテージは80%を越えているものの、第4回以降は「その通りではない」と回答する生徒たちが見受けられた。当然のことではあるが、われわれがこのようなプログラムを実施する際には全員が“やる気満々”であるとは限らないことに気を配る必要がある。また、雰囲気に入れ込めない理由は、個々人で異なるであろう。しかし、ファシリテータの態度・雰囲気、ウォーミング・アップおよび活動で用いるエクササイズの内容について、さらに検討する必要がある。

「③活動において、自分の言いたいことが言えましたか」と「④活動において、相手に自分を理解してもらえたと感じますか」については、第1回で③について「その通り」と回答した生徒が20%強であった。「ややその通り」までを含めると60%弱まで数値は上がり、第5回で「その通り」と「ややその通り」の合計が100%となっているが、全体として満足度が低い感がある。またそれに伴うかのように、④の自分を理解してもらえたと感じる数値の度合も伸び悩みを示している（第5回は「その通り」と「ややその通り」の合計が100%、）。諸富(2006)は、「今日の小・中学生がいじめの対象となることを恐れ、以下に個性を出さず穏便に日常を過ごそうとしているか、また仲間関係と言うサバイバルゲームではじき出されないよう気を使っている」ことを指摘している。筆者らは、附属中学校において生徒同士のささいなトラブルがあることを承知しているものの、重大ないじめがあるとは認識していない。しかし、ともすると生徒たちは今日の子ども（生徒）文化・風潮の中で、自分の本音を表現することを押さえているのかも知れない。今後、さらに生徒一人ひとりとの面談やかかわりの中で、彼らの心理特性を理解するよう努め、自己表現を引き出していく方法を検討する必要がある。

一方、「⑤活動において、相手を理解しようとしたか」については、第1回から「その通り」と「ややその通り」の合計で約80%の数値が示されている。第4回でその合計は67%と下がるものの、前述の③・④に比べ高い水準を有している。また、第4回で「その通りではない」の回答が約10%見受けられるが、自由記述の回答からエクササイズの性質が影響しているとも考えられる。すなわち、「話の聞き方（質問の仕方）」について、相手を理解するよりもどのように質問したらよいのかといった自分の技術的な側面に意識を寄せていた生徒のいたことが示唆された。全体としては、このプログラムに参加した生徒たちが質問の仕方というテクニカルな事柄を考えつつも、相手を理解することに努力していた様子が窺われる。

「⑥今後、この活動は何かに生かせると思いますか」については、第1回で40%弱、第2回で20%強の生徒が「どちらともいえない」と回答している。また、第4回では「その通りではない」と「どちらともいえない」の合計で、20%弱を占めている。これらは、全体的に用いたエクササイズが直接の日常場面を想定しにくい内容が多かったことが要因として推察される。すなわち、生徒たちは筆者らがエクササイズを通して伝えたかった事柄というよりも、エクササイズの内容を想定して回答していたとも考えられる。また、第4回のエクササイズに対しては、自由記述で「難しかった」との回答

が6人から寄せられている。このことから、今後エクササイズの内容がどれ程生徒たちに身に付いたのか、還元すれば機能的な使用が可能になったのかについて、フォローアップする必要がある。また、今回のプログラムでは時間的な制約から、各エンササイズは1回限りの実施であった。今後、他の教師との連携を取りながら、何らかの時間を見繕いながら、反復していくことについての検討を考えて生きたい。

5. まとめと今後の課題

以上、学校教育相談部門では附属中学校を舞台として、ピアサポーター養成プログラムを実施してきた。そもそも、このプログラムの導入は、4年前に生徒側から養護教諭に対し、いじめのような状況があり、自分たちで何とかしたいとの相談が寄せられたことからはじめられた。すなわち、単純計算ではあるが合計で320人（4年×8スパーン）が本養成プログラムを受けたことになる。このような取り組みは、前述の通り「草の根的に広がっていく性質」を有しているため、今後も改良を加えながら継続していくことが望ましいと考えている。

[文 献]

- 稲垣応顕・塚野州一・神川康子・姜信善・濱谷昌代・島田みどり・岩田万里子・松原祐子(2004)富山大学スクラムプランナー学校バリアフリーへの挑戦—2003. 119-128
- 諸富祥彦(2006) 生きるのがつらい。日本評論社
- 滝 充(2002a) ピア・サポートではじめる学校づくり 実践導入編。金子書房
- 滝 充(2002b)「日本のピア・サポートプログラム」とスクールカウンセラー 臨床心理学, 2(1), 78-82

付 記 : 本研究のファシリテータ・サブファシリテータは、松井理納、飯塚瑠美子、神田奈々子、中野利裕志、吉井愛子、臼木博美、長谷川真紀、東本美佳、の学生が行なった。

交流（幼小連携）部会の取り組み

代 表 者 小林 真（人間発達科学部）
メンバー 廣田 仁美・福江 厚啓（附属幼稚園）
松井 昌美（附属小学校）

1. 今年度の取り組み

平成 18 年度は、幼稚園と小学校がそれぞれの研究のほかに生活・総合学会の開催校となっていた。そのため、部会として研究に取り組む時間が十分にとれなかった。今年度の大きな活動としては、幼稚園の研究会（保育フォーラム）のシンポジウムの中で、幼稚園と小学校の連続性を話題に取り上げたことがあげられる。また、部会の代表者（小林）が仲介となって、幼稚園と小学校の連携をどうするかという意見交換の機会を持った。

2. 保育フォーラムにおけるシンポジウム

(1) シンポジウムの概要

保育フォーラムは、平成 18 年 10 月 27 日（金）に附属幼稚園で公開保育と年齢別の協議会が行われた。午後からは附属小学校の多目的ホールに会場を移し、幼稚園の研究概要の発表とシンポジウムが行われた。シンポジウムの概要は次の通りである。

テ ー マ : 集団の中で育つもの
企画・司会者 : 小林 真（人間発達科学部）
話 題 提 供 者 : 松井 昌美（附属小学校）
尾崎 康子（附属人間発達科学研究実践総合センター）
宮崎 州弘（富山短期大学）

企 画 主 旨 :

集団の中で子どもの関係性がどのように育っていくのかを総合的に検討する。そのため、3人の話題提供者に発表をお願いした。松井氏からは、小学校における生活科の実践を紹介してもらい、関係性の広がりについて幼児教育との連続性を具体的に検討する。次に尾崎氏には発達臨床心理学の立場から、乳児期から学齢期までの関係性の発達について紹介してもらう。宮崎氏には、教育課程という立場から、幼児教育と小学校教育を通して関係性を育むカリキュラムをどう考えるかについて話題提供をしてもらう。



小林(左)と宮崎氏

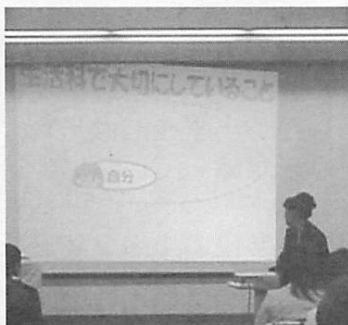
(2) 松井氏の話題提供から

生活科は小学校1・2年生だけの教科で、「身近な人々・社会及び自然とのかかわりを通して、自分自身を作り上げていく」という自立への基礎を養う学習である。生活科は、幼稚園・保育所との橋渡しになるだけでなく、低学年の学習、学校生活の核となる教科である。

教師との出会いは大切で、これは幼稚園の年少組で「教師との暖かい関係作りから安心して学校生活をスタートする」という思いと共通するものである。今回報告した

実践では、担任が子どもひとりひとりと握手し、名刺を渡したことをきっかけに、子どもたちも自分で名刺を作りたい、友だちに渡したいという思いが高まった。

また、子どもの思いを取り入れた学習として、屋上の探検がある。鍵がかかっていて屋上に出入りできなかったときに、ある子どもは「屋上はね、風が気持ちよくて、景色もよくて、最高なんだよ」と自分の思いをクラスみんなに伝えようとした。みんなも屋上に行ってみたい気分になり、屋上に出たときに守るべき約束を話し合った。そして、校長先生に自分たちの思いを伝えて、屋上に出る許可をもらうことができた。担任が勝手に屋上への鍵を開けるのではなく、「屋上に出たい」という思いを伝え合って、みんなで共有してから屋上に出られるように手はずを整えた。このように、伝え合うことによってひとりひとりの思いを共有し、自ら動き出す子どもたちを育てていくことが生活科の大きなねらいである。



松井氏のプレゼンテーション

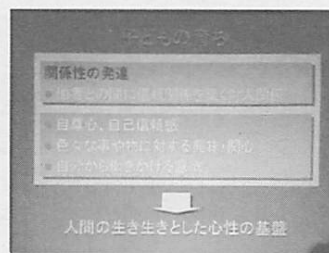
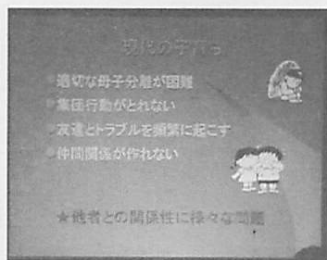
(3) 尾崎氏の話題提供から

今日の保育現場では、子どもの関係性がうまく発達していないことがよくある。現代の子どもたちに見られる問題は、適切な母子分離が困難、集団行動が取れない、友だちとトラブルを起こす、仲間関係が作れないなどの形で表れる。関係性とは「他者との間に信頼関係を築く人間関係」であり、それをもとに「自尊心(自己信頼感)」、「いろいろな事物に対する興味・関心」、「自分から働きかける意欲」といった心の育ちがある。以前ならば幼稚園入園の段階で関係性に基づいた心の育ちがあったが、現在ではそれが十分に育っていない。

関係性の発達には、子どもが生まれた瞬間から始まる。新生児が見せる微笑みや人の顔に対する注視、大人の表情や仕草のまね（厳密には、模倣ではなく共振性）など、これらは全て赤ちゃんの関係性を示す行動である。そこから、特定の人だけを求める人見知り（8ヶ月不安）や親子の気持ちの通い合いを経過して、愛着関係が成立していく。愛着の形成のためには、赤ちゃんが「ああ、私の言ったことをお母さんがわかってくれた」「嬉しい」といった気持ちの共有が欠かせない。そして4歳半頃までに周りの人の考えがわかるようになっていく。つまり子どもの心は、母子の気持ちが交流する8ヶ月あたりから、4歳半まで少しずつ育っていくのである。

愛着の形成をもとに良好な対人関係ができれば、今度は様々な経験を積んで対人関係を深め、広げていくことが大切である。そのために集団がとても重要になってくるのである。幼稚園教育で何ができるかという点、ソーシャルスキル・トレーニングをわざわざやらなくても、幼稚園には豊かな遊びの世界がある。たとえばある保育の事例では、子どもの描画活動に先生がイメージを共有して、筆を通して心をつなぎ合うことがあった。また、五感をフルに活用しながら心を閉ざした子どもの心を少しずつ

広げていき、先生や友だちと感覚を共有しながら。心をつなげていく活動もある。



尾崎氏のプレゼンテーション

(4) 宮崎氏の話題提供から

幼稚園・保育所と小学校の連携を考える上で、まず制度（法令）の問題がある。学校教育法の上で、中学校は「小学校教育の基礎の上に」、高等学校は「中学校教育の基礎の上に」それぞれの学校の教育目標が掲げられている。しかし小学校にはそれがない。つまり、制度そのものが幼児期と小学校教育のつながりを意識していないという問題がある。

次に、教育課程の設計のしかたを考える必要がある。一般に小学校の1・2年生を低学年、3・4年生を中学年、5・6年生を高学年と分類している。しかし上越市のある小学校では、1年生を入門期、2・3年生を発展期、4年生以上を拡充期と分けて、子どもたちの発達段階に応じた教育をしようと試みた。こうした考えに則れば、1年生が小学校教育の入門期としてとても重要になってくる。

（小林との質疑の中で）

小林 教科中心の学習指導と体験的な学習のどちらかではなく、両方をバランスよく取り入れ、どのように平衡点を考えてカリキュラムを作っていけばよいのか？

宮崎 発達段階に即して言えば、年少時には体験や経験、生活そのものが中心になるのは当然で、徐々に系統的な教科が出てくる。今日の日本のカリキュラムはおおむねそういう風になっている。従来は教科が中心であったが、現在は生活科や総合的な学習が入ってきて、バランスはよくなったと思う。ただ、入試などで総合や生活科で培った学力が測られていないという問題はある。

（発表の要旨は、附属幼稚園による記録をもとに、小林の責任で要約した）

(5) シンポジウムに参加した保育者の感想

フォーラムについてのアンケートの中から、シンポジウムに対して寄せられた感想をいくつか掲載する。回答者はいずれも保育士である。小学校の教育の様子を日常的に見ることが少ない保育士からは、特に小学校の実践報告に対して好意的な感想が寄せられた。

- ・ 小学校での関係性を広げていく事例を詳しく話され、とても分かりやすかったです。小学校の先生が、幼稚園での基ばんをしっかりと理解し、子どもたちの人間関係を広げていくために、すごく愛情を持ってかかわっているなと思いました。低学年の子だからこそ、人と人との信頼関係というのは、大切にしなければいけないと感じました。
- ・ 幼児期だけでなく、低年齢や小学校での関係性について話を聞くことができてとて

も勉強になった。又、テーマが一貫していたことで相互の違いも共通点も知ることができた。

- ・ 3人の先生のお話を聞かせていただいてとても勉強になりました。教師との安定した関係を作ることによって集団の中に入りやすくなる点は、幼・小で関係のないことなんだと言うことがよくわかりました。
- ・ 幼稚園と小学校との連携について、小学生になってからのとりくみや子どもの姿について知ることができてよかった。年長までだけでなく小学校へ上がってからのことも考えながら日々保育していくことが大切だなあと学びました。
- ・ 実際の現場（小学校）の話が聞けてよかった。こうして子どもの関係性が発達するんだなあと感じた。
- ・ 松井先生のクラスの子どもさん達のいきいきとした表情が素敵でした。配慮が素晴らしいです。元気な一年生になれるよう、園でも心したいと思います。

（ほか多数。表記は原文のまま）

3. 幼小連携に関する意見交換と今後の課題

情報交換の中で寄せられた意見には、次のようなものがあった。

○小学校から見て○

集団生活を送る上で、やはり気になる子どもはいる。そうした子どもの特徴やこれまでの支援のあり方について、ある程度の情報は事前にほしい。また、子ども自身の様子は学級で観察すればわかってくるが、保護者との連携を進めていくためには、幼稚園が保護者にどのように対応していたのか、という情報もあるとなおよい。

○幼稚園から見て○

保育の中で気になっていた子どもの情報は、ある程度は進学する際に伝えていると思う。しかし、1年生の担任が決まるのはそのあとなので、幼稚園から伝えた情報が実際にどのくらい担任に伝わっているのかについてはよくわからない。小学校の中のことなので、どんな情報が伝わっているのかについて、これまで幼稚園では踏み込んで検討してはいなかった。

○今後の課題○

意見交換で見られたように、やはり子どもの様子をじかに見て、幼稚園教諭と小学校教諭が顔を合わせて子どもの実態と教育方法について協議をしていく必要がある。そのためには、教師同士の交流の機会を年間のスケジュールに組み込んでおかないと、双方のスケジュールが合わないままに時間が過ぎてしまう。

そこで19年度は、早々に一度は授業見学に行く時間を取り、子どもの様子について協議する機会を持つ予定である。4月のうちは、幼稚園の子どもが降園したあとに、1年生の午後の様子を少しだけでも見せてもらい、夕方に話し合う時間を持ちたい。そうすることで、実際の子どもの姿を両者が共有した上でのカンファレンスができる。幼稚園側としては、1年生がどのような学校生活を送っているのかを実際に見ることで、年長児の教育課程を編成する参考にできる。

また、3学期になってから、入学予定の子どもについて小学校の関係者にも保育の様子を見に来てもらいたい。そして、子どもの姿を共有しながら話し合う時間を取りたいと考えている。

（文責：小林真）

交流グループ報告

代 表 者	書川 隆行			
附属養護学校	檜木 哲也	飯島 貴英	北川 雅恵	脊戸 みちる
学 部	平川 毅彦	水内 豊和		

1. 今年度の取り組み

今年度の交流グループの取り組みは以下のとおりである（主なもののみ）。

平成18年 8月 30日 本年度の交流学習の取り組みの確認

平成18年11月 6日 交流教育の理論と実際

平成19年 1月 12日 地域交流 小学部もちつき会

平成19年 1月 29日 小学部もちつき会報告

平成19年 3月 6日 本年度の交流グループの取り組みの評価と課題

ここでは、今年度の交流グループで行った活動について、その取り組みの評価と今後の課題について述べる。

2. 交流グループの取り組みの評価と課題

（1）交流教育の理論と実際

＜高志養護の実践より＞ 平川

・なぜ成功したか。

→地域に密着していた。PTAの参加。負担が少ない方法。

＜富山大学および富山福祉短期大学フロアバレーサークルと盲学校の交流より＞ 水内

・どんな条件であれば対等にできるか。

→目隠しして同じ条件にする。なぜそのようなルールなのかを体験を通して熟考する。

＜知的障害のある児童・生徒が、交流教育をすることの意義を考える＞

・知的障害のある人との交流で大切なことは。

→障害を理解する。同じ話題を話せる。（音楽など）過ごす時間を長くする。同じメンバーで続ける。交流学習の目的は、行う人（特に養護学校生）にどうして交流が必要なのかをよく考え、またその人にどのような成果があったのかを考える必要がある。つまり個別の指導計画との関係性が重要になる。

(2) 小学部もちつき会の交流について（資料1）

・質疑応答

Q 個別の指導計画でねらう個々の指導目標と、交流の内容とが関連するか。

A 名前を覚えてから、話をする等コミュニケーション面での成果はあった。

Q 「会話を楽しむこと」はできたか。

A 自分から、お年寄りの方に話しかける等関わっていく場面が見られた。

Q 事前学習はどのように行ったか。

A 前日に教室で日程、内容、参加者等を話した。

Q 今後、個人個人にどのようなねらいを持つことができるか。

A 異年齢の方と話し方をねらう。体作りの活動に参加してもらう。

3. 来年度の方向性について

- ・年3回程度の勉強会を行う。
- ・交流学习を児童生徒、教師が負担なく続けられる内容を考える。
- ・来年度も引き続き、現在行っている交流学习を中心に、その活動で個人が何をねらうかを明確にした取り組みを行う。
- ・交流学习は目的ではなく、特に養護学校生にとっては個々の指導目標を達成するための手段の一つとして位置づけて考える必要がある。

<資料1>

共同研究プロジェクト 交流部会資料
「小学部もちつき会」について（報告）

I. 「もちつき会実施計画」及び対象児童におけるねらい等

平成18年度 小学部もちつき会実施計画	
1. 活動の目的	<ul style="list-style-type: none">・もちつきを体験する。・みんなで協力して、餅を作り、会食する。・地域に住んでおられるお年寄りと交流する。（艘友会の方5～10人ぐらい来校）
2. 日 時	平成19年1月12日（金） もちつき9時30分～ 会食10時30分～
3. 場 所	遊戯室
4. 日 程	<ul style="list-style-type: none">①あいさつ（児童代表、艘友会代表）②もちつきの歌③準備（手洗い等）④説明・デモンストレーション（艘友会）⑤もちつき体験⑥会食⑦あいさつ（児童代表、艘友会代表）⑧片付け
5. 会場図（遊戯室）	

○対象児童：小学部3年 男子3名

○個々の子どものねらい：

【A児】艘友会の方々の名前を覚え、進んで話をしたり、一緒に活動したりすることができる

【B児】艘友会の方々の名前を覚え、進んでもちのつき方を教わったり、会話を楽しみながら会食をしたりすることができる。

【C児】艘友会の方々の名前を覚えることができる。

○方 法：事前に艘友会の方々の写真を見ながら名前を覚える。当日は名札をつけてもらう。

Ⅱ. 活動報告

- ・ 交流のねらいに向けた取り組みはほとんどできなかった。
- ・ A児が、自発的にねらいを達成していた。

＜ねらいの達成が不十分であった原因＞

- ①当日来られる艘友会の方々のメンバーが固定しない。
- ②写真の入手が難しい。
- ③名札を記入する時間がない。
- ④会そのものが小学部として縮小傾向にあり、時間に余裕がない。
- ⑤B児、C児はもちをついたり食べたりすることで精一杯で、環境設定が難しい。



Ⅲ. 今後の課題

年に1度、しかも縮小傾向にあるもちつきでは、ねらいに向けた環境設定や、継続的な取り組みが難しい。今後は、違う形式での交流の在り方をさぐっていかねばと思う。



富山大学人間発達科学部・附属学校園
共同研究プロジェクト 平成18年度報告書

富山大学スクラムプラン
－ 学校バリアフリーへの挑戦 2006 －

発行日 平成19年3月30日

発行所 富山大学人間発達科学部

〒930-8555 富山市五福 3190

TEL 076-445-6251 (総務係)

FAX 076-445-6264

富山大学人間発達科学部附属学校園

〒930-8555 富山市五艘 1300

TEL 076-445-2800 (事務室)

FAX 076-445-2802

発行人 富山大学人間発達科学部 学部長 山西潤一

印刷所 中央印刷株式会社

〒930-0817 富山市下奥井 1-4-5

TEL 076-432-6572 (代)

FAX 076-432-2329



富山大学人間発達科学部

〒930-8555

富山市五福 3190

☎ 076-445-6251（総務係ダイヤルイン）

富山大学人間発達科学部附属学校園

〒930-8556

富山市五艘 1300

☎ 076-445-2800（事務室ダイヤルイン）